参考資料３－１

常願寺川水系河川整備基本方針

常願寺川水系の流域及び河川の概要（案）

令和　　年　　月

国土交通省　　水管理・国土保全局

目　次

1. 流域の自然状況 1

1.1 流域及び河川の概要 1

1.2 地形 4

1.3 地質 6

1.4 気候 9

2. 流域及び河川の自然環境 11

2.1 流域の自然環境 11

2.2 河川及びその周辺の自然環境 12

2.3 特徴的な河川景観や文化財等 31

2.4 自然公園等の指定状況 42

3. 流域の社会状況 44

3.1 土地利用 44

3.2 人口 46

3.3 産業と経済 47

3.4 交通 49

3.5 関係法令の指定状況 50

4. 水害と治水事業の概要 51

4.1 既往洪水の概要 51

4.2 治水事業の沿革 59

4.3 流域治水の取組 65

5. 水利用の状況 67

5.1 水利用の現状 67

5.2 渇水被害の概要 71

6. 河川の流況と水質 72

6.1 河川流況 72

6.2 河川水質 76

7. 河川空間の利用状況 78
7.1 河川の利用状況 78
7.2 河川敷の利用状況 79
8. 河道特性 80
8.1 河道特性 80
8.2 河床の経年変化 82
9. 河川管理の現状 83
9.1 管理区間 83
9.2 河川管理施設 84
9.3 水防対策 85
9.4 危機管理の取り組み 87
9.5 地域との連携 91

1. 流域の自然状況

1.1 流域及び河川の概要

常願寺川は、富山県南東部に位置し、その源を富山県と岐阜県の県境の北ノ俣岳（標高 2,661m）に発し、立山連峰の山間部にて称名川、和田川等の支川を合わせながら流下し、富山平野の扇状地に出て北流し、富山市東部を経て日本海に注ぐ、幹川流路延長 56km、流域面積 368km^2 の一級河川である。

その流域は、県都富山市、立山町の 1 市 1 町からなり、流域の関係市町の人口は平成 22 年（2010 年）の約 45 万人をピークに令和 2 年（2020 年）は約 44 万人となり横ばいであり、高齢化率は昭和 55 年(1980 年)において 10%であるのに対し、令和 2 年(2020 年)は 30%であり、大きく変化している。流域の土地利用は、山林等が約 96.1%、水田や畑地、宅地等が約 0.9%、河川湖沼が約 3.0%となっている。

常願寺川により形成された下流部に広がる扇状地には、富山県の中心都市である富山市がある。富山市には県全体の約 4 割の人口が集中しており、昭和 39 年（1964 年）に新産業都市として指定されて以来、化学、重工業等の近代産業が発展し、北陸有数の工業地帯が形成され、富山県の産業・経済の中心地となっている。また、北陸新幹線、あいの風とやま鉄道、富山地方鉄道、北陸自動車道、国道８号が横断しており、交通の要衝となっている。

沿川では戦国時代の佐々堤や江戸時代の殿様林、済民堤に代表される治水施設が整備され、近代以降はヨハネス・デ・レーケの計画に基づく河川改修や砂防事業が進められた。さらに、霊峰立山に育まれた雄山神社や立山参道などの歴史・文化資産が現在も受け継がれているなど、常願寺川は地域の歴史と文化の形成に大きな役割を果たし、この地域における社会・経済・文化の基盤をなしている。さらに、流域内は、中部山岳国立公園、有峰県立自然公園に指定される等、豊かな自然を有するとともに、落差日本一の「称名滝」等の景勝地が多く、日本の屋根といわれる北アルプスを貫く「立山黒部アルペンルート」は、年間約 80 万人以上が訪れる国際的にも優れた観光地となっている。また、水質は良好で、富山平野の農業用水、水道用水、工業用水等に利用されており、本水系の治水・利水・環境についての意義は、極めて大きい。

常願寺川流域は、立山連峰を中心とした上流域の山地部、下流域の常願寺川扇状地部によって構成されている。上流域はきわめて急峻な地形をなしており、標高 1,000m 以上の高地が流域の約 74%を占め、北方へ次第に高度を減じて富山平野に続いている。富山平野の中央部を占める常願寺川扇状地は、富山市上滝付近を扇頂として典型的な扇状地形を呈しており、その末端は直接日本海に達している。

地質は中生代ジュラ紀から白亜紀の手取層群の礫岩・砂岩・頁岩、新生代新第三紀中新世の八尾層群の砂岩・泥岩・凝灰岩・火山岩類、立山火山に由来する第四紀火山噴出物等からなり、変化に富みかつ脆弱である。そのため、崩壊地が多数存在し、中でも立山カルデラ内には、現在も膨大な崩壊土砂が堆積している。下流域では上流域から流出した土砂により、常願寺川扇状地が形成されている。また、上滝より下流では、昭和 20 年～40 年代にかけて、天井川の解消のために大規模な河道掘削等を実施しており、現

在では天井川がおおむね解消されている。

常願寺川は我が国屈指の急流河川であり、河床勾配が山地部で約 1/30、扇状地部で約 1/100 と急勾配で、河口まで急流のまま洪水が流下するとともに、堤防が決壊した場合、拡散型の氾濫形態を呈し、広範囲に浸水被害が及ぶ特性がある。また、急勾配であるため、洪水時の流れは速く土砂を多く含み、中小洪水でも洗掘や侵食が進行する。

また、流域は日本海型気候に属しており、年平均降水量は山間部で約 3,000mm、平野部で約 2,400mm となっている。流域の降雪は、暖流である対馬海流により発生する大量の水蒸気とシベリア大陸からの季節風により発生した雲が、富山平野から立山連峰に上昇する際に生じ、特に山間部は有数の豪雪地帯である。常願寺川流域は本州から北海道にかけて脊梁山地の日本海側に連なる豪雪地帯に位置しており、世界的にも低緯度に位置する豪雪地帯となっている。

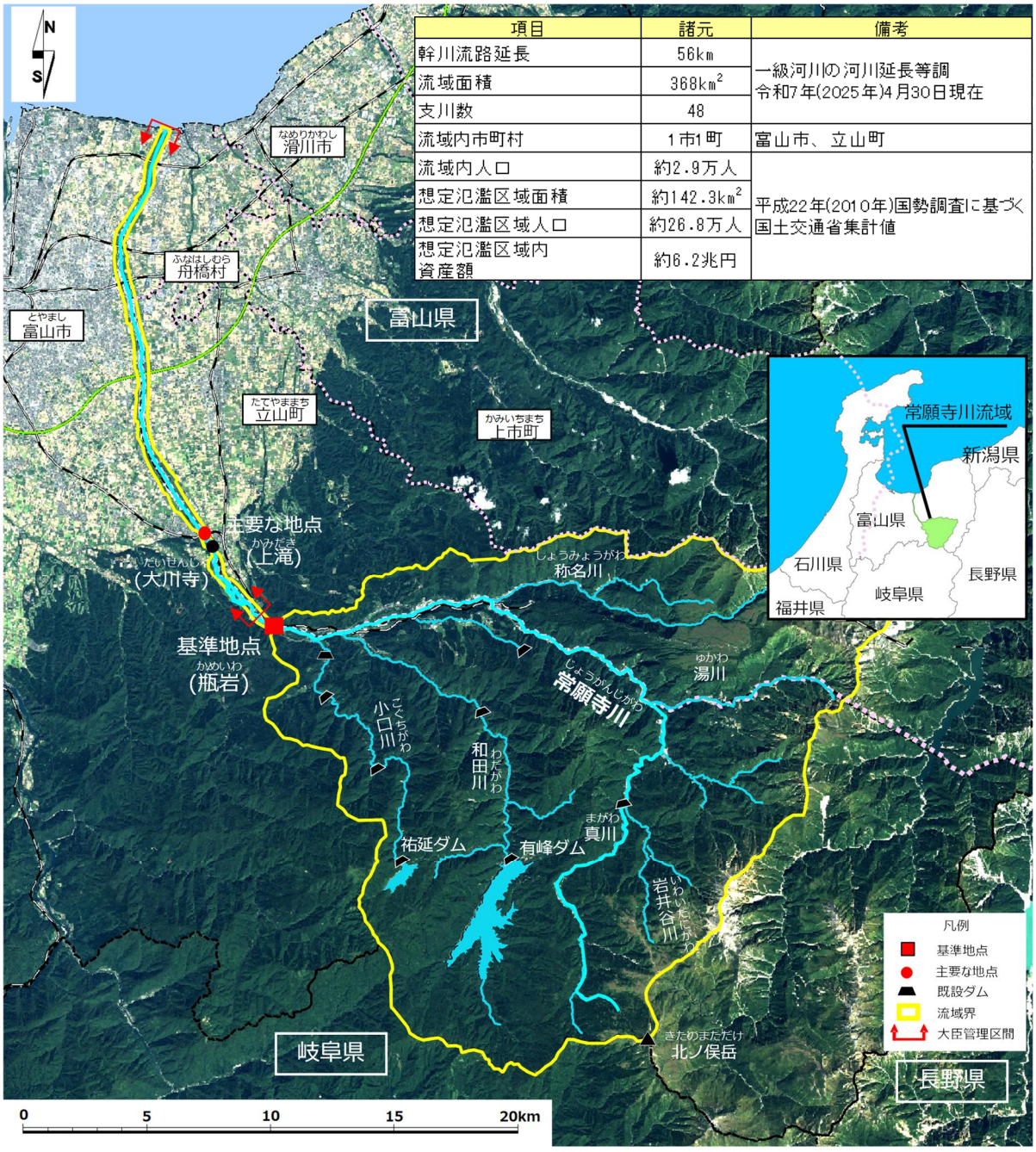

N
S
項目
諸元
備考
幹川流路延長
56km
流域面積
368km²
一級河川の河川延長等調
令和7年(2025年)4月30日現在
支川数
48
流域内市町村
1市1町
富山市、立山町
流域内人口
約2.9万人
想定氾濫区域面積
約142.3km²
平成22年(2010年)国勢調査に基づく
国土交通省集計値
想定氾濫区域人口
約26.8万人
想定氾濫区域内
資産額
約6.2兆円
滑川市
舟橋村
富山市
立山町
上市町
富山県
主要な地点
(上滝)
(大川寺)
基準地点
(瓶岩)
称名川
常願寺川
湯川
小口川
和田川
真川
祐延ダム
有峰ダム
岩井谷川
北ノ俣岳
岐阜県
長野県
常願寺川流域
新潟県
富山県
石川県
長野県
岐阜県
福井県
凡例
基準地点
主要な地点
既設ダム
流域界
大臣管理区間
0
5
10
15
20km

図 1.1 常願寺川流域図

1.2　地形

我が国屈指の急流河川である常願寺川流域の地形は、北アルプス山地、北アルプス縁辺山地、東部丘陵山地を含む東部山地と飛騨高原北縁山地、中部丘陵山地を含む南部山地、及び、呉東平野を含む富山平野からなっている。河床勾配は山地部で約 1/30、扇状地部で約 1/100 であり、我が国屈指の急流河川である。

常願寺川の水源地帯は、北アルプス 3,000m 級の高峰が肩を並べて連なり、壮大な景観を呈している。この山岳地帯を構成する立山連峰は三ツ俣蓮華岳から剱岳に至る壮大な稜線を形成し、常願寺川の東側の分水嶺となっている。

流域内の主要な高峰は、水源の北ノ俣岳（標高 2,661m）、薬師岳（標高 2,926m）、鳶山（2,616m）、鷲岳（標高 2,617m）、浄土山（標高 2,831m）、大汝山（標高 3,015m）、雄山（3,003m）である。

東側の急峻な高山地形に対し、西側の和田川、小口川流域は、北アルプス縁辺山地にあって東部の山地のような高さや険しさはない。和田川と小口川の上流部は中起伏から小起伏山地であり、この付近は、北アルプス薬師、上の岳山麓の谷盆地となっている。

常願寺川が左支川小口川を合流し、山岳地帯を流れ富山市上滝に至る区間は、東部丘陵山地と飛騨高原北縁山地、中部丘陵山地が接し、小起伏山地とその北部に接する第四紀洪積世の砂礫台地が分布する。

富山市上滝から下流では、上流域から流出した土砂により典型的な大扇状地が形成され、富山市街地をのせる平野を構成しているほか、一部区間で天井川となっている。また、河口部周辺は三角州性の低地となっている。

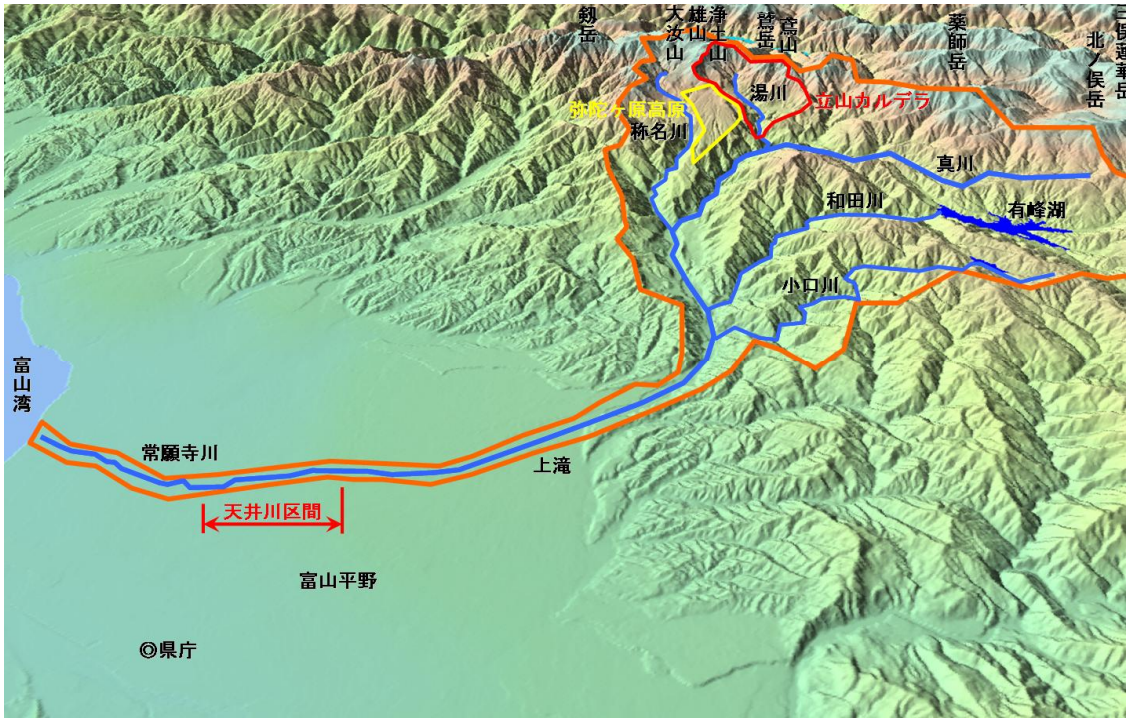
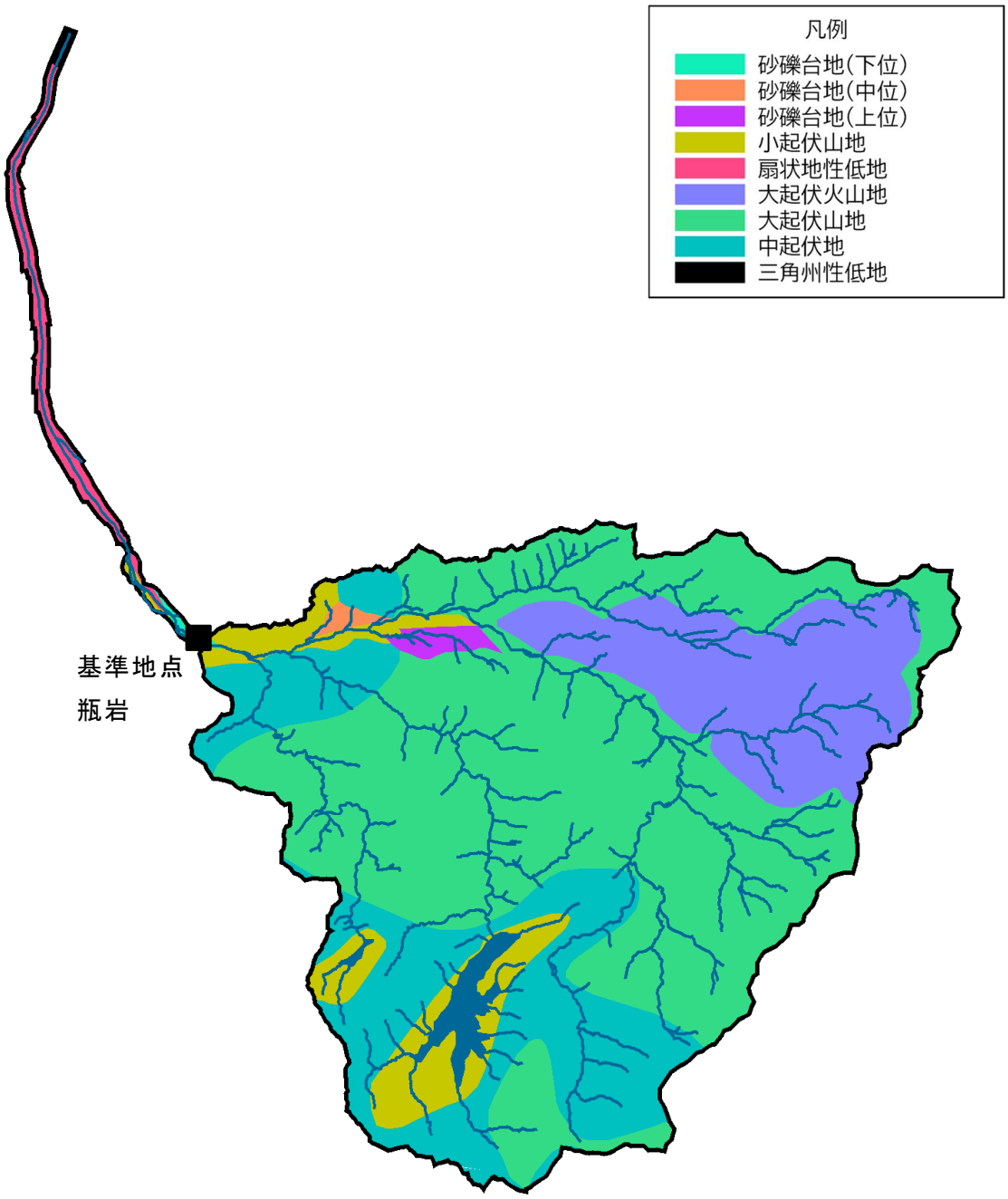


図 1.2　常願寺川流域の地形



出典：国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査）

図 1.3　常願寺川流域地形区分図

1.3　地質

常願寺川流域の地質は、東側の飛騨山脈で古期花崗閃緑岩類、新期花崗閃緑岩類、ジュラ紀手取層群、第四紀安山岩が分布し、西側の飛騨高原北縁部にあたる中流部及び和田川、小口川周辺で手取層、古期花崗閃緑岩類、飛騨変成岩類が分布している。地質年代的にみると、河口部周辺が最も新しく、上流に向かうにつれ、古い地質に移行する。

区間別にみると、扇状地及び河口周辺の平野部は第四紀沖積層の砂礫が堆積している。これらの砂礫は不淘汰な砂礫層となっており典型的な扇状地にみられる地層であるため、常願寺川の水流により上流部から運搬されたものが堆積したと考えられる。現在の扇状地は、過去の常願寺川の流路変動により、地質時代第四紀洪積世以後 4 つの形成時期を経て形成されており、地層の堆積時期もそれに反映して地域により異なっている。また、一部において大洪水の発生に起因する洪水堆積層も分布している。

上滝から千垣周辺の区間は、第三紀中新世の八尾層群の砂岩・礫岩・泥岩・凝灰岩および安山岩やその火山砕屑岩となっている。千垣より千寿ヶ原周辺までの区間は、中生代ジュラ紀・白亜紀の手取層の礫岩・砂岩・頁岩からなる。

上流には立山火山活動による五色ヶ原、弥陀ヶ原などの溶岩台地と立山カルデラがあり、カルデラ壁は急峻で崩れやすく、カルデラ内部の岩石は変質し常願寺川最大の土砂生産地である。

また、立山の西はずれに跡津川断層が走る。この断層は活動的な横ずれ断層で、一度の活動で 2～3m も動いたこともある。この断層のずれによって引き起こされた安政 5 年（1858 年）の大地震は鳶山の大崩壊を起こし、以来、大量の崩壊残土が立山カルデラ内及びその周辺に残り、常願寺川は洪水に伴う土砂流出が激しい荒廃河川となった。

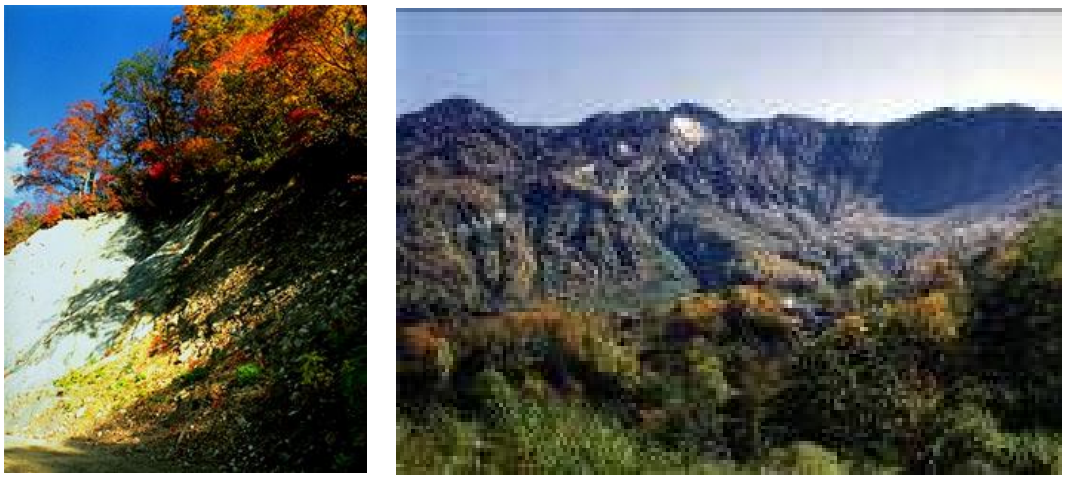
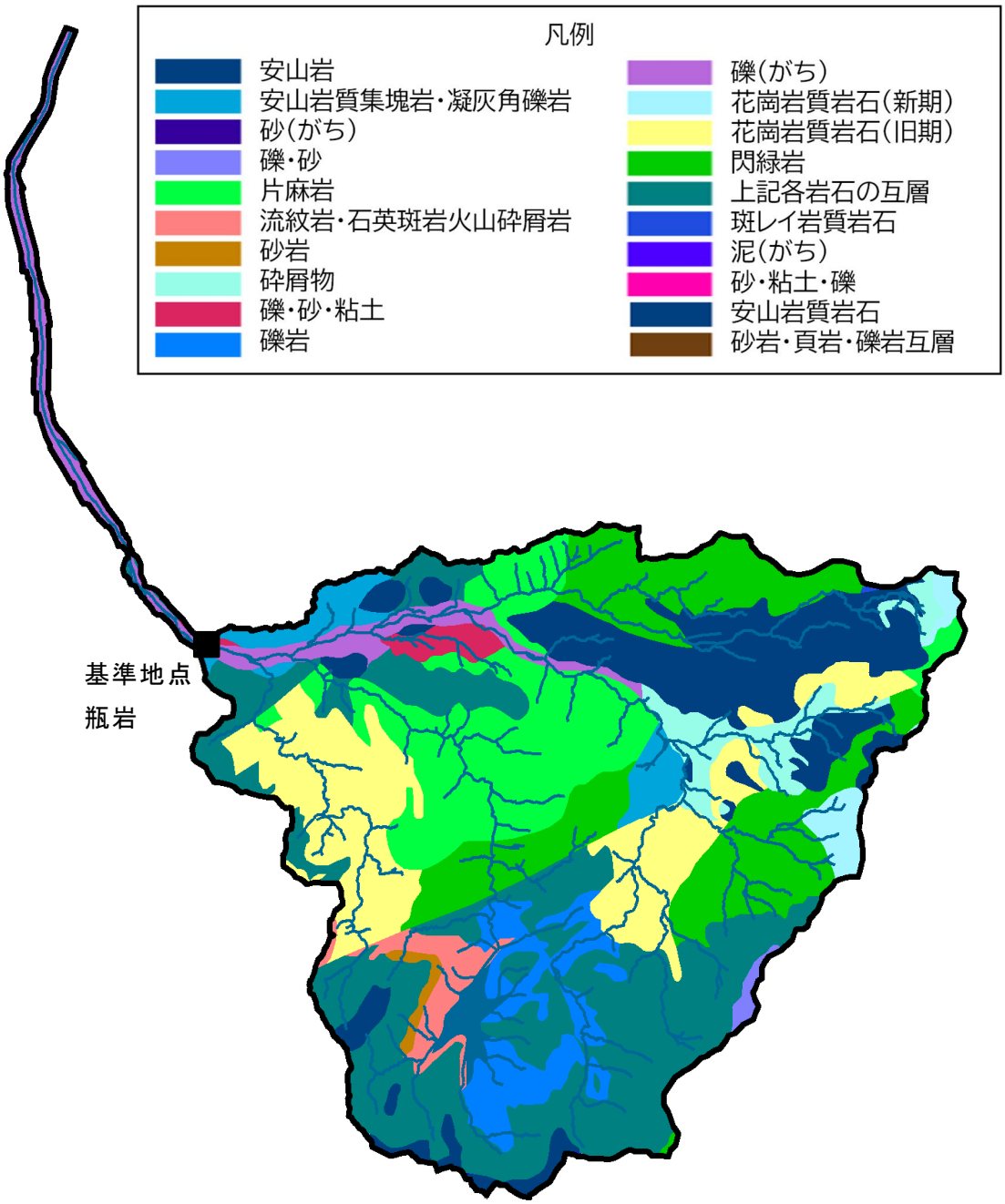
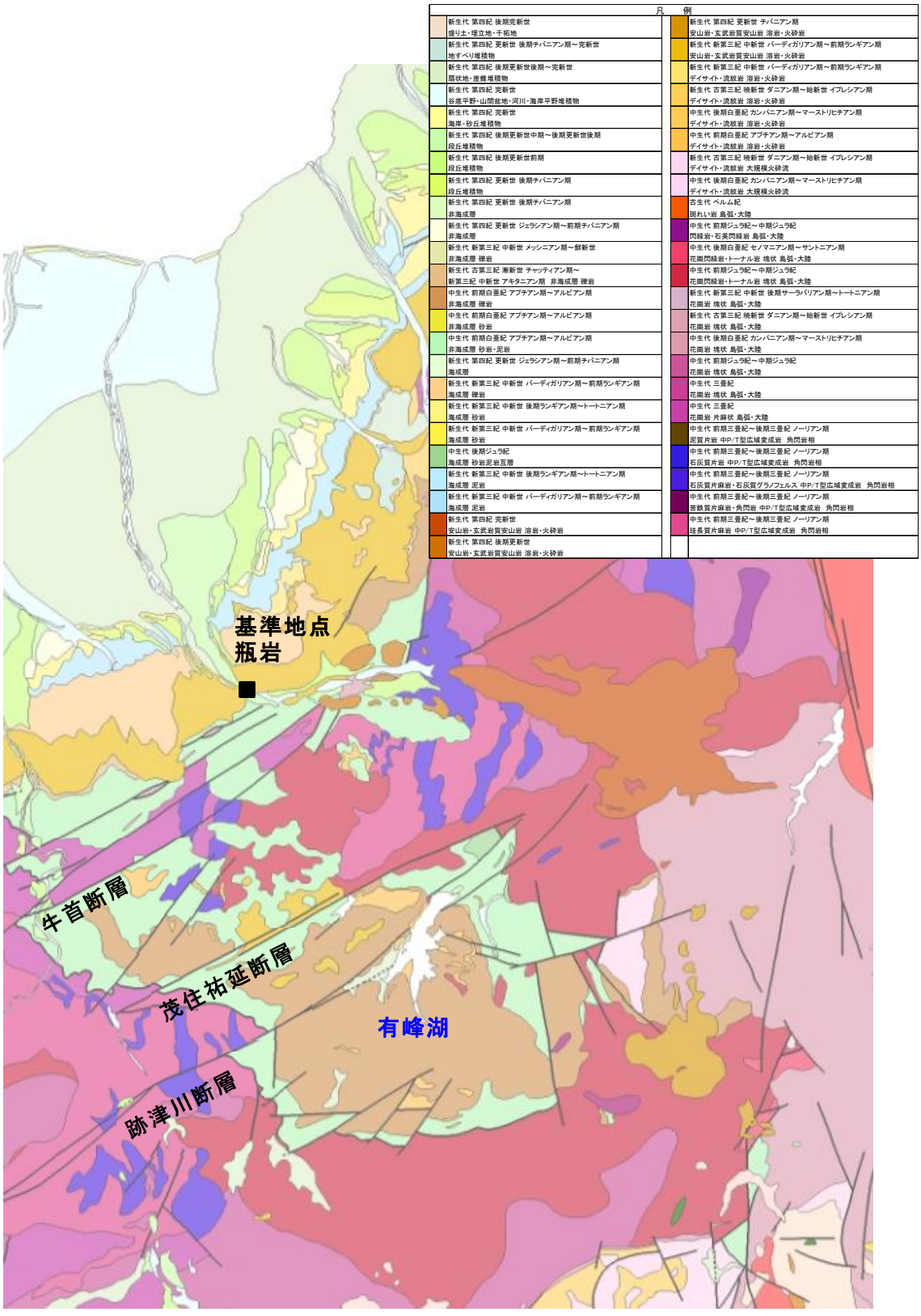


図 1.4　跡津川断層（左）と鳶山（右）



出典：国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査）

図 1.5　常願寺川流域表層地質図



出典：20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2（©産総研地質調査総合センター）に加筆

図 1.6　常願寺川の地質と断層

1.4　気候

常願寺川流域の気候は、冬期における寒冷積雪と夏期の高温多湿を特徴とした四季の変化がはっきりした日本海型気候である。

寒候期は、北西の強い季節風が吹き、北アルプスの影響を受けて降雪量が多い。中でも立山周辺は、我が国屈指の豪雪地帯であり、山頂付近の谷筋では万年雪として残っているところもある。暖候期は、梅雨前線、台風の影響により雨が多い。

年間降水量は、上流域に向かって多くなり、平野部（富山地方気象台）では約 2,400mm、高山地帯（上市観測所）では約 3,000mm を超える。年平均気温は、上市で 11.8℃、富山で 14.5℃となっており、最高気温、最低気温の平均でも、山間部の上市がいずれも 2～4℃低くなっている。

また、最深積雪でも常願寺川上流部近傍の上市は、平成 8 年（1996 年）に 243cm（2 月）となっており、富山の同時期の 80cm に比較しても多くなっている。

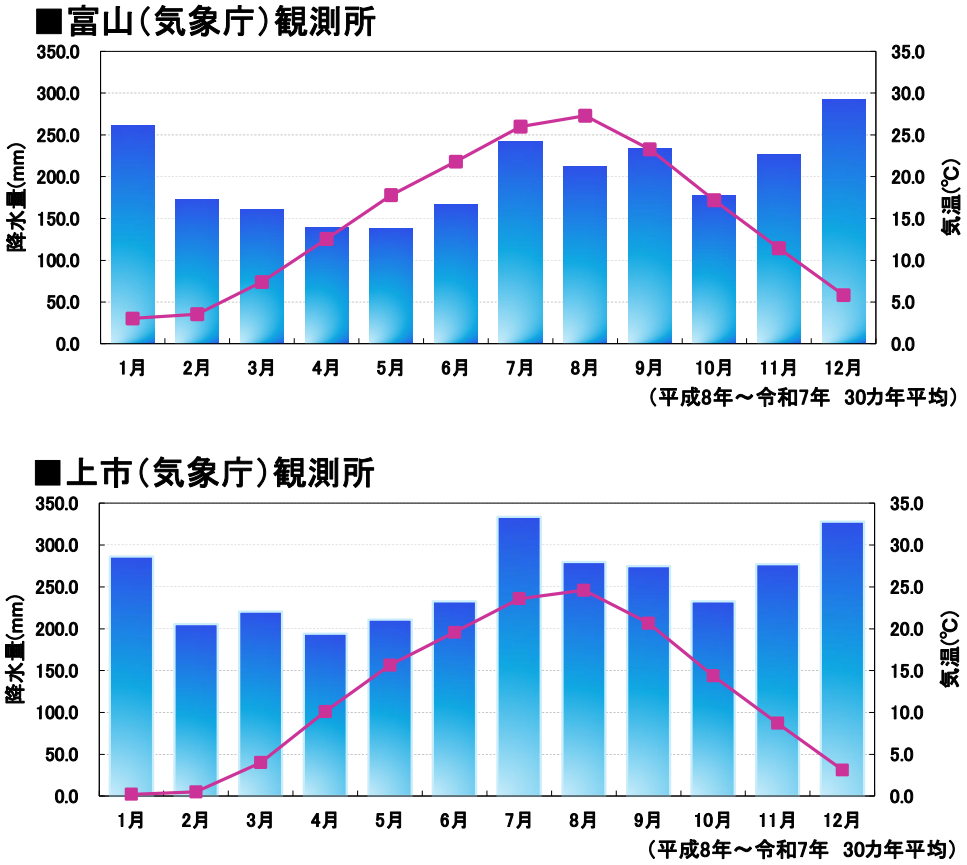
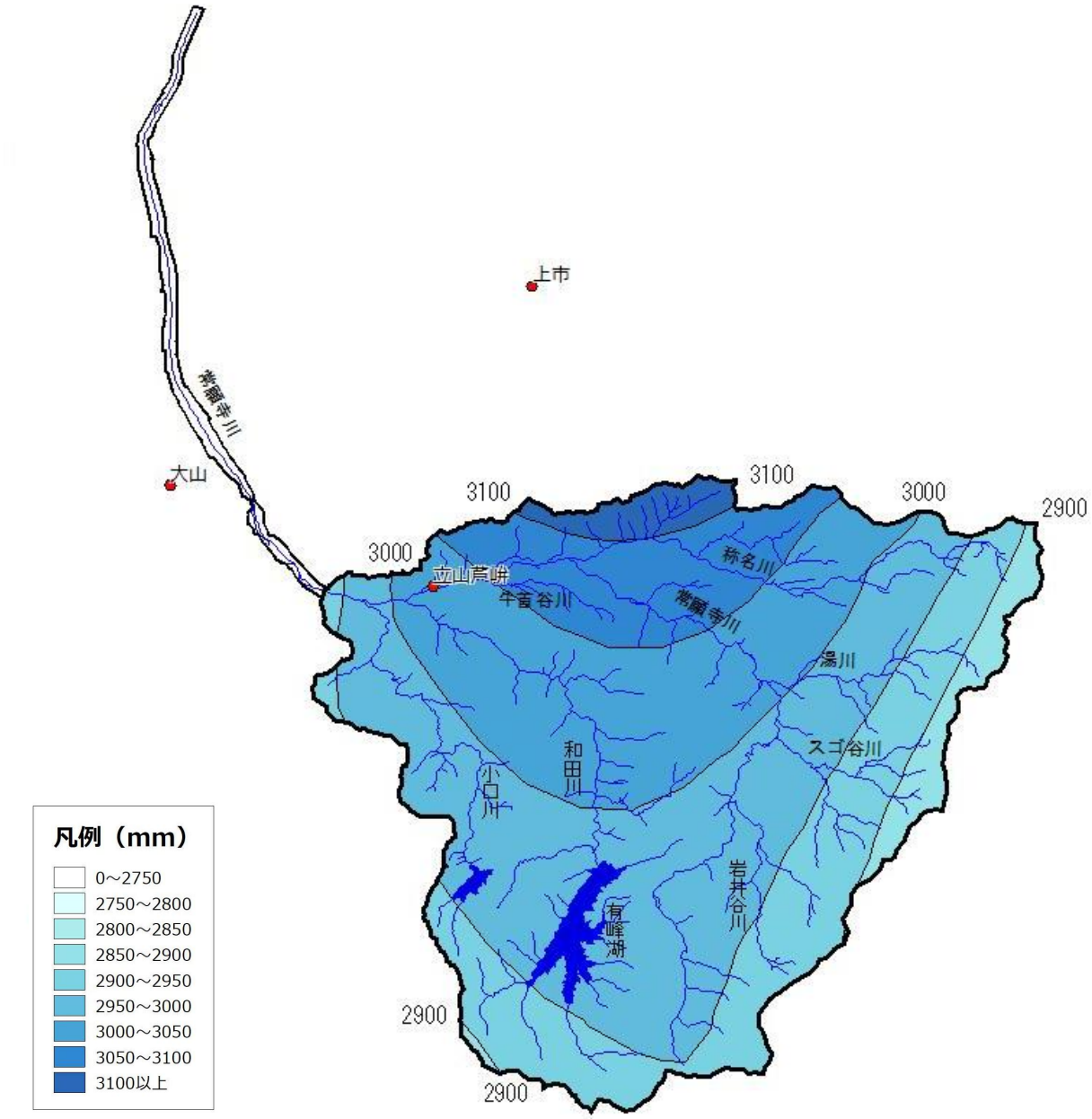


図 1.7　月別降水量と平均気温(平成 8 年(1996 年)～令和 7 年(2025 年))



●:降水量分布図の作成に使用した観測所

出典：気象庁 HP のデータから作成

図 1.8　常願寺川流域の年間降水量の分布（1996～2025 年の平均値）

2. 流域及び河川の自然環境

2.1 流域の自然環境

常願寺川の自然環境は、地形や河川環境の状況に応じて上流域、中流域、下流域に区分され、上流域は源流から称名川合流点までの山間区間、中流域は称名川合流点から横江堰堤までの段丘区間、下流域は横江堰堤から河口までの扇状地区間となっている。

上流域は、大半が中部山岳国立公園及び有峰県立自然公園に指定され、豊かな自然環境を有し、落差日本一の称名滝、弥陀ヶ原（みだがはら）など自然が織りなす景勝地が多く、日本の屋根と言われる北アルプスを貫く「立山黒部アルペンルート」は国際的にも優れた観光地となっている。谷幅の狭い山間部を流れる渓流環境には、国指定の天然記念物であるニホンカモシカ等の哺乳類をはじめ、カワガラス等の鳥類、ニッコウイワナ等の魚類、クロサンショウウオ等の両生類が生息・繁殖している。

中流域は広い河原と早瀬・淵が形成されており、オシドリ等の鳥類、サクラマス（ヤマメ）等の魚類、モリアオガエル等の両生類が生息・繁殖している。

下流域は扇状地となっており、アキグミ群落等が生育する砂礫地が発達し、アユ等の魚類が好む瀬や、トンボ類等の水生昆虫が好む細流・湿地が見られる。また、河口部にはコウボウムギ等の海浜植生が生育する河口砂州や、ヨシ原が形成されている。

一方、横江堰堤（頭首工）で取水された農業用水は扇状地にはりめぐらされた各用水路を通じて広大な水田を潤し、沿川は富山県の米どころとなっている。常願寺川は、豊かな自然環境と古くから人々の生活を支え文化を育んできた富山県を代表する河川である。

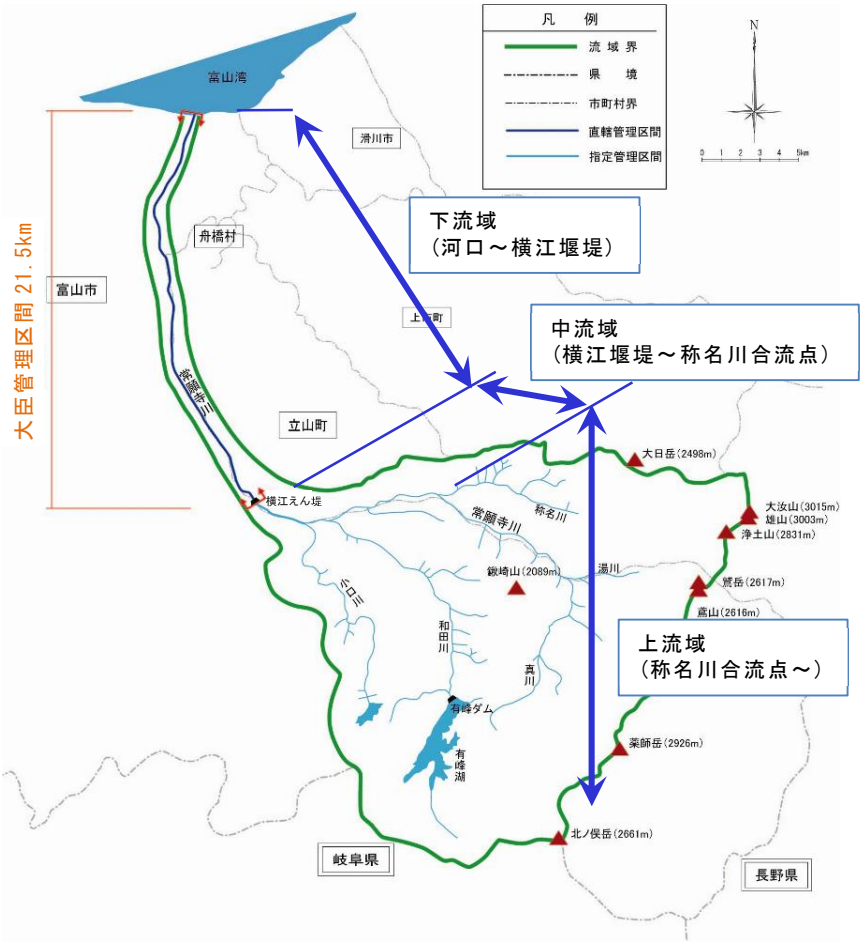


図 2.1 常願寺川流域区分図

2.2　河川及びその周辺の自然環境

(1)　河川の自然環境

1)　上流域（源流～称名川合流点）

常願寺川の上流域は、3,000m 級の高山を含み、高山帯、亜高山帯、山地帯、低山帯の各植生帯が見られる。また、地形の急峻さや冬の季節風を直接受ける条件下にあることから、森林限界の標高が低いという特徴がある。

高山帯にはハイマツ群落や高山草原が分布し、国指定の天然記念物であるライチョウが生息・繁殖している。亜高山帯ではオオシラビソ、コメツガ、ハッコウダゴヨウ等の針葉樹林、低い山地帯にはブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹林、平地部ではウラジロガシ、アカガシのような暖地性の常緑広葉樹も見られる。また、富山県内で初記録となる絶滅危惧種のモイワランが生育している。

河川は、谷幅が狭い山間渓流の様相を呈し、ところどころ川幅が広い箇所や砂防堰堤等により環境が単調な箇所も見られる。

陸域では、ニホンカモシカ等の哺乳類、カワガラス等の鳥類が生息・繁殖している。水域にはニッコウイワナ等の魚類が生息・繁殖する瀬・淵が形成され、クロサンショウウオ、カジカガエル等の両生類が生息・繁殖している。

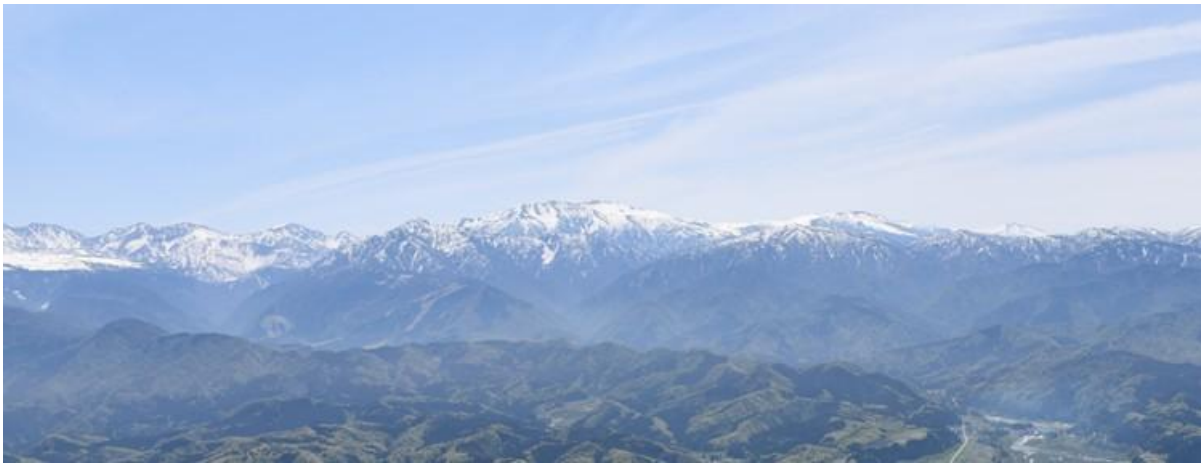


図 2.2　常願寺川上流域



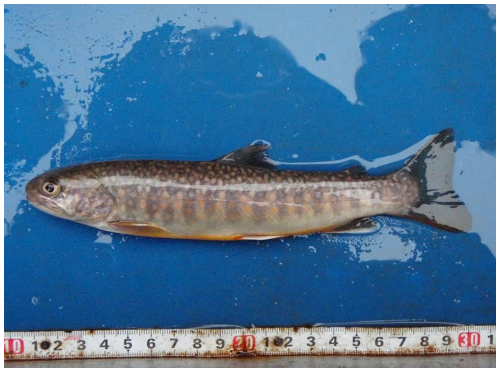
1. モイワラン



2. ニホンカモシカ



3. カワガラス



4. ニッコウイワナ



5. クロサンショウウオ



6. カジカガエル

図 2.3　常願寺川上流域の代表的な動植物

2)　中流域（称名川合流点～横江堰堤）

称名川合流点から横江堰堤までの中流域は段丘区間であり、河川には広い河原、早瀬や淵が形成されている。

陸域では、岩場を好むツメレンゲ等の植物が生育し、オシドリ、コチドリ等の鳥類が生息・繁殖している。水域では、ニッコウイワナ、サクラマス（ヤマメ）、カジカ等の魚類が生息・繁殖する瀬・淵が形成され、モリアオガエル、アカハライモリ等の両生類が生息・繁殖している。

急流河川対策として設置された巨石付き盛土砂州の前面には淵が形成され、多様な環境の創出に加え、出水時には魚類等の避難場としても機能している。

また、沿川には広大な水田や屋敷林を備えた農村集落が見られるほか、農業用水路が堤内外を接続しており、流域の生物多様性の保全や生態系ネットワークの形成に寄与している。



図 2.4　常願寺川中流域



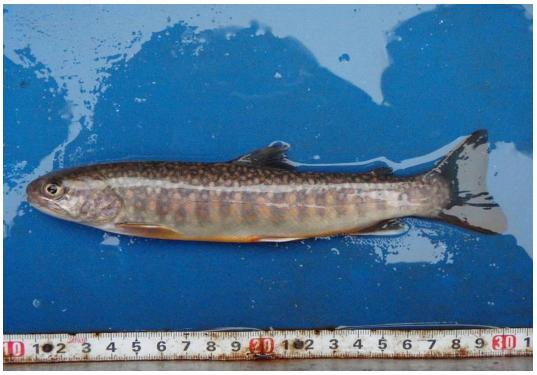
1. ツメレンゲ



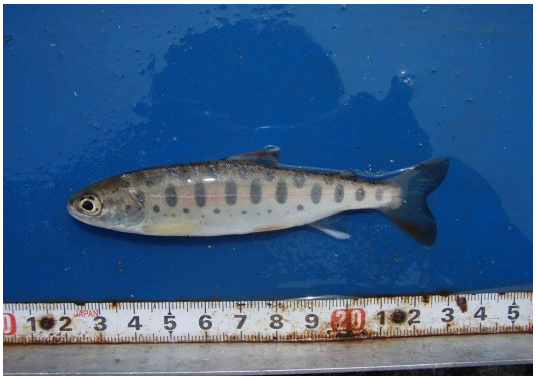
2. オシドリ



3. コチドリ



4. ニッコウイワナ



5. サクラマス(ヤマメ)



6. カジカ



7. モリアオガエル



8. アカハライモリ

図 2.5　常願寺川中流域の代表的な動植物

3)　下流域（横江堰堤～河口）

下流域である横江堰堤から河口までは扇状地区間となっている。下流域は、さらに上流部、中流部、下流部に区分され、それぞれ特徴的な自然環境を有している。

上流部は、横江堰堤から中滝発電所の水路橋付近までの約 2.5km の区間である

横江堰堤直下の山付き区間であり、山裾の高水敷には水田や溜池が見られる。陸域では、カワガラス、カジカガエル等の渓流に特有な動物が生息・繁殖し、水域では、ニッコウイワナ等の魚類が生息・繁殖している。

中流部は、中滝発電所の水路橋付近から雄峰大橋下流付近までの約 14km の区間である。流路は網状に分かれ砂礫河原が広がる。陸域では、中州等の砂礫河原にはアキグミ群落、カワラヨモギーカワラハハコ群落等が生育している。また、コマツナギが生育するとともに、それを食草とするミヤマシジミが生息・繁殖している。水域では、瀬を好むアユやカマキリ等の魚類、細流や湿地にはトンボ類やゲンジボタルが生息・繁殖している。また、扇状地の扇頂部周辺に位置しており、湧水箇所が多数見られ、湧水に依存する絶滅危惧種のアジメドジョウが生息・繁殖している。

下流部は、雄峰大橋下流付近から河口までの約 5km の区間である。中流部より川幅が狭くなり、雄峰大橋下流付近から常願寺大橋下流付近の区間は複列砂州に起因して低水路に明瞭な瀬と淵が発達する。河床には礫が堆積し陸域の礫河原にはアキグミ等が生育している。河口から約 2km の区間は感潮域であり、汽水・海水性の魚類や底生動物が見られる。水際にはヨシ原が発達しトンボ類の幼虫やゲンゴロウ類等の水生昆虫が生息・繁殖している。ヨシに覆われた水際は魚類の産卵場や稚魚の生息地として重要である。また、河口部には発達した河口砂州があり、海浜植物（コウボウシバ、コウボウムギ等）が生育し、海浜性の昆虫類が生息・繁殖している。



出典：富山河川国道事務所資料

図 2.6　常願寺川下流域

		
1. カワガラス	2. カジカガエル	3. ニッコウイワナ
		
4. アキグミ	5. カワラハハコ	6. コマツナギ
		
7. ミヤマシジミ	8. アユ	9. カマキリ
		
10. ゲンジボタル	11. アジメドジョウ	12. ヨシ
		
13. コウボウシバ	14. コウボウムギ	

図 2.7　常願寺川下流域の代表的な動植物

(2) 常願寺川における重要な種

常願寺川における重要種を、河川水辺の国勢調査等の結果をもとに、学術上又は希少性等の観点から抽出した。選定にあたっては、「文化財保護法」や「絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律」、「環境省 絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト」や地方版のレッドデータブック（富山県）等の掲載種及び「富山県希少野生動植物保護条例」の法律や条例で定められた種とした。

表 2.1 重要な種の選定根拠

資料	分類	選定内容
文化財保護法	特別天然記念物	「動物、植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの」のうち、特に重要なもの。 なお、県や市町村の条例により指定される天然記念物も同様の扱いとする。
	天然記念物	動物、植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの。なお、県や市町村の条例により指定される天然記念物も同様の扱いとする。
絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）	国内希少野生動植物種	本邦における生息・生育状況が人為の影響により存続に支障を来たす事情が生じている種で以下のいずれかに該当するもの（亜種又は変種がある種は、その亜種又は変種とする）。 ・個体数が著しく少ないか、又は著しく減少しつつある種 ・全国の分布域の相当部分で生息地等が消滅しつつある種 ・分布域が限定されており、かつ、生息地等の生態・生育環境の悪化又は生息地等における過度の捕獲若しくは採取により、その存続に支障を来たす事情がある種
	国際希少野生動植物種	国際的に協力して種の保存を図ることとされている絶滅のおそれのある野生動植物の種（国内希少野生動植物種を除く。）であって、政令で定めるもの
環境省 レッドリスト	絶滅（EX）	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
	野生絶滅（EW）	飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
	絶滅危惧Ⅰ類（CR＋EN）	絶滅の危機に瀕している種
	絶滅危惧ⅠA類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
	絶滅危惧ⅠB類（EN）	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
	絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危険が増大している種
	準絶滅危惧（NT）	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
	情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足している種
	絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの
レッドデータブックとやま 2025	絶滅＋野生絶滅（EX+EW）	県内において野生ではすでに絶滅したと考えられる種
	絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）	絶滅の危機に瀕している種
	絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危険が増大している種
	準絶滅危惧（NT）	存続基盤が脆弱な種
	情報不足（DD）	絶滅にいたる可能性があるが、情報が不足しており、今後生息・生育状況に注意すべき種
	絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	絶滅のおそれのある地域個体群
富山県条例	富山県希少野生動植物	富山県希少野生動植物保護条例に基づき、県内の希少野生動植物のうち、特に保護を図ることが必要なものを「指定希少野生動植物」として指定

○選定根拠となる資料
・文化財保護法：「文化財保護法」（1950 年、法律第二一四号）
・種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 5 年、法律第七五号）
・「環境省レッドリスト 2020」（2020 年、環境省）
・「第 5 次レッドリスト（植物・菌類）」（2025 年、環境省）
・「第 5 次レッドリスト（鳥類及び爬虫類・両生類）」（2026 年、環境省）
・「レッドデータブックとやま 2025」（2025 年、富山県）
・富山県希少野生動植物保護条例：「富山県希少野生動植物」（2015 年指定、富山県）

表 2.2　常願寺川水系の重要種【植物】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）					調査年度（砂防区間）	重要種				
				H5 (1993)	H10 (1998)	H15 (2003)	H21 (2009)	R1 (2019)	H20 (2008)	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	ヒゲノカズラ	ヒゲノカズラ	スギラン						●			VU	NT	
2	コショウ	ドクダミ	ハンゲショウ					●					VU	
3		ウマノスズクサ	ミヤマアオイ						●			VU	NT	
4	クサスギカズラ	ラン	ギンラン						●				NT	
5			モイワラン						●			CR	CR+EN	
6			イチヨウラン						●				VU	
7			カキラン						●				NT	
8			ヤマトキソウ						●				CR+EN	
9			ウチョウラン						●			NT	VU	
10		アヤメ	ヒメシャガ						●			NT	NT	
11	ツユクサ	ミズアオイ	ミズアオイ			●						NT	NT	
12	イネ	ガマ	ミクリ	●	●	●	●	●				NT		
-			ミクリ属[注1)]					○				※	※	
13		イグサ	ミヤマイ						●			NT		
14			ドロイ				●						NT	
15		イネ	イトイチゴツナギ						●				NT	
16	キンポウゲ	キンポウゲ	シラネアオイ						●				NT	
17	ユキノシタ	ボタン	ヤマシャクヤク						●			NT	CR+EN	
18		スグリ	ヤシャビシャク						●			NT	NT	
19		ベンケイソウ	ツメレンゲ						●			NT	NT	
20	マメ	マメ	タヌキマメ		●								CR+EN	
21			イヌハギ					●				NT	VU	
22	バラ	バラ	イワキンバイ						●				NT	
23			ハマナス			●		●					VU	
24	ナデシコ	タデ	ノダイオウ			●						VU		
25	ツツジ	ツツジ	サツキ						●				NT	
26	リンドウ	リンドウ	ホソバノツルリンドウ						●				NT	
27	ナス	ナス	オオマルバノホロシ					●					NT	
28	シソ	オオバコ	カワヂシャ	●								NT	VU	
29		シソ	メハジキ						●				NT	
30			ヒメナミキ	●	●								VU	
31	キク	キク	イワヨモギ						●			VU		
32			タカサブロウ	●	●	●							VU	
33			ホソバムカシヨモギ						●			VU	NT	
34	マツムシソウ	ガマズミ	レンプクソウ						●				VU	
合計	16目	23科	34種	4種	4種	5種	2種	5種	22種	0種	0種	16種	30種	0種

注 1)ミクリ属は、重要種として扱った。ただし、種によってランクが異なるため、分類は"※"とした。
また、計数には含めない。

表 2.3　常願寺川水系の重要種【魚類】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）						調査年度（砂防区間）						重要種				
				H8 (1996)	H13 (2001)	H18 (2006)	H23 (2011)	H28 (2016)	R3 (2021)	H4 (1992)	H8 (1996)	H9 (1997)	H13 (2001)	H15 (2003)	H20 (2008)	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	ミナミスナヤツメ					●	●									VU	NT	
2	コイ	コイ	ミナミアカヒレタビラ	●	●	●	●	●										CR	CR+EN	県希
3			ジュウサンウグイ	●	●	●	●	●	●									LP	NT	
4		ドジョウ	ドジョウ	●	●	●	●	●	●									NT	NT	
5			アジメドジョウ	●	●	●	●	●	●				●	●	●			VU	NT	
6	ナマズ	ナマズ	ナマズ	●	●	●	●	●	●										NT	
7	サケ	サケ	ニッコウイワナ							●		●	●	●				DD	LP	
-			アメマス類[注1]							○		○	○	○				(DD)	(LP)	
8			サクラマス				●	●										NT	NT	
-			サクラマス（ヤマメ）[注2]	●	●	●	○	○	●									(NT)	(NT)	
9	トゲウオ	トゲウオ	ニホンイトヨ	●														LP	EX+EW	
10			トミヨ属淡水型	●	●	●	●	●	●									LP	VU	
11	ダツ	メダカ	キタノメダカ	●	●	●	●	●	●									VU	NT	
12		サヨリ	クルメサヨリ					●										NT		
13	スズキ	カジカ	カマキリ	●	●	●		●	●									VU	NT	
14			カジカ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			NT	NT	
15			カジカ中卵型	●	●	●	●	●	●									EN	VU	
16			カンキョウカジカ	●	●		●	●	●									LP	VU	
合計	7目	9科	16種	13種	12種	11種	11種	14種	12種	2種	1種	2種	3種	3種	2種	0種	0種	15種	15種	1種

注 1)ニッコウイワナを含む可能性があり（DD),(LP)とした。ただし、計数には含めない。

注 2)サクラマス（ヤマメ）はサクラマスと同種であり（NT）とした。ただし、計数には含めない。

表 2.4　常願寺川水系の重要種【鳥類】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）					調査年度（砂防区間）	重要種				
				H4（1992）	H9（1997）	H14（2002）	H24（2012）	R6（2024）	H21（2019）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	カモ	カモ	オシドリ					●	●				DD	
2			キンクロハジロ				●	●				VU		
3			スズガモ					●				NT		
4			ビロードキンクロ				●						NT	
5			ホオジロガモ				●						NT	
6	コウノトリ	コウノトリ	コウノトリ			●				国特天	国内希少	EN		
7	ペリカン	サギ	ゴイサギ	●	●	●	●	●				VU		
8			ササゴイ		●	●		●	●			VU	VU	
9			アマサギ	●	●	●	●	●				EN		
10			チュウサギ	●	●	●	●					NT		
11			コサギ	●	●	●		●	●			VU		
12	ツル	クイナ	ヒクイナ	●				●				NT	CR+EN	
13			バン			●	●					VU	NT	
14	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ						●				NT	
15			カッコウ	●	●	●	●	●	●				NT	
16	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ						●			NT	VU	
17	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	●	●	●	●		●			VU		
18	チドリ	チドリ	ケリ			●						DD	NT	
19			イカルチドリ	●	●	●	●	●	●				NT	
20			コチドリ		●	●	●	●	●				NT	
21			シロチドリ			●	●	●				VU	NT	
22		シギ	オオソリハシシギ	●								VU	DD	
23			タカブシギ			●						VU	DD	
24			イソシギ	●	●	●	●	●	●				NT	
25			ハマシギ			●		●				VU		
26		カモメ	ウミネコ	●	●	●	●	●				VU		
27			オオセグロカモメ	●	●	●	●	●				EN		
28			コアジサシ	●	●	●	●	●				EN	CR+EN	
29		カモメ	アジサシ	●	●								DD	
30	タカ	ミサゴ	ミサゴ	●	●	●	●	●	●				NT	
31		タカ	ハチクマ			●	●	●	●			DD	VU	
32			オジロワシ					●				VU	VU	
33			ツミ						●				VU	
34			ハイタカ		●			●	●			NT	VU	
35			オオタカ	●		●	●	●	●			NT	VU	
36			サシバ		●				●			VU	VU	
37			イヌワシ						●	天然	国内希少	EN	CR+EN	
38			クマタカ						●		国内希少	EN	VU	
39	フクロウ	フクロウ	フクロウ						●				NT	
40			アオバズク					●					VU	
41	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン						●				NT	
42			ヤマセミ	●	●							VU	VU	
43	キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ						●				DD	
44	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ		●	●	●	●	●		国内希少	NT	VU	
45	スズメ	カササギヒタキ	サンコウチョウ				●	●	●				NT	
46		モズ	アカモズ						●		国内希少	CR	CR+EN	
47		カラス	オナガ		●	●	●	●				NT		
48		ツバメ	コシアカツバメ	●		●			●				DD	
49		ムシクイ	オオムシクイ					●				EN		
50		ヨシキリ	コヨシキリ	●			●					NT	NT	
51		セッカ	セッカ				●						CR+EN	
52		キバシリ	キバシリ						●				DD	
53		セキレイ	ビンズイ				●		●			NT		
54		ホオジロ	ホオアカ			●	●	●					NT	
55			カシラダカ		●	●	●	●	●			EN		
合計	14目	27科	55種	19種	21種	27種	27種	29種	28種	2種	5種	35種	40種	0種

表 2.5(1)　常願寺川水系の重要種【陸上昆虫類】（1/2）

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）					調査年度（砂防区間）	重要種				
				H06（1994）	H11（1999）	H16（2004）	H22（2010）	R2（2020）	H22（2010）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	トンボ	イトトンボ	モートンイトトンボ				●	●	●			NT	VU	
2			セスジイトトンボ		●								NT	
3		カワトンボ	ニホンカワトンボ		●	●							NT	
4		ヤンマ	アオヤンマ		●	●						NT	VU	
5			マダラヤンマ		●							NT	CR+EN	
6			マルタンヤンマ		●	●							NT	
7		サナエトンボ	ミヤマサナエ		●								NT	
8		トンボ	ハッチョウトンボ			●		●					NT	
9			チョウトンボ		●	●		●					NT	
10			マイコアカネ		●	●	●	●					VU	
11			ミヤマアカネ	●	●	●	●	●	●				NT	
12	カマキリ	ヒメカマキリ	ヒメカマキリ		●								DD	
13	ハサミムシ	クギヌキハサミムシ	クギヌキハサミムシ			●	●	●	●				DO	
14	バッタ	キリギリス	ササキリ			●	●	●					NT	
15		コオロギ	クマコオロギ		●	●	●	●					DD	
16			クマスズムシ		●	●	●	●					DD	
17		ヒバリモドキ	ハマスズ						●				CR+EN	
18			カワラスズ						●				NT	
19		バッタ	カワラバッタ			●	●	●	●				VU	
20	カメムシ	コガシラウンカ	イブキコガシラウンカ						●				NT	
21		ハネナガウンカ	アヤヘリハネナガウンカ						●				NT	
22		ヨコバイ	スナヨコバイ					●				NT	NT	
23		サシガメ	ハリサシガメ		●							NT		
24			キイロサシガメ	●									NT	
25		ツノカメムシ	トゲツノカメムシ						●				NT	
26		ツチカメムシ	ヨコヅナツチカメムシ				●						DD	
27			シロヘリツチカメムシ				●					NT	NT	
28		カメムシ	アオクチブトカメムシ	●					●				DD	
29		キンカメムシ	チャイロカメムシ	●		●	●	●					NT	
30		アメンボ	ババアメンボ		●							NT	CR+EN	
31		イトアメンボ	イトアメンボ		●							VU	DD	
32		コオイムシ	オオコオイムシ					●					NT	
33		タイコウチ	タイコウチ					●					VU	
34		マルミズムシ	マルミズムシ					●					VU	
35	トビケラ	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ						●			NT		
36	チョウ	シジミチョウ	ヒメシジミ本州・九州亜種						●			NT		
37			ミヤマシジミ	●	●	●	●	●				EN	CR+EN	
38		タテハチョウ	ウラギンスジヒョウモン						●			VU		
39		ヤママユガ	オナガミズアオ		●	●						NT		
40		ヒトリガ	ヤネホソバ		●	●						NT		
41		ヤガ	カギモンハナオイアツバ					●				NT	NT	
42			キシタアツバ		●	●						NT	NT	
43		コブガ	オレクギリンガ						●				NT	
44	ハエ	カ	トワダオオカ						●				DD	
45		ミズアブ	ミズアブ						●				DD	
46		ムシヒキアブ	トラフムシヒキ			●	●		●				DD	
47			オオイシアブ						●				DD	
48		ツリアブ	クロバネツリアブ			●	●						DD	
49	コウチュウ	オサムシ	ホソヒメクロオサムシ						●				NT	
50			アオヘリアオゴミムシ	●								CR		
51			クビナガキベリアオゴミムシ		●							DD		
52			オサムシモドキ	●	●	●	●	●	●				NT	
53			チョウセンゴモクムシ	●								VU		
54			キベリマルクビゴミムシ		●	●						EN		
55			イグチケブカゴミムシ		●							NT		
56		ハンミョウ	ホソハンミョウ	●								VU	CR+EN	
57			ナミハンミョウ	●	●								CR+EN	
58		ゲンゴロウ	メススジゲンゴロウ						●				VU	
59			キベリクロヒメゲンゴロウ	●								NT	VU	
60			コウベツブゲンゴロウ		●		●					NT		
61			コシマチビゲンゴロウ	●					●			VU		
62			ヒメシマチビゲンゴロウ		●	●	●						NT	
63			キベリマメゲンゴロウ	●	●	●	●	●	●			NT		
64			クロマメゲンゴロウ						●				NT	
65		ミズスマシ	コミズスマシ				●	●	●			EN	DO	
66			ヒメミズスマシ			●						EN	CR+EN	
67			ミズスマシ		●							VU	VU	
68		コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ	●	●	●	●					DD		
69		カワラゴミムシ	カワラゴミムシ	●	●	●							VU	
70		ガムシ	ガムシ		●	●		●				NT	VU	
71			シジミガムシ	●	●	●			●			EN		
72		クワガタムシ	ヒラタクワガタ本土亜種		●	●	●	●					VU	
73		コガネムシ	ヤマトアオドウガネ	●	●	●		●					NT	
74			クチキマグソコガネ		●								DD	
75			ヒメカンショコガネ		●	●	●						DD	
76			クロカナブン	●									NT	

表 2.5(2)　常願寺川水系の重要種【陸上昆虫類】（2/2）

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）					調査年度（砂防区間）	重要種				
				H06（1994）	H11（1999）	H16（2004）	H22（2010）	R2（2020）	H22（2010）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
77	コウチュウ	タマムシ	クロケシタマムシ				●						DD	
78		ホタル	ヘイケボタル		●	●	●	●					DD	
79			ゲンジボタル		●	●		●					DD	
80		ゴミムシダマシ	キイロクチキムシ			●							DD	
81		カミキリムシ	カクムネヒメハナカミキリ						●				DD	
82			ヨツボシカミキリ			●						EN	CR+EN	
83		ゾウムシ	スナムグリヒョウタンゾウムシ	●	●	●	●	●					NT	
84	ハチ	セイボウ	オオセイボウ本土亜種		●							DD		
85		アリ	ツノアカヤマアリ						●			DD	DD	
86			エゾアカヤマアリ						●			VU		
87			ツヤクシケアリ						●				NT	
88		スズメバチ	ニッポンホオナガスズメバチ						●			DD		
89			ヤマトアシナガバチ			●		●	●			DD	NT	
90			モンスズメバチ		●	●		●				DD		
91		ギングチバチ	アカオビケラトリ				●					NT	VU	
92		ミツバチ	クロマルハナバチ		●	●						NT		
合計	11目	54科	92種	19種	42種	39種	26種	28種	32種	0種	0種	41種	71種	0種

表 2.6　常願寺川水系の重要種【底生動物】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）							調査年度（砂防区間）	重要種				
				H3（1991）	H8（1996）	H13（2001）	H19（2007）	H24（2012）	H29（2017）	R4（2022）	H6（1994）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	モノアラガイ	モノアラガイ	モノアラガイ		●	●		●						NT	VU	
2		ヒラマキガイ	ヒラマキガイモドキ			●	●	●						NT	DD	
3			カワコザラ		●			●	●					CR	DD	
4	ドブシジミ	ドブシジミ	ドブシジミ			●		●							NT	
5	マルスダレガイ	シジミ	ヤマトシジミ					●						NT	DD	
6	ヨコエビ	キタヨコエビ	アナンデールヨコエビ		●									NT		
7	エビ	ヌマエビ	ミゾレヌマエビ			●	●	●	●	●					DD	
8			ヌマエビ				●								DD	
9		テナガエビ	テナガエビ			●	●		●	●					NT	
10		サワガニ	サワガニ						●	●					NT	
11		ベンケイガニ	アカテガニ				●	●	●	●					VU	
12	トンボ	ヤンマ	アオヤンマ			●		●						NT	VU	
13			マルタンヤンマ			●									NT	
14		サナエトンボ	ミヤマサナエ			●	●	●	●	●					NT	
15			オナガサナエ							●					NT	
16		トンボ	マイコアカネ			●									VU	
17			ミヤマアカネ			●									NT	
18	トビケラ	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ								●			NT		
19	コウチュウ	ゲンゴロウ	キボシケシゲンゴロウ							●				DD	VU	
20			ケシゲンゴロウ		●									NT	CR+EN	
21			コウベツブゲンゴロウ			●		●						NT		
22			ヒメシマチビゲンゴロウ			●	●	●		●					NT	
23			キベリマメゲンゴロウ		●	●	●	●	●	●				NT		
24		コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ			●	●	●	●	●				DD		
25		ガムシ	シジミガムシ			●								EN		
26		ホタル	ヘイケボタル			●									DD	
合計	8目	17科	26種	0種	5種	16種	9種	13種	8種	10種	1種	0種	0種	13種	20種	0種

表 2.7　常願寺川水系の重要種【両生類】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）				調査年度（砂防区間）	重要種				
				H7（1995）	H12（2000）	H17（2005）	H27（2015）	H23（2011）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	有尾	サンショウウオ	クロサンショウウオ					●			NT		
2			ハクバサンショウウオ					●		国内希少	EN	CR+EN	県希
3			ヒダサンショウウオ					●			NT	NT	
4		イモリ	アカハライモリ	●	●	●	●	●			NT	NT	
5	無尾	アカガエル	トノサマガエル	●	●	●	●	●			NT	NT	
合計	2目	3科	5種	2種	2種	2種	2種	5種	0種	1種	5種	4種	1種

表 2.8　常願寺川水系の重要種【爬虫類】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）				調査年度（砂防区間）	重要種				
				H7（1995）	H12（2000）	H17（2005）	H27（2015）	H23（2011）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	カメ	イシガメ	ニホンイシガメ			●					VU	CR+EN	
2		スッポン	ニホンスッポン				●				DD	DD	
3	有鱗	ナミヘビ	シロマダラ					●				NT	
合計	2目	3科	3種	0種	0種	1種	1種	1種	0種	0種	2種	3種	0種

表 2.9　常願寺川水系の重要種【哺乳類】

No	目名	科名	和名	調査年度（大臣管理区間）				調査年度（砂防区間）	重要種				
				H7（1995）	H12（2000）	H17（2005）	H27（2015）	H23（2011）	文化財保護法	種の保存法	環境省RL	富山県RDB	富山県条例
1	モグラ	トガリネズミ	カワネズミ					●				VU	
2	コウモリ	ヒナコウモリ	コテングコウモリ					●				VU	
3	ネズミ	リス	ニホンモモンガ					●				NT	
4	ウシ	ウシ	ニホンカモシカ					●	国特天				
合計	4目	4科	4種	0種	0種	0種	0種	4種	1種	0種	0種	1種	0種

(3) 常願寺川における代表種

常願寺川の河川環境を特徴づける種（代表種）として、既往の動植物調査結果をもとに選定した種は、下記に示すとおりである。

表 2.10　区間毎の主な環境要素と河川環境を特徴づける種及び集団分布地、繁殖地

区分	主な環境の構成要素	河川環境を特徴づける種	集団分布地、繁殖(産卵)地、ねぐら
上流域 （源流～ 称名川合流点）	○水域 ・早瀬、淵 ○陸域 ・中州、寄洲	魚類：ﾆｯｺｳｲﾜﾅ 植物：ﾓｲﾜﾗﾝ、ﾄﾞﾛﾉｷ 鳥類：ｶﾜｶﾞﾗｽ 両爬哺：ｸﾛｻﾝｼｮｳｳｵ、ｶｼﾞｶｶﾞｴﾙ、ﾆﾎﾝｶﾓｼｶ、	魚類：ﾆｯｺｳｲﾜﾅ産卵場
中流域 （称名川合流点～ 横江堰堤）	○水域 ・早瀬、淵 ○陸域 ・中州、寄洲	魚類：ﾀｶﾊﾔ、ﾆｯｺｳｲﾜﾅ、ｻｸﾗﾏｽ(ﾔﾏﾒ)、ｶｼﾞｶ 植物：ﾂﾒﾚﾝｹﾞ 鳥類：ｵｼﾄﾞﾘ、ｺﾁﾄﾞﾘ 両爬哺：ｱｶﾊﾗｲﾓﾘ、ﾓﾘｱｵｶﾞｴﾙ、	鳥類：ｲﾜﾂﾊﾞﾒ集団繁殖地 魚類：ﾆｯｺｳｲﾜﾅ産卵場 ｻｸﾗﾏｽ(ﾔﾏﾒ)産卵場
下流域 （横江堰堤～ 河口）	○水域 ・早瀬、淵、湧水 ○陸域 ・中州、寄洲、 河口砂州、 ｱｷｸﾞﾐ、ﾖｼ	魚類：ﾄﾞｼﾞｮｳ、ｱｼﾞﾒﾄﾞｼﾞｮｳ、ﾅﾏｽﾞ、ｱﾕ、ﾆｯｺｳｲﾜﾅ、 ｻｸﾗﾏｽ(ﾔﾏﾒ)、ﾄﾐﾖ、ｷﾀﾉﾒﾀﾞｶ、ｶﾏｷﾘ、ｶｼﾞｶ 底生動物：ﾄﾝﾎﾞ類、ｹﾞﾝｺﾞﾛｳ類 植物：ﾐｸﾘ、ｺｳﾎﾞｳﾑｷﾞ、ｺｳﾎﾞｳｼﾊﾞ、ｺﾏﾂﾅｷﾞ、ｱｷｸﾞﾐ、ｶﾜﾗﾊﾊｺ、ｶﾜﾗﾖﾓｷﾞ 鳥類：ｺﾁﾄﾞﾘ、ｼﾛﾁﾄﾞﾘ、ｺｱｼﾞｻｼ、ｶﾜｾﾐ、ｶﾜｶﾞﾗｽ 両爬哺：ｶｼﾞｶｶﾞｴﾙ 昆虫類：ﾐﾔﾏｼｼﾞﾐ、ｹﾞﾝｼﾞﾎﾞﾀﾙ	鳥類：ｳﾐﾈｺ集団休息地 ｺﾊｸﾁｮｳ集団越冬地

※下線は重要種を示す。

(4)　動植物の生息・生育・繁殖環境の変遷

魚類や鳥類の確認種数は、調査年によって差異はあるものの、明確な増減傾向は見られない。

陸域の植物群落の割合を見ると、近年、カワラヨモギ-カワラハハコ群落、アキグミ群落等の在来植物群落が減少している。一方で、ハリエンジュ群落、セイタカアワダチソウ群落、シナダレスズメガヤ群落等の外来植物群落は増加傾向にある。

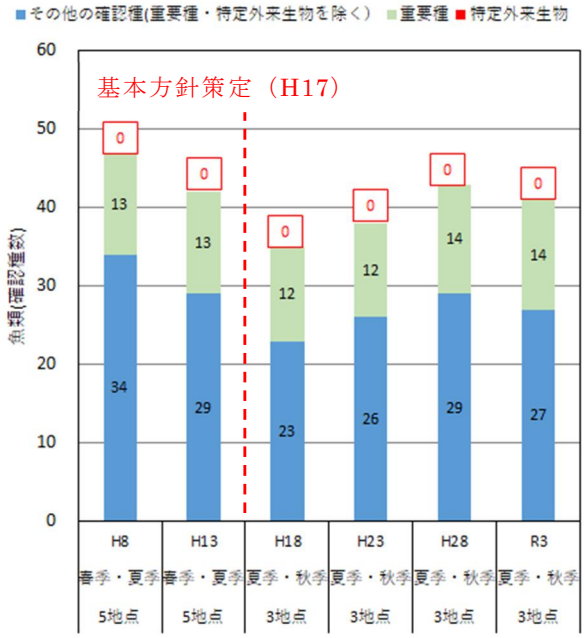


図 2.8　魚類の確認種数の経年変化

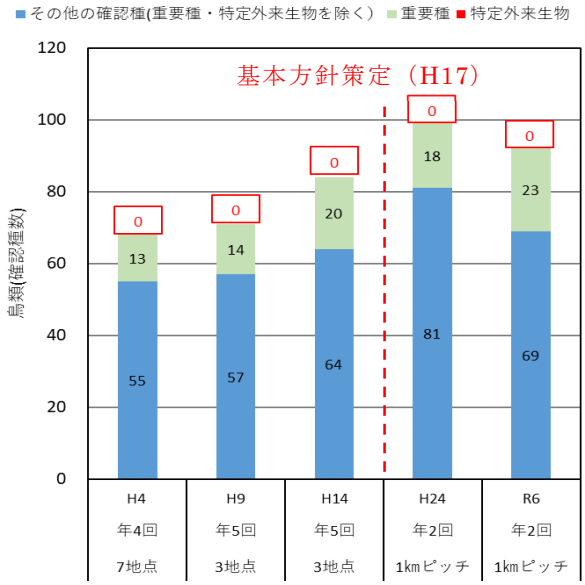
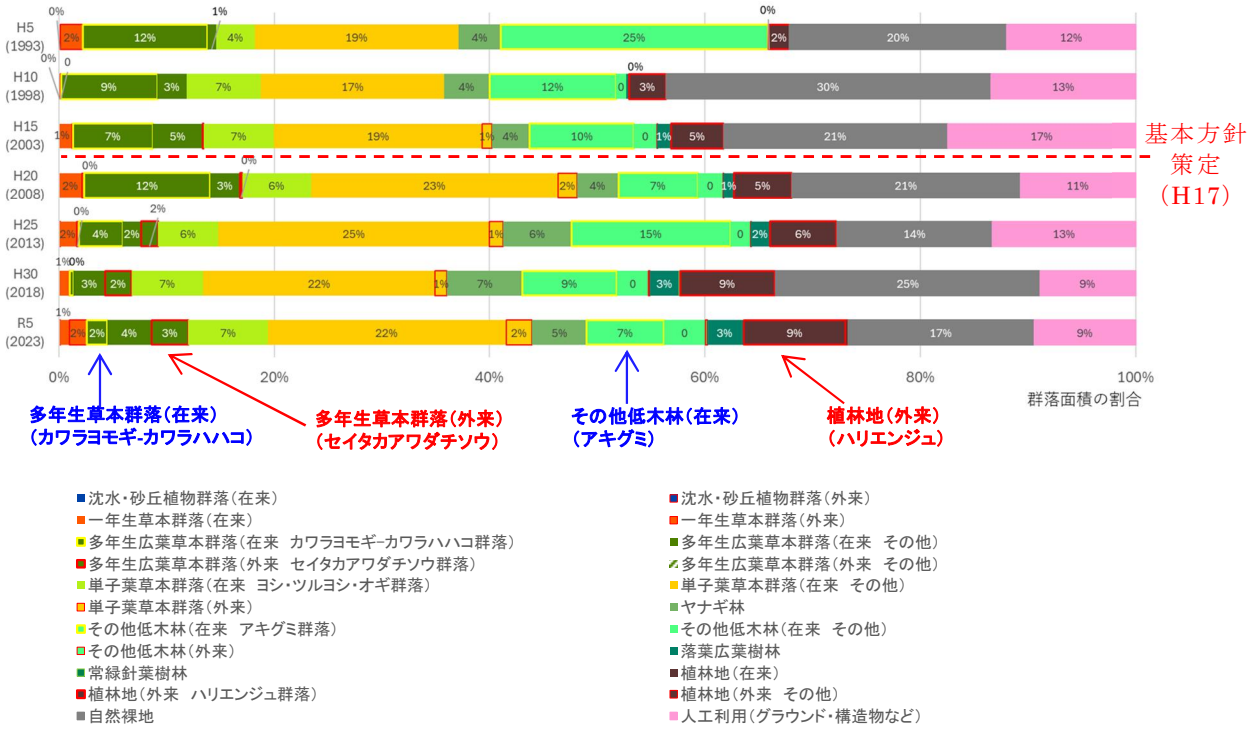


図 2.9　鳥類の確認種数の経年変化

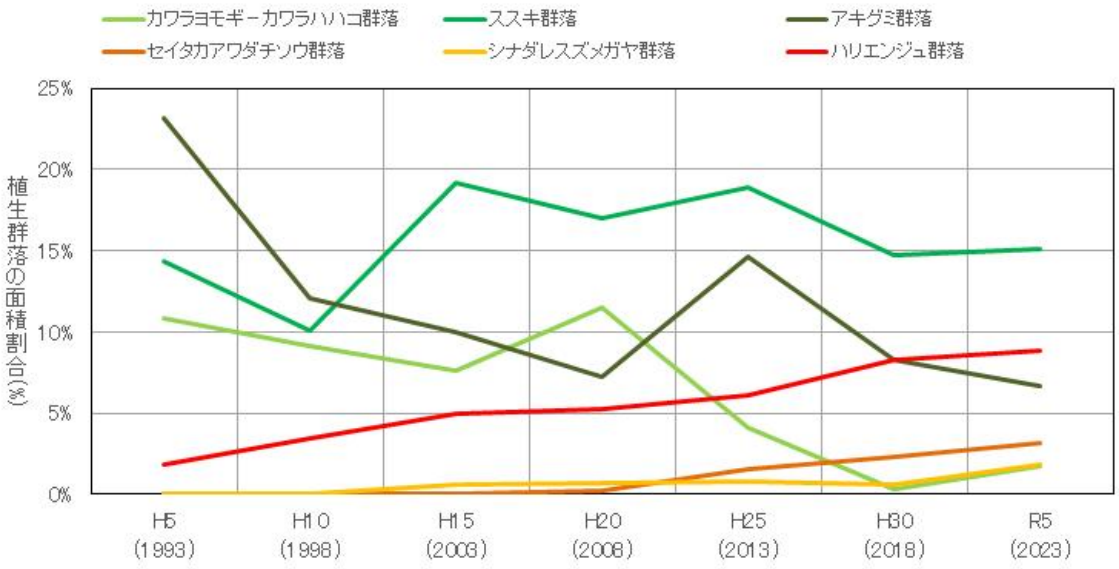
出典：河川水辺の国勢調査

注）鳥類は H24 以降で調査方法が大きく変わったため、単純比較は難しい。



出典：河川水辺の国勢調査

図 2.10　植物群落の経年変化



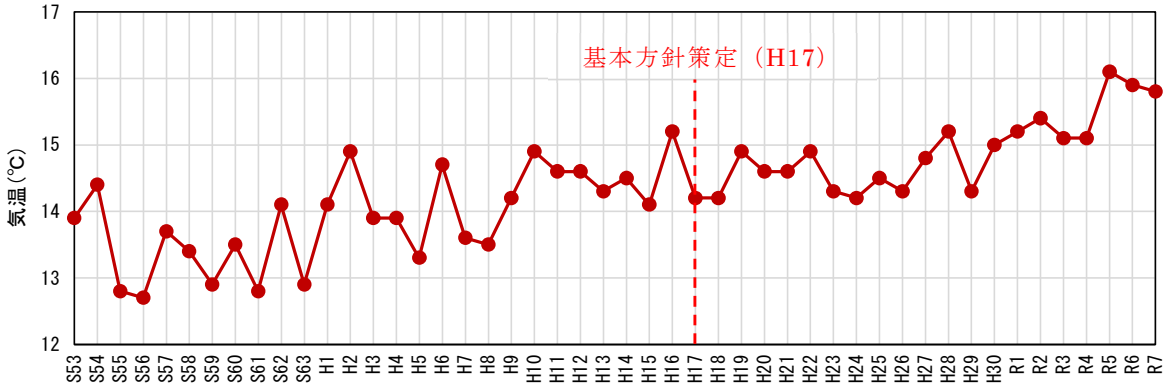
出典：河川水辺の国勢調査

図 2.11　主な在来植物・外来植物群落の経年変化

(5)　常願寺川水系の気温、水温の変化

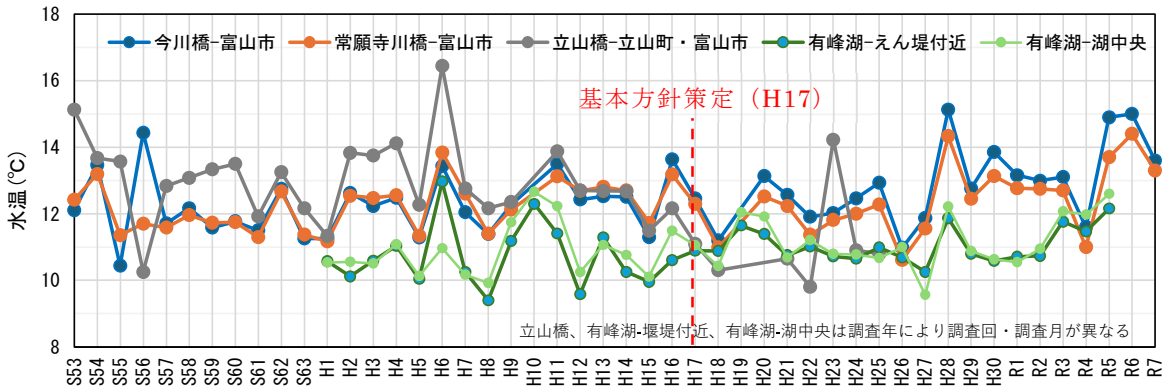
常願寺川の大臣管理区間の代表地点の年平均気温は、気象庁富山観測所において徐々に上昇する傾向が見られる。一方、年平均水温は、今川橋、常願寺川橋、立山橋、有峰湖において明確な経年変化は見られない。

常願寺川橋地点の月平均水温は、1 月～2 月に約 2℃～6℃で最低となり、7 月～8 月に約 20℃～26℃で最高となるが、明確な経年変化は見られない。



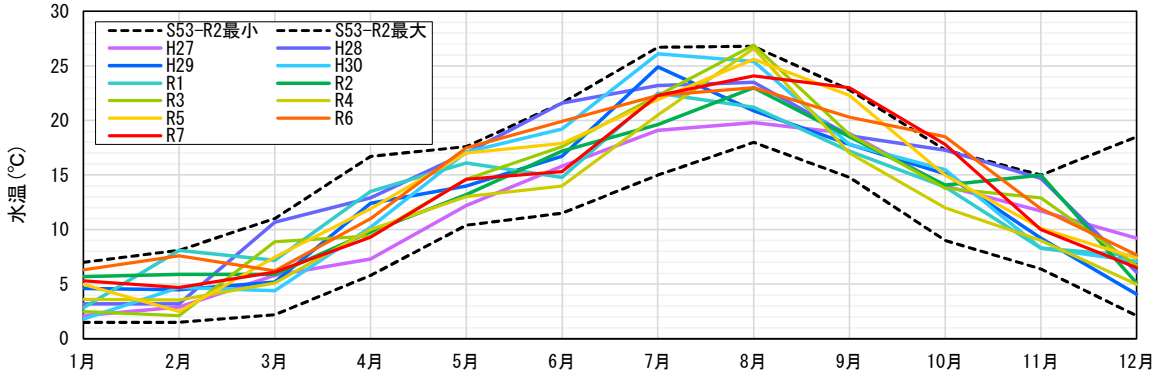
出典：富山観測所データ(気象庁)

図 2.12　富山観測所の年平均気温の経年変化



出典：水文水質データベース(国土交通省)

図 2.13　平均水温の経年変化



出典：水文水質データベース(国土交通省)

図 2.14　水温（常願寺川橋地点）の経月変化

(6) 外来種の確認状況

1) 特定外来生物

常願寺川では、特に侵略的な外来生物（特定外来生物）として、植物のオオフサモ、オオカワヂシャ、オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、底生動物のアメリカザリガニ（条件付特定外来生物）、両生類のウシガエル、爬虫類のミシシッピアカミミガメ（条件付特定外来生物）が確認されており、在来種の生息・生育・繁殖への影響が懸念されている。

魚類については、常願寺川には定着していないと考えられる。

表 2.11 特定外来生物の経年確認状況

●：確認された特定外来生物 ※：条件付特定外来生物

分類	和名	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
植物	オオフサモ		●																																
	オオカワヂシャ		●					●					●						●										●						
	オオキンケイギク																		●																
	オオハンゴンソウ																												●						
底生動物	アメリカザリガニ※																					●					●					●			
両生類	ウシガエル									●					●										●										
爬虫類	ミシシッピアカミミガメ※				●										●										●										●

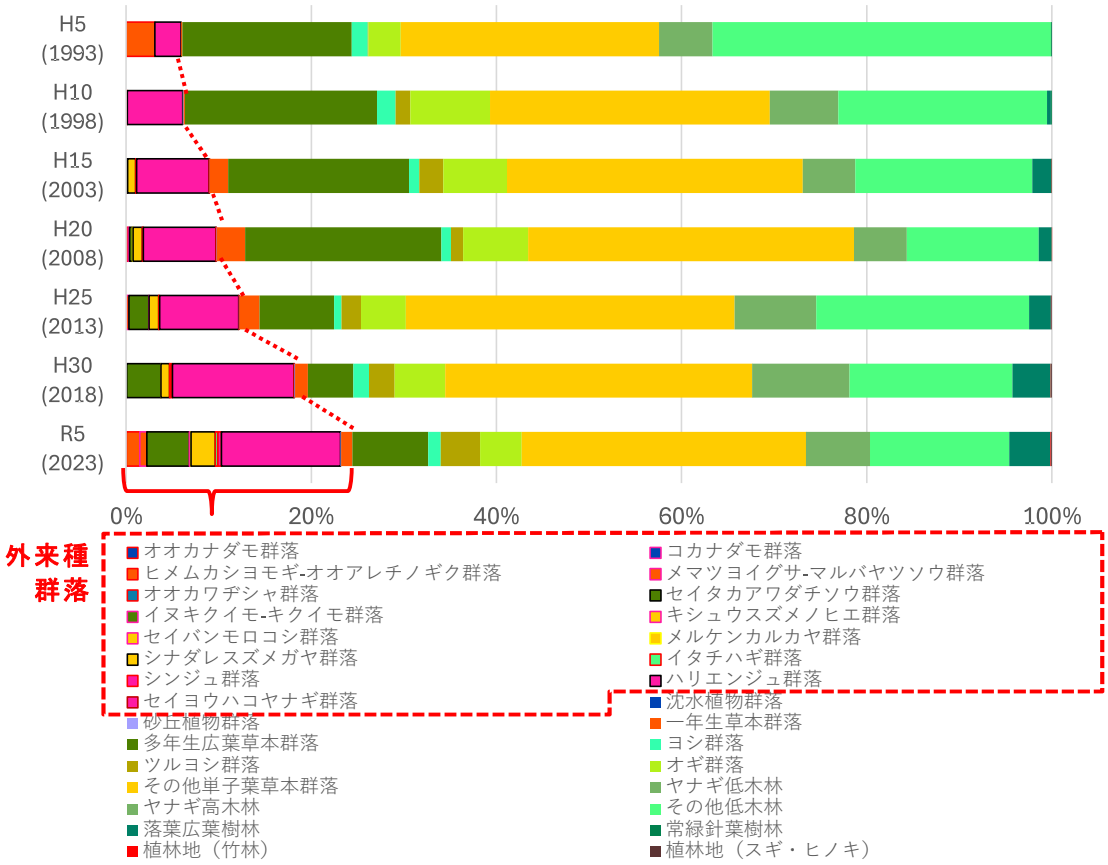
：生物調査の実施年

注）魚類、鳥類、陸上昆虫類、哺乳類は、これまで特定外来生物の確認はなし

出典：河川水辺の国勢調査

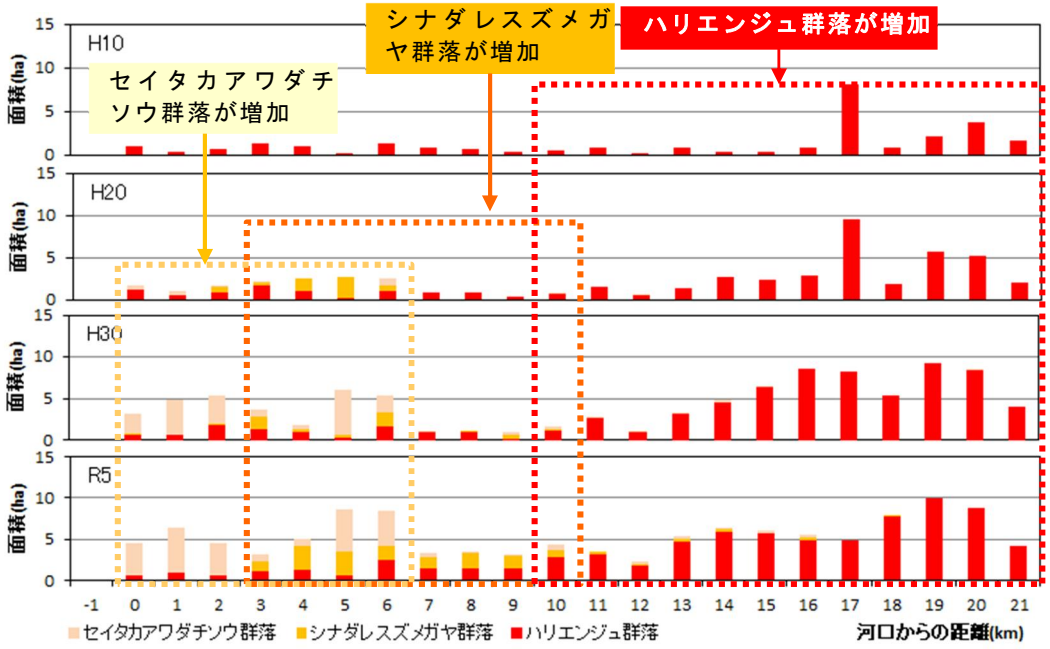
2) 外来植物群落

主な外来植物群落のうち、草本群落のセイタカアワダチソウ群落、シナダレスズメガヤ群落、木本群落のハリエンジュ群落の経年変化を見ると、いずれも増加傾向が見られる。なお、セイタカアワダチソウ群落は概ね 1k～7k、シナダレスズメガヤ群落は概ね 3k～11k、ハリエンジュ群落は概ね 10k～21.5k（上流端：横江堰堤）で拡大している。



出典：河川水辺の国勢調査

図 2.15　植物群落面積の経年変化



出典：河川水辺の国勢調査

図 2.16　主な外来植物群落の経年変化(1k ピッチ)

2.3　特徴的な河川景観や文化財等

2.3.1　特徴的な河川景観

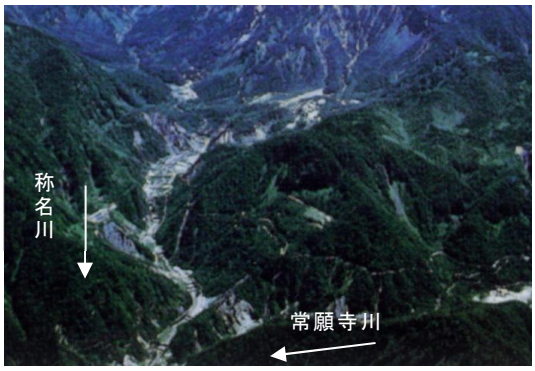
(1)　特徴的な河川景観

常願寺川の上流域は、中部山岳国立公園に指定されており、弥陀ヶ原火山の溶岩台地が侵食して形成された立山カルデラなどすぐれた自然環境が数多く残されている。常願寺川の上流部には鳶崩れをはじめ、山間渓流とともに、多くの滝や河岸段丘など変化に富んだ河川景観が見られる。中流部には蛇行する流れが形成する早瀬や淵がみられ、広い河原が形成されており、中流部の特徴的な河川景観を呈している。また、下流部には扇状地が形成されており、河道には砂州の発達した網状流路がみられ、霞堤が整備されているなど、下流部特有の河川景観を呈している。

常願寺川流域の代表的な河川景観としては、上流部では鳶崩れ、立山カルデラ、称名滝、粟巣野(あわすの)段丘などが挙げられる。また、下流部の扇状地には、安政 5 年（1858 年）の大災害をはじめとした、常願寺川の洪水で流されてきた巨石が広く分布している。



上空から見た立山カルデラ



上流部の河川景観

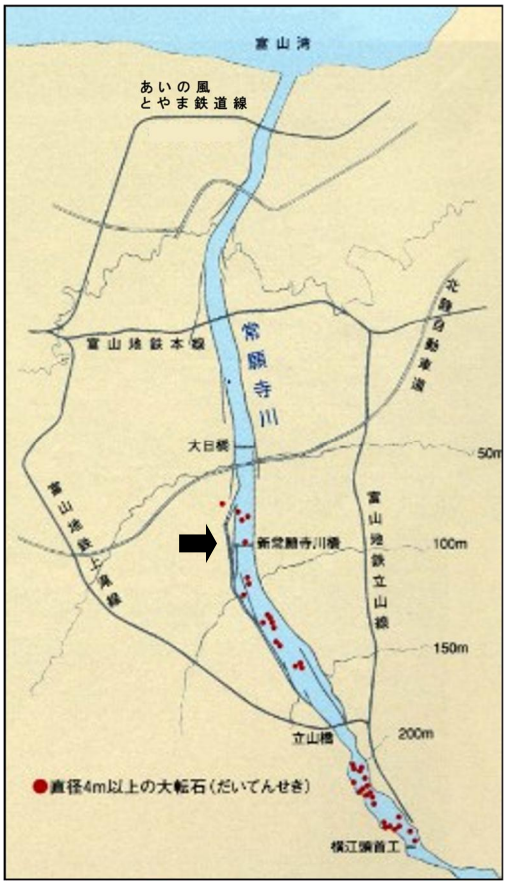


中流部の河川景観



下流部扇状地の様子

図 2.17　常願寺川流域の河川景観



●直径 4m 以上の大転石



大場の大転石

左図中矢印



田圃に点在する大転石

図 2.18　大転石位置図

2.3.2　流域における文化財等

(1)　国指定文化財等

常願寺川流域内には国特別天然記念物 3 物件をはじめとし、国指定名勝・天然記念物 1 物件、国指定天然記念物 3 物件、国指定有形文化財 10 物件、国登録記念物 1 物件、国登録有形文化財 3 物件がある。

表 2.12　国指定文化財等一覧表

番号	指定別	種別	種類	名称	所在地	指定年月日
1	国指定	重要文化財	建造物	雄山神社前立社壇本殿	立山町	M39.4.14
2	国指定	重要文化財	建造物	旧嶋家住宅	立山町	S46.3.11
3	国指定	重要文化財	建造物	立山室堂	立山町	H7.6.27
4	国指定	重要文化財	建造物	常願寺川砂防施設 白岩堰堤	富山市・立山町	H21.6.30
5	国指定	重要文化財	建造物	常願寺川砂防施設 本宮堰堤	富山市・立山町	H29.11.28
6	国指定	重要文化財	建造物	常願寺川砂防施設 泥谷堰堤	富山市	H29.11.28
7	国指定	重要文化財	彫刻	木造慈興上人坐像	立山町 （芦峅雄山神社）	S6.1.19
8	国指定	重要文化財	彫刻	銅造帝釈天立像	立山町 （立山博物館）	S43.4.25
9	国指定	重要文化財	工芸品	銅錫杖頭附鉄剣 （剣岳発見）	立山町 （立山博物館）	S34.6.27
10	国指定	重要有形 民俗文化財	－	立山信仰用具	立山町 （立山博物館）	S45.3.9
11	国指定	名勝・天然 記念物	－	称名滝	立山町	S48.5.29
12	国指定	天然記念物	－	立山の山崎圏谷	立山町	S20.2.22
13	国指定	天然記念物	－	真川の跡津川断層	富山市	H15.7.25
14	国指定	天然記念物	－	新湯の玉滴石産地	富山市	H25.10.17
15	国登録	登録有形 文化財	建造物	上滝発電所	富山市	H13.10.12
16	国登録	登録有形 文化財	建造物	松ノ木発電所	富山市	H13.10.12
17	国登録	登録有形 文化財	建造物	中地山発電所	富山市	H13.10.12
18	国登録	登録記念物	－	立山砂防工事専用軌道	立山町	H18.7.18
19	国特別	特別天然 記念物	－	薬師岳の圏谷群	富山市	S27.3.29
20	国特別	特別天然 記念物	－	ライチョウ	－	S30.2.15
21	国特別	特別天然 記念物	－	ニホンカモシカ	－	S30.2.15

出典：この資料は、「富山県」ホームページより引用したものである。

(2) 県指定文化財等

常願寺川流域内には、県指定天然記念物 3 物件をはじめとし、史跡・名勝・天然記念物 1 物件、県指定有形文化財 6 物件、県指定有形民俗文化財 2 物件、県指定無形民俗文化財 1 物件がある。

表 2.13　県指定文化財等一覧表

番号	指定	種別	種類	名称	所在地	指定年月日
1	県指定	有形文化財	工芸品	青磁浮牡丹唐草文香炉	立山町 （芦峅雄山神社）	S40.01.01
2	県指定	有形文化財	工芸品	黄銅製仏餉鉢	立山町 （芦峅雄山神社）	S40.02.01
3	県指定	有形文化財	工芸品	牡丹花蝶雀文鏡	立山町 （芦峅雄山神社）	S40.02.01
4	県指定	有形文化財	書跡・典籍・古文書	越中立山芦峅寺古文書	立山町 （芦峅雄山神社）	S40.01.01
5	県指定	有形文化財	書跡・典籍・古文書	越中立山岩峅寺古文書	立山町 （芦峅雄山神社）	S40.01.01
6	県指定	有形文化財	歴史資料	川合文書	立山町 （立山博物館）	H05.08.18
7	県指定	有形民俗文化財	－	立山参道の石塔並びに石仏群	立山町	S42.01.12
8	県指定	有形民俗文化財	－	芦峅閻魔堂の仏像群	立山町	S43.06.18
9	県指定	無形民俗文化財	－	芦峅寺のおんば様のお召し替え	立山町	H17.07.30
10	県指定	史跡・名勝・天然記念物	－	称名滝とその流域 （悪城の壁、称名滝、称名廊下、地獄谷、みくりが池）	立山町	S40.01.01
11	県指定	天然記念物	－	上滝不動尊境内の大アカガシ	富山市	S59.02.22
12	県指定	天然記念物	－	立山山麓ひかりごけ発生地	立山町	S40.01.01
13	県指定	天然記念物	－	芦峅雄山神社境内杉林	立山町 （芦峅雄山神社）	S42.09.26

出典：この資料は、「富山県」のホームページより引用したものである。

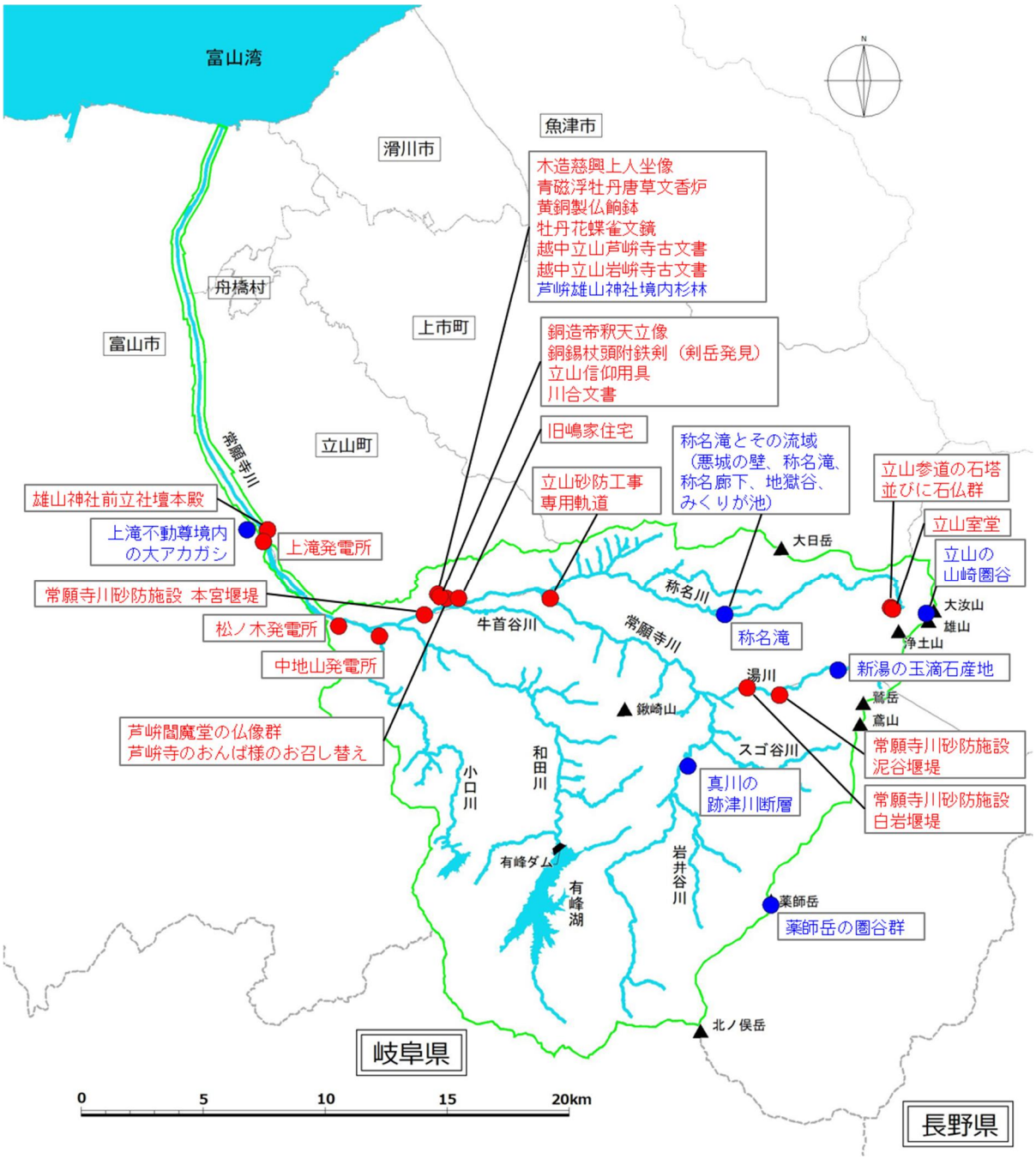


図 2.19　常願寺川にかかわる名勝及び天然記念物、文化財位置図

2.3.3　常願寺川にまつわる歴史・文化

(1)　治水施設

1)　佐々堤（さっさてい）

富山市馬瀬口、常西用水の川底に見える石張は、「佐々堤」とよばれている堤防の名残である。戦国時代の常願寺川は富山市馬瀬口地先で頻繁に決壊し、そのたびに富山城下が泥流の被害をこうむっていた。そのため越中守護職であった佐々（さっさ）は堤防を造らせた。



出典：立山砂防事務所

図 2.20　佐々堤（川底に見える石張が当時の天端部分）

2)　殿様林（とのさまばやし）

明和 6 年（1769 年）、富山六代藩主前田利與（まえだとしとも）は、丹波から取り寄せた松苗を水防林として植栽させ、常願寺川の洪水を警戒した。後世、これを「殿様林」と呼ぶようになった。戦争中に伐採されたため、その数は減少したが、現在は 100 本ほど残っており、堤防沿いにその一部を見ることができる。



図 2.21　殿様林

3) 済民堤（さいみんてい）

「済民堤」は、戦国時代に越中守護職佐々成政が築いたといわれる堤防が、その後、安政 5 年（1858 年）の大洪水で埋まってしまい、改めて築かれたものである。治水民福に尽くした佐々成政を偲んで、「済民堤」と名付けたといわれている。



図 2.22　済民堤

4) 大場（おおば）の大転石

常願寺川扇状地に、径約 4m～7m（重量約 100t～600t）の巨石が 40 数個分布している。この巨石は、安政 5 年（1858 年）4 月、富山平野に大きな被害を与えた土石流のあかしである。



図 2.23　大場の大転石

5)　巨大水制群

水制は流水から河岸や堤防を守るために、水の流れる方向を変え、水の勢いを弱くするために設置されたものである。常願寺川には多数の巨大水制が整備されている。このピストル型水制や、根固工として全国で利用されている十字ブロックは常願寺川で開発された急流河川工法である。



図 2.24　巨大水制群

6)　横江堰堤

ヨハネス・デ・レーケの「合口計画」に基づき、横江堰堤は、岡田砂防ダムとして着手されたものの、戦時体制で建設資材が入手困難であったことから中断され、その後、農地開発営団事業として引き継がれ、横江頭首工として昭和 27 年度（1952 年度）に竣工した。これにより常願寺川の水は、ここで一括して取水し、常西・常東の各用水へ流すようになった。横江堰堤は用水を取水する際に、取水位を安定させる役割を果たしている。



図 2.25　横江堰堤

7) 上滝床固

扇頂部の上滝地先において、洪水で河床が侵食されることを防ぎ、川の勾配を一定に保つため「床固工」が施工され、昭和 29 年（1954 年）に竣工した。



出典：富山市観光協会

図 2.26　上滝床固

8) 常願寺川公園

天井川対策として昭和 24 年（1949 年）から同 42 年（1967 年）にかけて、タワーエキスカベーターという掘削機械を用いて河床の掘削工事が行われた。この掘削土が盛り立てられた場所に整備されたのが、大日橋の右岸近くにある常願寺川公園である。公園からは目の前を流れる常願寺川から立山連峰までが見渡せ、遊歩道が常願寺川の堤防沿いに続くほか、桜並木や運動場等も整備され、多くの沿川住民に利用されている。



図 2.27　常願寺川公園

(2) 観光・景勝地

常願寺川流域における観光・景勝地は、代表的なものとして、富山県と長野県間の北アルプスを縦貫する山岳観光ルートの『立山黒部アルペンルート』がある。ケーブルカー、ロープウェイ、トロリーバス等の多彩な乗り物を乗り継ぐ交通機関が特徴であり、毎年 4 月下旬の開通時期には、雪壁の高さが 15m 以上になる『雪の大谷』を縫って高原バスが走る。年間約 80 万人以上が訪れる国際的に優れた観光地である。また、景勝地としては、日本一の落差（総落差 350m）を誇る名勝『称名滝』、称名川左岸に続く溶結凝灰岩の壮大な岩壁（高さ 500m、延長約 2km）の『悪城の壁』、霊峰立山の『雄山』、室堂付近には水蒸気爆発で出来た『みくりが池』等がある。



出典：立山黒部アルペンルートパンフレット



出典：富山県庁





出典：立山町役場

図 2.28　立山黒部アルペンルート（左上）、称名滝（右上）
雄山（左下）、悪城の壁（右下）

1)　雪の大谷

毎年 4 月、立山黒部アルペンルートの開通前に普段はバスでしか通れない『雪の大谷』を歩くことができる。『雪の大谷』とは道路の除雪作業によってできる雪の壁で、高さは 15m 以上ある。立山の春を伝える珍しい景色である。



出典：富山市観光協会

図 2.29　雪の大谷

2)　みくりが池

『みくりが池』は、水蒸気爆発でできた湖で、晴れた日にはガラスのような水面に辺りの山なみが映り、北アルプスでも一、二を争う美しさといわれている。



出典：富山県庁

図 2.30　みくりが池

2.4　自然公園等の指定状況

常願寺川流域は、その大半が自然公園に指定されている。立山連峰を含む北アルプスを中心とした中部山岳国立公園（昭和 9 年（1934 年）指定）は、日本を代表する山岳公園であり、北から白馬岳、剱岳、大汝山、乗鞍岳、槍ヶ岳と 3,000m を超える山々が連なり、全国から多数の登山者が訪れている。また、有峰ダムを中心とした有峰県立自然公園（昭和 48 年（1973 年）指定）は、ダム湖である有峰湖周辺の原生林に、キャンプ場や自然探勝路などが整備され、多くの人々に利用されている。

表 2.14　常願寺川流域自然公園指定状況

種別	公園名	関係市町村	指定年月日及び内容
国立公園	中部山岳国立公園 76,431ha(全域)	黒部市、富山市 立山町、朝日町	S9.12. 4　区域指定 S13.12.17　特別地域指定 S40.12.22　特別地域一部変更 S44.1.10　特別地域追加指定
県立公園	有峰県立自然公園 11,600ha(全域)	富山市	S48.3.13

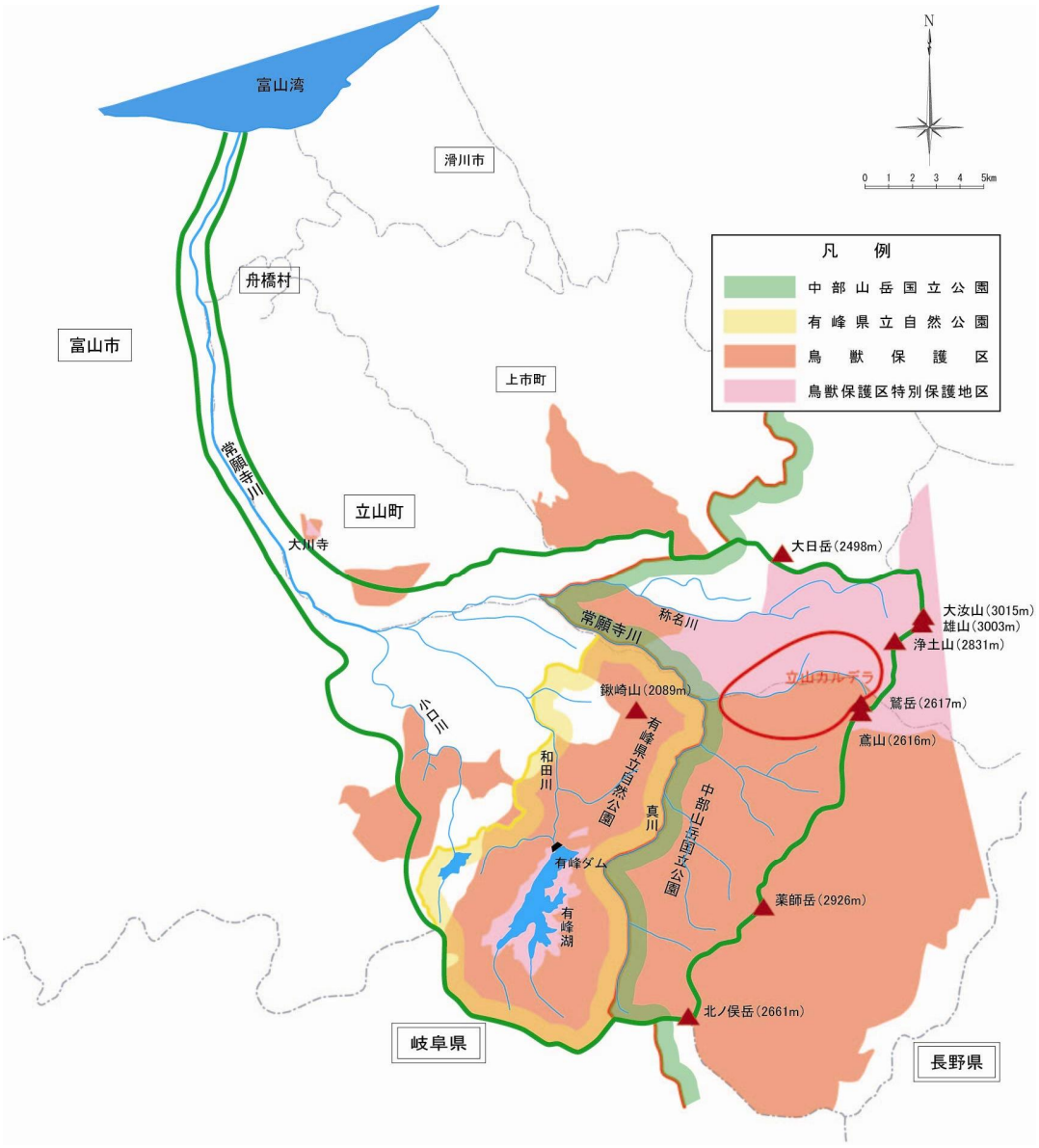
出典：富山県 HP

表 2.15　常願寺川流域鳥獣保護区　特別保護地区状況

名　　称	所在地 関係市町村	面積
立山特別保護地区	立山町、黒部市	12,485ha
北アルプス特別保護地区	富山市、大町市、松本市、高山市	11,828ha
有峰鳥獣保護区 特別保護地区	富山市	760ha

表 2.16　常願寺川流域鳥獣保護区状況

名　　称	所在地 関係市町村	面積
北アルプス鳥獣保護区	富山市、黒部市、魚津市、立山町、 朝日町、大町市、松本市、高山市	119,849ha
有峰鳥獣保護区	富山市	7,500ha
小口川鳥獣保護区	富山市	1,871ha
座主坊鳥獣保護区	立山町	450ha
吉峰鳥獣保護区	立山町	70ha



出典：『富山県自然公園等配置図』抜粋一部加筆
出典：『平成 16 年度　富山県鳥獣保護区等位置図』抜粋一部加筆

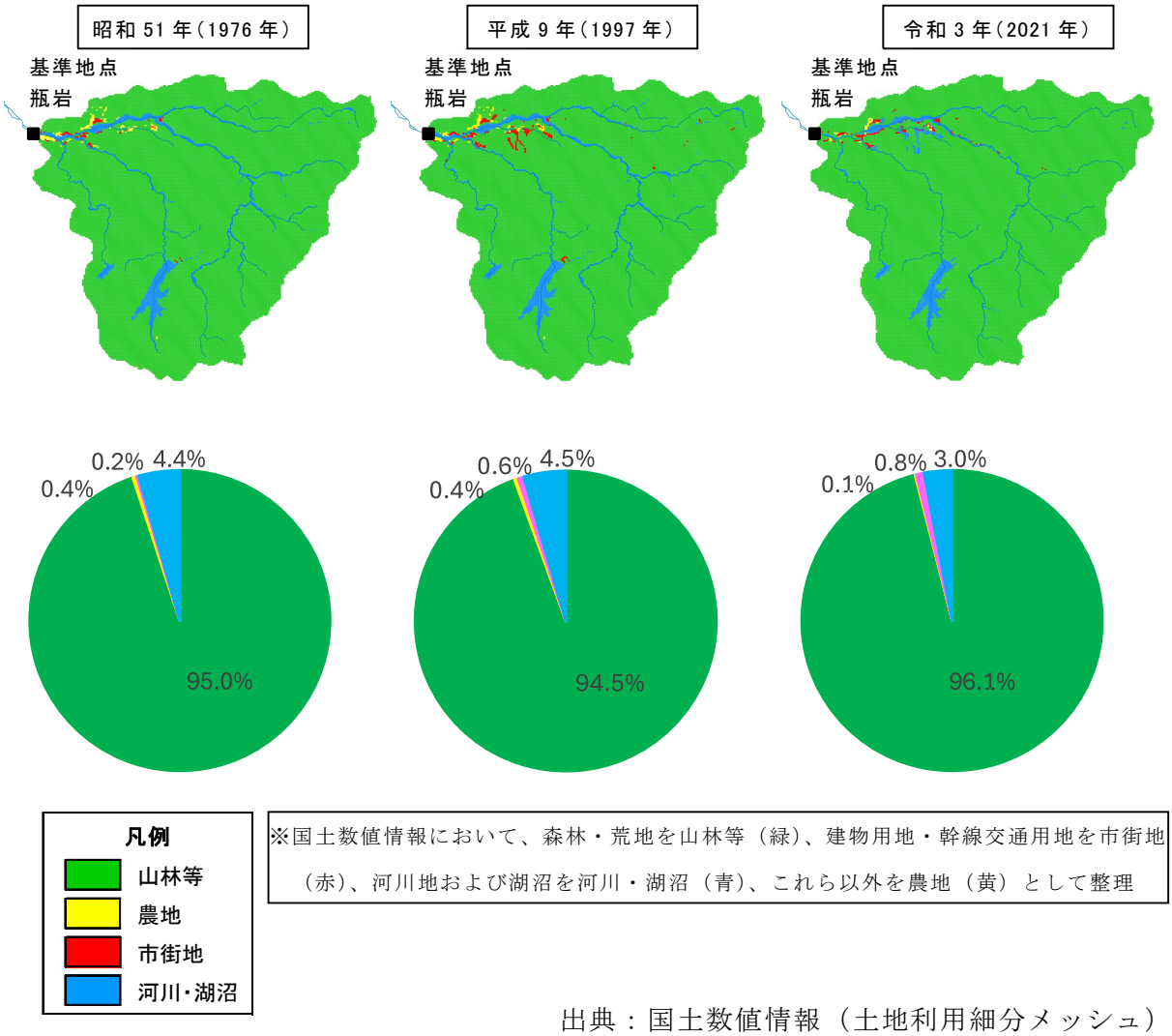
図 2.31　常願寺川流域の自然公園等

3. 流域の社会状況

3.1 土地利用

常願寺川流域は、上流域に標高 3,000m 級の立山連峰があり、下流域は扇状地となっているため、流域面積からみた山地面積の割合が約 90%とそのほとんどを占めており、平地面積はごくわずかである。

また、常願寺川流域内における土地利用の状況をみると、山地が多いことから、都市・農業地域に対して、森林・自然公園地域の割合が多く、自然に恵まれた流域であるといえる。



出典：国土数値情報（土地利用細分メッシュ）

図 3.1 常願寺川流域の土地利用の推移

表 3.1　常願寺川流域の土地利用状況：令和 3 年（2021 年）

用途	山林等	農地	市街地	河川･湖沼
面積(km²) 流域面積:368	353.4	0.7	2.9	11
割合(%)	96.1	0.1	0.8	3.0

出典：国土数値情報（土地利用細分メッシュ）

※面積は国土数値情報から算出した割合に流域面積を乗じて算定

3.2　人口

常願寺川流域関係市町の総人口は約 44 万人（令和 2 年（2020 年）国勢調査）であり、大正 9 年（1920 年）から平成 17 年（2005 年）まで増加傾向にあったが、これ以降はほぼ横ばいとなっている。平成 17 年 4 月 1 日には、市町村合併により大山町、婦中町等が富山市に合併された。また、平成 2 年（1990 年）以降の高齢化率は増加の一途を辿り、令和 2 年には 30%と総人口の約 1/3 を占めている。

自治体別では富山市の人口割合が最も大きく、次いで立山町となっている。

表 3.2　常願寺川流域関係市町の人口の推移

流域関係市町	T9 1920年	T14 1925年	S5 1930年	S10 1935年	S15 1940年	S20 1945年	S25 1950年	S30 1955年	S35 1960年	S40 1965年	S45 1970年
富山市	203,633	212,328	228,201	236,011	257,453	286,215	303,167	316,787	331,555	339,446	350,085
立山町	22,060	21,444	21,921	22,180	22,018	29,865	29,277	29,596	31,285	27,886	27,473
合計	225,693	233,772	250,122	258,191	279,471	316,080	332,444	346,383	362,840	367,332	377,558

流域関係市町	S50 1975年	S55 1980年	S60 1985年	H2 1990年	H7 1995年	H12 2000年	H17 2005年	H22 2010年	H27 2015年	R2 2020年
富山市	372,835	391,554	401,070	408,942	417,595	420,804	421,238	421,953	418,686	413,938
立山町	27,226	27,870	27,974	27,237	27,444	27,994	28,011	27,466	26,317	24,792
合計	400,061	419,424	429,044	436,179	445,039	448,798	449,249	449,419	445,003	438,730

※富山市は平成17年4月に合併した婦中町、八尾町、細入村、大沢野村、山田村を含めて算定した。

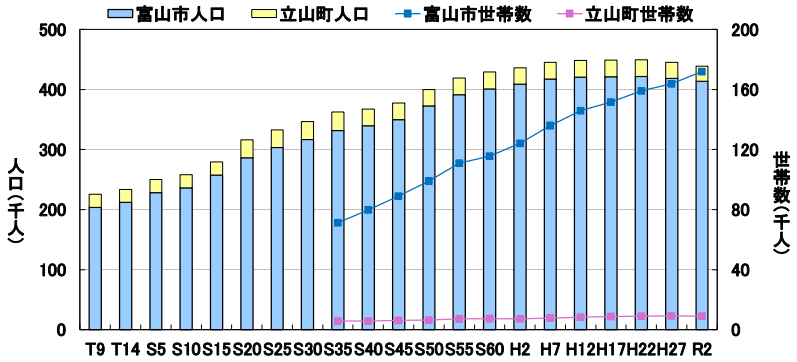


図 3.2　常願寺川流域関係市町の人口の推移

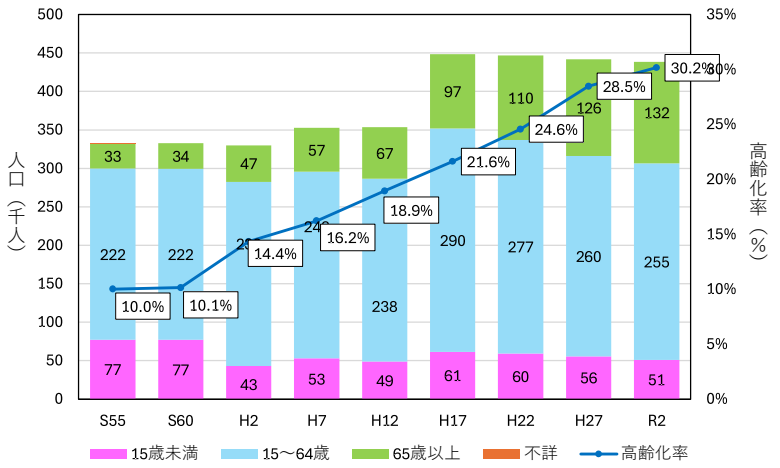


図 3.3　常願寺川流域関係市町の年齢別人口の推移

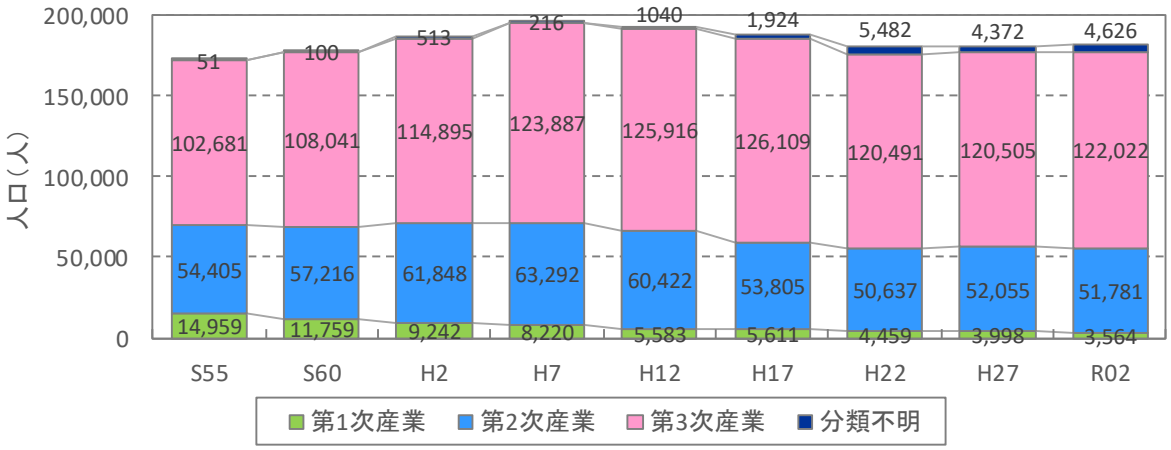
出典：国勢調査

3.3　産業と経済

富山県の産業のはじまりは、富山藩の産業振興策として発展した売薬業にある。

現在、常願寺川上流域において、35 箇所の発電所で総最大出力約 82 万 kW の電力供給が行われ、富山県の全世帯約 43 万世帯の約 78%に相当する発電を行っている。また、豊かな水と安価な電力により工業立地が進み、現在では日本海側屈指の工業集積を誇っている。これらの工場では、大量の水を使用し、工業用水としての水利用も多い。中・下流域には大きな工業団地がつくられ、今では農業とともに、流域の町をささえる重要な産業になっている。

また、常願寺川の下流域は扇状地が形成され、水田が広がり、米づくりが盛んで、富山県を代表する米どころとなっている。横江頭首工（堰堤）で取水された農業用水は、左岸側の常西用水路・右岸側の常東用水路に配水され、扇状地をアミの目のようにはりめぐらされている各用水路に流れ、約 7,450ha もの田畑を潤している。



出典：H12 以前までを富山県勢要覧、H17 以降を国勢調査

図 3.4　流域関係市町（富山市、立山町）における産業就労人口割合の推移

表 3.3　流域関係市町（富山市、立山町）における産業就労人口割合の推移

単位（人）

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	分類不明	合計
S55	14,959	54,405	102,681	51	172,096
S60	11,759	57,216	108,041	100	177,116
H2	9,242	61,848	114,895	513	186,498
H7	8,220	63,292	123,887	216	195,615
H12	5,583	60,422	125,916	1,040	192,961
H17	5,611	53,805	126,109	1,924	187,449
H22	4,459	50,637	120,491	5,482	181,069
H27	3,998	52,055	120,505	4,372	180,930
R02	3,564	51,781	122,022	4,626	181,993

出典：H12 以前までを富山県勢要覧、H17 以降を国勢調査

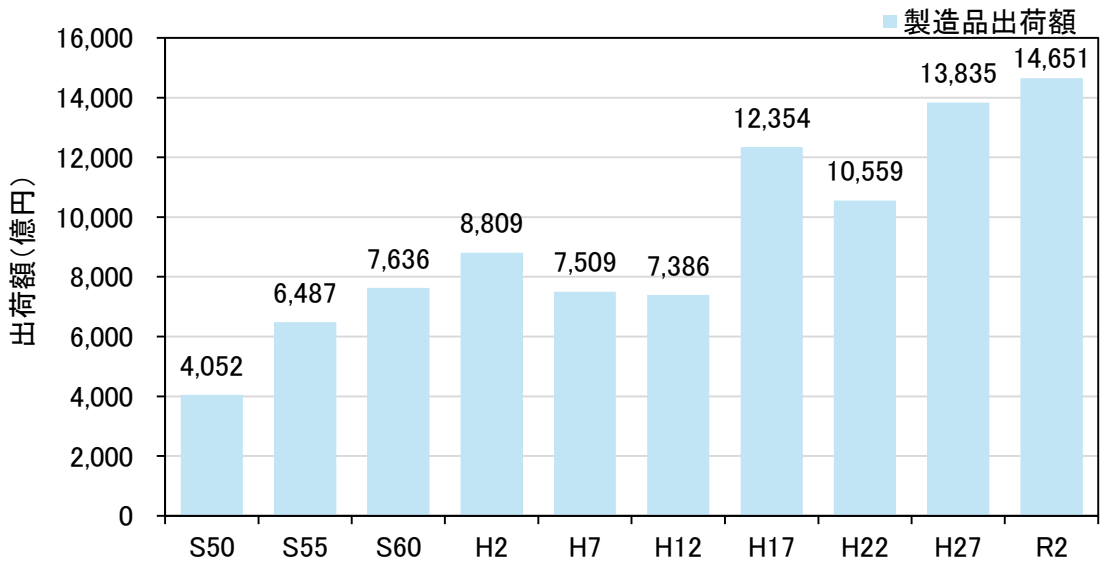


図 3.5　流域関係市町（富山市、立山町）製造品出荷額の推移

表 3.4　流域関係市町（富山市、立山町）製造品出荷額の推移

単位（億円）

	合計	富山市	立山町
S50	4,052	3,909	143
S55	6,487	6,238	250
S60	7,636	7,277	359
H2	8,809	8,288	521
H7	7,509	7,032	477
H12	7,386	6,887	499
H17	12,354	11,725	628
H22	10,559	9,956	603
H27	13,835	13,080	755
R2	14,651	13,830	821

出典：富山県勢要覧

3.4　交通

常願寺川は県都富山市を流域に抱え、富山県の交通の大動脈である一般国道 8 号及び北陸自動車道（立山インターチェンジ）の他、北陸新幹線、あいの風とやま鉄道、富山地方鉄道等の基幹交通施設が整備されている。常願寺川沿いには、上流域と富山市街等を結ぶ主要地方道や富山地方鉄道が整備されている。また、上流域では、立山町千寿ヶ原から立山黒部アルペンルートによって長野県大町市へと繋がっている。東京を起点として長野、上越、富山、金沢等の主要都市を経由する北陸新幹線が整備されており、常願寺川流域は交通の要衝となっている。

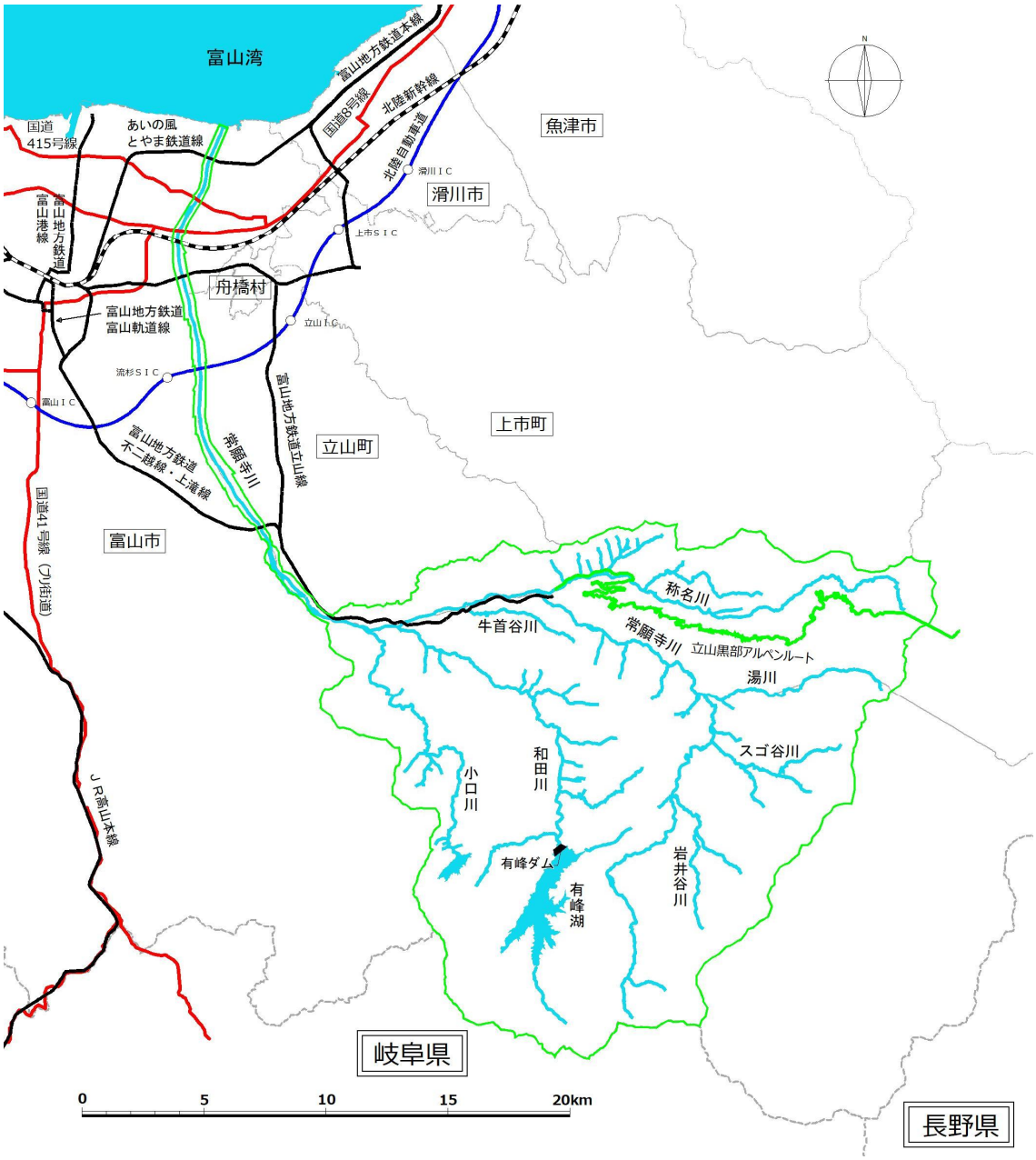


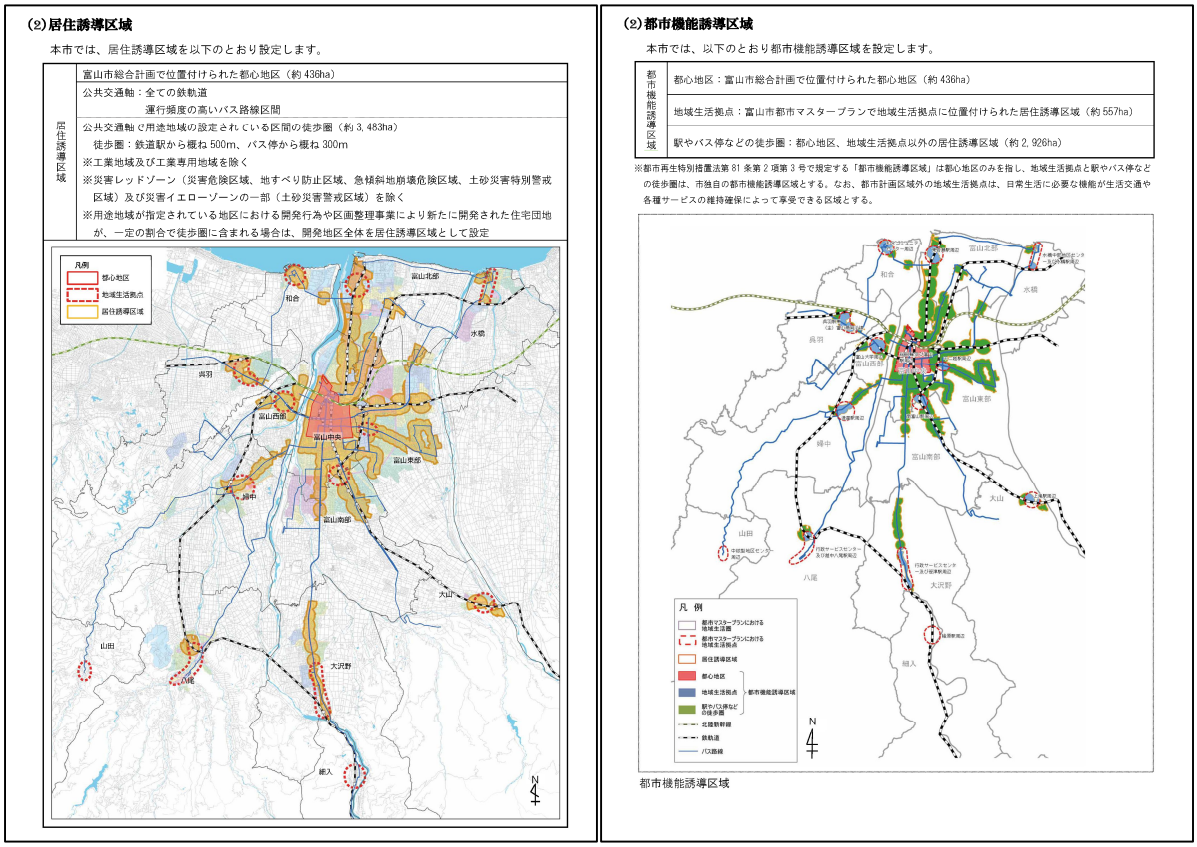
図 3.6　常願寺川流域の交通網

3.5　関係法令の指定状況

○立地適正化計画

・富山市

富山市では、人口減少や高齢社会においても持続可能な都市経営ができるよう、平成 29 年（2017 年）3 月に立地適正化計画を策定しており、市街化区域内で、「居住誘導区域」及び「都市機能誘導区域」を設定している。また、令和 5 年（2023 年）11 月変更時に防災指針の追加と分析評価を実施している。



出典：富山市立地適正化計画

図 3.7　富山市立地適正化計画における居住誘導区域・都市機能誘導区域の設定状況

4. 水害と治水事業の概要

4.1 既往洪水の概要

安政 5 年（1858 年）に起きた飛越地震では、常願寺川上流の立山カルデラ内で「鳶崩れ」と呼ばれる大崩壊が発生し、河道を閉塞した。その後、二度にわたる河道閉塞の崩壊により、土石流が富山平野まで押し寄せ、大きな被害をもたらした。この災害を契機に常願寺川は、氾濫が頻繁に発生する荒廃河川に変貌したといわれている。

以下に、常願寺川の過去の主要な洪水の一覧表及び主要洪水の概要を示す。

安政 5 年（1858 年）の大地震により上流の立山カルデラを形成する大鳶一帯が大崩壊して以来、常願寺川は全くの荒廃河川となり、河床は水源山地から流出する土砂により年々上昇し、洪水の度に溢水破堤が起こり、惨憺たる被害をみることが少なくなかった。

表 4.1 常願寺川流域の主要な洪水（大正まで）

発生年月日	原因	被災状況
安政5年 (1858年) 4月26日	地震	・2月25日の大地震による水源地の大鳶・小鳶の山峰が崩壊し川筋を塞ぎ、3月13日溢水、4月26日遂に大決壊 ・死者140人、負傷者8,945人、流出家屋1,603戸
明治24年 (1891年) 7月19日	集中豪雨	・岩峅寺村量水標において19日1時の水位が1丈6尺 ・堤防決壊延長6,660m ・流出田畑約700ha ・この被害により、上新川郡島村の被害者150戸が北海道や、中新川郡下段村へ移住
大正元年 (1912年) 8月26日	集中豪雨	・馬瀬口地先堤防決壊 ・浸水家屋約300戸
大正3年 (1914年) 8月13日	台風	・瓶岩量水標6.4m ・死者1人、負傷者1人、堤防決壊2,850m、堤防侵食等3,450m、氾濫面積5,493ha、田畑流失埋没1,020ha、宅地流失埋没180ha，浸水家屋910戸、橋梁流失2橋
大正11年 (1922年) 7月 5日 ～9日	台風	・常西用水の被害堤防8,900m、堆積土砂の用水流入量25,000坪 ・白岩砂防堰堤破壊

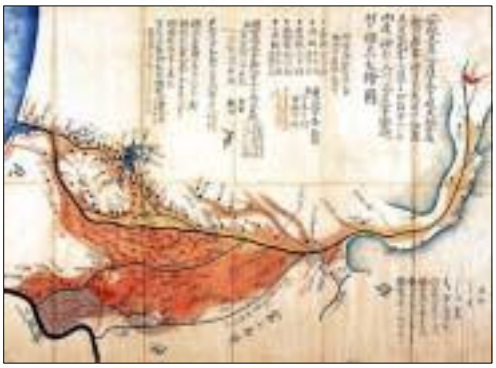
表 4.2　常願寺川流域の主要な洪水（昭和以降）

発生年月日	原因	出水状況	被災状況
昭和9年 (1934年) 7月12日	梅雨前線	日置流量：2,240㎥/s	・護岸倒壊10箇所 ・耕作被害4.9ha
昭和27年 (1952年) 7月 1日	梅雨前線	瓶岩流量：2,200㎥/s	・堤防決壊335m ・護岸倒壊8箇所 ・耕地流失埋没518ha ・家屋浸水床上329戸、床下893戸
昭和39年 (1964年) 7月 8日	梅雨前線	瓶岩流量：1,240㎥/s	・根固流出、護岸倒壊、水制破損8箇所
昭和44年 (1969年) 8月11日	集中豪雨	瓶岩流量：3,980㎥/s	・堤防決壊150m ・堤防侵食、護岸・根固流出、水制倒壊等16箇所
昭和53年 (1978年) 6月27日	梅雨前線	瓶岩流量：1,360㎥/s	・護岸倒壊、根固流出、河岸侵食等9箇所 （最大被災延長216m）
平成7年 (1995年) 7月11日	梅雨前線	瓶岩流量：1,237㎥/s	・根固流出、河岸侵食等5箇所 （最大被災延長400m、最大侵食幅200m）
平成10年 (1998年) 8月12日	梅雨前線	瓶岩流量：1,545㎥/s	・護岸・根固流失、河岸侵食等5箇所 （最大被災延長240m、最大侵食幅40m）
平成17年 (2005年) 6月	梅雨前線	瓶岩流量：1,720㎥/s	・河岸侵食等9箇所 （最大侵食幅50m）

1)　安政 5 年（1858 年）4 月 26 日洪水

2 月 25 日の大地震による水源地の大鳶・小鳶（ことんび）の山峰が崩壊し川筋を塞ぎ、3 月 13 日その水が溢水し、4 月 26 日遂に大決壊となり、岩峅寺にある雄山神社境内まで浸水した。このため、下流一帯に甚大な被害を与え、水源から扇状地に至る全域にわたって、一大荒廃河川と化した。この洪水による被害は、当時の富山藩領内の 18 ヶ村に及び、大地は所々亀裂を生じ、人々は家財を棄て争って逃げまどい、大騒ぎになったという。

洪水は沿川堤防を一挙に破壊し、死者 140 人、負傷者 8,945 人、流出家屋 1,603 戸にも及んだ。





(写真)大場の大転石
　上流から流されてきた大きな石



(左上写真)
　安政五年常願川非常洪水山里変地之模様見取図「里方図」水害の様子を描いている
　所蔵：滑川市立博物館

(右上写真)
　地水見聞録
　地震にともなった液状化現象も描いている
　所蔵：富山県立図書館

2)　明治 24 年（1891 年）7 月 19 日洪水

17 日より県下一帯を襲った大雨は、岩峅寺村量水標において 19 日 1 時の水位が 1 丈 6 尺を記録する大洪水となった。

堤防の決壊は、左岸で朝日前 1,160m、大中島 1,000m、大場前 1,080m、馬瀬口 2,340m、右岸で利田前 180m、日置前 180m、二ツ屋 360m、西大森 360ｍで起きた。また、流失田畑は約 700ha にのぼった。



明治２４年洪水氾濫図

3) 大正元年（1912 年）8 月 26 日洪水

県下一帯に降り続いた大雨の影響で、馬瀬口（ませぐち）地先の堤防が決壊し、常願寺川全川の約 6 割の洪水がいたち川に流入して沿川田地を洗い、道路や家屋の破壊、橋梁の流失と、その被害は惨酷を極めた。

4) 大正 3 年（1914 年）8 月 13 日洪水

台風の影響によって県下一帯が集中豪雨となり、最大時間雨量 49.1mm を記録した。また、水位は洪水痕跡から、瓶岩量水標で 6.4m を記録した。

堤防決壊 2,850m、堤防侵食等 3,450m、氾濫面積 5,493ha、橋梁流失 2 橋、田畑の流失埋没 1,020ha、宅地の流失埋没 180ha、浸水家屋 910 戸に及び、その間の降水量は伏木観測所創設以来のものとなった。



（写真）旧上新川郡島村朝日地先
荒廃河川特有の土砂を含んだ氾濫流により、家屋が埋没した。

5) 大正 11 年（1922 年）7 月 5 日洪水

7 月上旬の水源地一帯の大崩壊により多量の土砂が洪水の如く流下し、6 日には湯川谷合流点付近で大崩壊が発生、その土石流は高さ 18m にも及んだ。

7 月 5 日より 20 日間にも及ぶ土石の流下で常西用水路はほとんど完全に埋没し、被害堤防 8,900m、堆積土砂の用水流入量は 25,000 坪にも達した。

また、上流の白岩砂防堰堤は過去 17 年間の歳月と巨財、多くの犠牲者によって築かれたが、一朝にして根底より破壊されるに至った。

6) 昭和 9 年（1934 年）7 月 12 日洪水

9 日午後より県下一帯を襲った大雨は、12 日までに連続雨量が立山において 897mm に達し、水位は日置量水標では 12 日 19 時 4.0m を記録し、流量に換算して 2,240m^3/s と記録的な大出水となった。

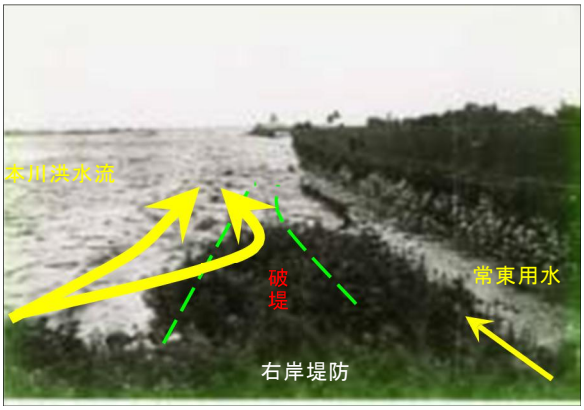
7 月 9 日より 11 日までの集中豪雨と、この豪雨による湯川（ゆかわ）筋の多枝原（だしはら）の大崩壊により、急流荒廃河川特有の土砂流を伴った大洪水となり、堤防侵食や橋梁、道路の破壊が生じ、大正 3 年（1914 年）以来の大被害が発生した。12 日夕方より暫時減水したものの、堤防侵食箇所等の補強と被災民の救助等を 9 日より懸命に行いながら、なお 20 日間にもわたる断続的な降雨に難航し、県では全力を尽くして応急対策にあたるとともに、富山歩兵 35 連隊より救援隊を編成して出動させた。

本川においても 11 日夜以来の未曾有の大洪水で、左岸側の富山市西ノ番、朝日前、大場前、大中島地先で堤防侵食等が続出し、12 日の早朝には破堤寸前となり関係官民の必死の努力と、水勢の変化により破堤をまぬがれ、富山市を水禍から守ることができた。

この出水による被害としては、堤防護岸の倒壊 10 箇所、延長 1,030m に達し、耕作被害は 4.9ha に及んだ。

7) 昭和 27 年（1952 年）7 月 1 日洪水

ダイナ台風の数日後、日本海全域に横たわった低気圧と本州南方海上の高気圧の影響により、発達した梅雨前線が次第に北上し、北陸地方では 6 月 30 日 10 時頃より山間部において豪雨となったが、7 月 1 日朝まで降り続いた雨は、9 時頃にようやく小康状態になった。



(写真)三ツ塚新地先の破堤の状況

このため本川は改修着手以来の豪雨出水となり、水源地の水谷においては連続雨量 473mm を記録し、30 日 16 時頃より増水し 7 月 1 日 7 時には最高水位に達した。

被害箇所は、何れも古来より本川の水衝部として難場といわれるところに主流が坂落とし式に激突し、堤防護岸の倒壊等の被害が 8 箇所に及んだ。中でも中新川郡立山町三ッ塚新地先で水防活動も空しく破堤し、激流は堤防、堤内沿の常東用水に奔流し、用水下流部の耕地の家屋浸水床上 329 戸、床下 893 戸、流失埋没 518ha 等の大被害が生じた。

8) 昭和 39 年（1964 年）7 月 8 日洪水

7 月 7 日から日本海中部に低気圧があって、発達しながら東に進み、この中心を通る前線は、5 時頃より次第に降雨が強くなり、8 時には、時間雨量にして 30mm 前後で 8 日 5 時～12 時迄の雨量は 150mm に達した。このため本川は次第に増水し、上滝床固において 9 時に警戒水位に達し 10 時には今次出水の最高水位 1.70m を記録し、その後次第に減水したが再び 1.60m となり 22 時に至り徐々に減水を始めた。

この出水による被害は、護岸根固工の木工沈床が傾倒流失したほか、法覆工や水制の破損が 8 箇所に及んだ。

9)　昭和 44 年（1969 年）8 月 11 日洪水

前線の停滞により 8 月 8 日夜より 9 日にかけて断続的に降り続いていた雨は、10 日から 11 日未明に、次第に弱まり県東部は集中豪雨となり、時間雨量で千寿ヶ原 59mm、有峰 72mm を記録した。この降雨により上滝水位観測所では 11 日 8 時に 1.33m（警戒水位 1.30m）と警戒水位を上まわり、10 時には 2.50m、11 時に 3.0m と急上昇し、11 時 20 分には 3.30m と最高になった。22 時にようやく警戒水位を下ったが、本川としては例にみない警戒水位の持続を記録した。

直轄管理区域では、近年にない大出水により全川にわたり護岸根固沈下流失、水制の破損、倒壊等の大被害を被ったものであるが、11 日 14 時 20 分頃に、中新川郡岩峅野地先で本堤が侵食を受け、地元住民、水防団約 150 名の必死の水防活動も手のほどこしようもなく、本堤 150m が破堤した。

中新川郡立山町三ツ塚新地先も本堤が 30m にわたり決壊した。また、中新川郡立山町西大森地先では水防活動により本堤決壊を防止することが出来た。





（右上写真）必死の水防活動で地域を水害から守った
（右下写真）岩峅野地先では洗掘により破堤した

10)　昭和 53 年（1978 年）6 月 27 日洪水

東部山岳地帯を中心に集中豪雨となり、本川流域の立山室堂で日雨量 393mm となり、総降水量 419mm と近年にない記録的な降水量となった。このため、瓶岩水位観測所では 27 日 8 時より指定水位 4.00m を越え、9 時には警戒水位の 5.40m を突破し、その後 27 日中指定水位、警戒水位を上回る水位を持続し、28 日早朝より徐々に減水を始めた。

27 日夜半よりの豪雨で大臣管理区間では、増水と流水の急変により河床変動が生じ、この偏流により主流の激突する水衝部が数箇所発生、これが原因となって護岸、根固沈下流失、水制の破損倒壊、堤脚部の侵食等による法覆工の破損陥没等、富山市水橋常願寺地先他 9 箇所にて被害を被った。

富山市水橋常願寺地先（右岸 6km）では、27 日 13 時頃より偏流による主流が直撃し、本堤全面を保護していた広大なる高水敷が流失し（幅 70m 前後）、護岸根固が倒壊するとともに法留工、法覆工の堤脚部の背面が洗掘により沈下して、本堤が危険な状態となったが、市職 40 人、消防員 13 人、地元水防団 7 人の計 60 人と建設省側で 70 人が出動し、蛇篭 17 本の応急投下といった水防活動を実施し、本堤決壊をまぬがれた。



(上写真)河床の局所洗掘により巨大水制が傾く（立山町利他地先）

11)　平成 7 年（1995 年）7 月 11 日洪水

北陸地方に停滞していた梅雨前線は、10 日 10 時頃から雨を降らせ、13 日 8 時頃まで降り続いた。上空の湿った空気が前線に流れ込み、大気の状態が不安定となり、局地的豪雨を発生させた。山間部では継続的に強い雨が観測され、累計雨量は、室堂で 628mm、折立で 272mm となった。この豪雨の影響で大川寺水位観測所では、11 日 17 時に指定水位を超え、水位は上昇を続け、11 日 21 時に警戒水位を超えた。その後、水位は警戒水位付近を上下し、12 日 12 時頃に最高水位 5.55m を記録した。

常願寺川では、高水敷の侵食、根固工の流出など 5 箇所で被害があり、その延長は、1,200m にも及んだ。

12)　平成 10 年（1998 年）8 月 7 日洪水

南から暖かく湿った空気が流れ込み、活性化した梅雨前線が北陸付近で停滞したため、大雨となった。8 月 6 日深夜より雨が降り始め、昼前まで降り続いた。立山町の千寿ヶ原雨量観測所では 7 日 9 時から 10 時までの時間雨量が 58mm、7 日 6 時から 9 時までの 3 時間雨量が 152mm を記録するなど、短時間に非常に強い雨となった。大川寺水位観測所では 7 日 9 時に指定水位 4.20m を超え、7 日 9 時 40 分に警戒水位 5.10m を越え、最高水位 5.15m を記録した。

常願寺川では、高水敷の侵食、根固工の流失など 5 箇所で被害が発生し、その延長は 750m にも及んだ。





（上写真）出水により河岸が侵食される

（大島地先）

(右写真)河床の局所洗掘により傾く水制工

13)　平成 17 年（2005 年）6 月 28 日洪水

北陸地方では 6 月 27 日から 29 日にかけ活発な梅雨前線の影響で新潟県や富山県で 300 ミリを超える大雨になった。27 日に朝鮮半島から東北地方に延びた梅雨前線の活動が活発となり、東北地方から新潟県下越地方で大雨となった。この前線は北陸地方をゆっくり南下して、29 日には山陰沖から福井県付近に達し活動はやや弱まった。

この前線による雨は、1 時間降水量では 30mm から 40mm であったが、連続してほぼ半日程度続いたため特に新潟県などで日降水量は記録的なものとなった。

梅雨前線は 30 日になって再び富山県付近まで北上し、活動が活発となっている。

常願寺川では、河岸侵食等は 9 箇所に及び、最大侵食幅は 50m となった。

4.2 治水事業の沿革

常願寺川の治水事業の歴史は古く、天正 9 年（1581 年）、越中守護職佐々成政が、富山市馬瀬口地先に富山城下を守るために堤防を築造したのが最初とされている。江戸時代には、富山藩の六代藩主前田利與が、洪水対策の水防林として松を植えさせたという記録があり、現在も「殿様林」として、松の木が 100 本ほど残っている。

その後、安政 5 年（1858 年）の大地震により上流の立山カルデラを形成する鳶山一帯が大崩落し、それにより発生した河道閉塞がその後に決壊することにより、大量の土砂とともに洪水流が下流域へ流出し、死者約 140 人、人家流出約 1,600 軒にのぼる大被害をもたらした。これ以来、常願寺川は全くの荒廃河川となった。

明治 24 年（1891 年）には、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケは農業用取水の統合による扇頂部での合口取水、新川掘削による白岩川との河口分離、大幅な引堤、堤防の改築等の治水計画を立案し、これに基づき富山県は、河口から上滝までの本格的な改修工事に着手し、同 26 年（1893 年）に完了した。

常願寺川は、上流からの土砂の流出が甚だしいことから、富山県が明治 39 年（1906 年）に上流の砂防工事に着手し、土砂かん止を図ったが、大正 3 年（1914 年）、同 11 年（1922 年）の大出水によって、激甚な被害を受けたため、同 15 年（1926 年）から直轄砂防事業として着手している。その後、昭和 9 年（1934 年）7 月洪水を契機に、同 11 年（1936 年）、内務省直轄河川として、瓶岩地点における計画高水流量を 3,100m³/s と定めて改修事業に着手し、堤防、護岸、洪水流を制御するためのコンクリートを用いた巨大水制を施工した。また、昭和 24 年（1949 年）から同 42 年（1967 年）にかけて、タワーエキスカベーターによる大規模な河床掘削を実施した。このとき川全体を掘るのではなく、土砂が最も溜まりやすい、富山市三郷から立山町利田までの 5km の区間を重点的に掘り下げることにより、それより上流は掘った部分に土砂を溜め、下流側では土砂が自然の力で海へ流れ出ることで河床を下げ、天井川の解消を図った。

昭和 42 年（1967 年）に一級河川の指定を受け、同 43 年（1968 年）に従来の計画を踏襲した工事実施基本計画を策定した。その後、昭和 39 年（1964 年）7 月、同 44 年（1969 年）8 月洪水等の大出水に鑑み、同 50 年（1975 年）に工事実施基本計画を改定し、計画高水流量を 4,600m³/s とした。

河床低下を図り、河道を安定させるための河道掘削、床固や水制の整備が進捗した結果、昭和 40 年代前半から局所的な洗掘により、既設施設基礎の浮き上がりが発生してきたため、昭和 50 年代以降は、水衝部の護岸の根継ぎを主に実施している。その後、洪水による河岸侵食・河床洗掘について研究を進め、これらの対策として堤防の質的整備事業に平成 16 年度（2004 年度）より着手し、平成 19 年（2007 年）より、中小洪水時における流向の改善を図り、河岸侵食および洗掘を抑制するため、巨石付き盛土砂州による河岸防護工を実施している。

平成 17 年（2005 年）には、常願寺川水系河川整備基本方針を策定し、平成 21 年（2009 年）度に策定した常願寺川水系河川整備計画（大臣管理区間）に基づき、洪水調節施設による調節は行わず、計画高水流量 4,600m³/s を計画高水位以下で流下させるため、流下能力が不足している区間において、築堤、河道掘削を実施してきた。また、急流河川特有の

洪水時の流水の強大なエネルギーに対し、中小洪水を含めた侵食や洗掘から堤防の安全性を確保するため、根継護岸・前腹付工の急流河川対策を実施するとともに、砂防事業と連携を図りながら、土砂供給や河道の土砂堆積等の土砂動態に関するモニタリングを実施してきた。

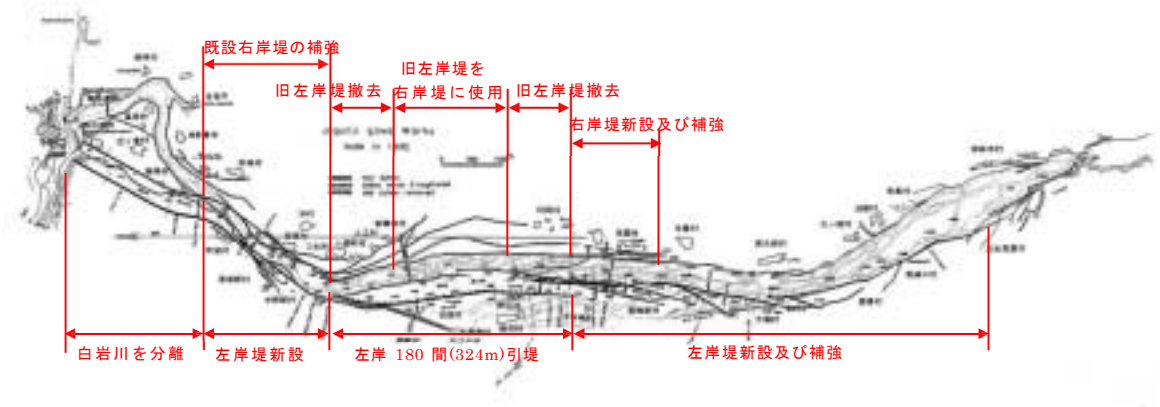


図 4.1　ヨハネス・デ・レーケ氏の改修計画図（案）



タワーエキスカベーター



巨大水制群と根固工

4.2.1　計画高水流量改定の経緯

(1)　旧河川法下の計画高水流量（昭和 11 年（1936 年）計画）

大正 3 年（1914 年）8 月 13 日洪水の水位をもとに、流域面積、流出係数等を参酌し、改修区域の上流において 3,100 ㎥/s、常願寺橋付近において 2,700 ㎥/s とした。

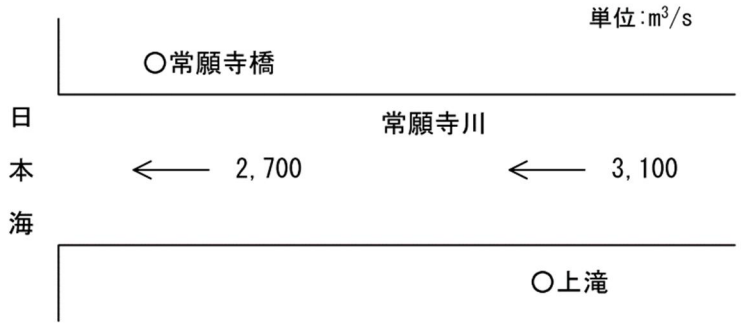


図 4.2　計画高水流量図（昭和 11 年計画）

(2)　工事実施基本計画における計画高水流量

1)　昭和 43 年（1968 年）2 月 7 日策定

現行計画を踏襲し、改修区域の上流において 3,100 ㎥/s、常願寺橋付近において 2,700 ㎥/s とした。

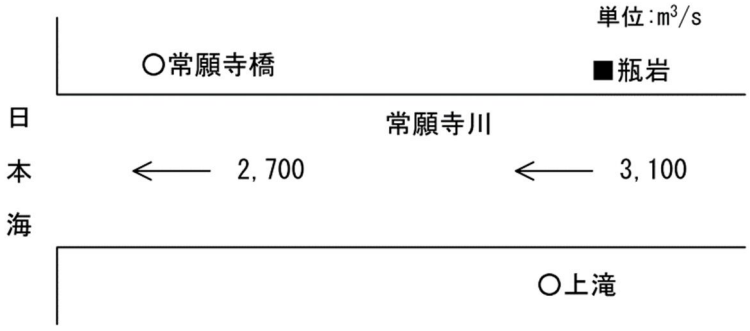


図 4.3　計画高水流量図（工事実施基本計画（昭和 43 年策定））

2)　昭和 50 年（1975 年）4 月 1 日改定

計画雨量は瓶岩上流域 498mm/2 日で、昭和 44 年（1969 年）8 月 11 日洪水を対象として、瓶岩地点における基本高水のピーク流量及び河道、ダムへの配分は次のとおりである。

表 4.3　流量配分（昭和 50 年 4 月 1 日改定）

基準地点	基本高水のピーク流量（m³/s）	河道配分流量（m³/s）	ダム調節量（m³/s）
瓶岩	4,600	4,600	0

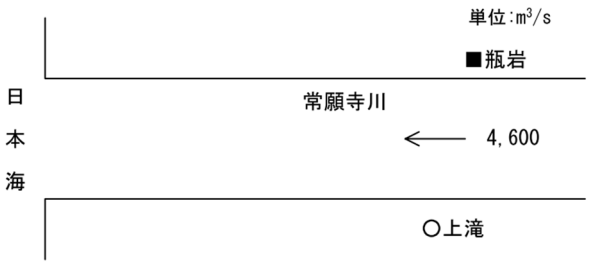


図 4.4　計画高水流量図（工事実施基本計画（昭和 50 年改定））

(3)　河川整備基本方針における計画高水流量（平成 17 年（2005 年）11 月 18 日策定）

平成 15 年（2003 年）まで雨量を延伸後の確率雨量および確率流量評価を実施し、現行計画を踏襲した。そのため、計画高水流量は瓶岩地点から河口にかけて 4,600m3/s とした。

表 4.4　流量配分（河川整備基本方針（平成 17 年策定））

基準地点	基本高水のピーク流量	洪水調節施設による調節流量	河道への配分流量
瓶岩	4, 600m³/s	0m³/s	4, 600m³/s

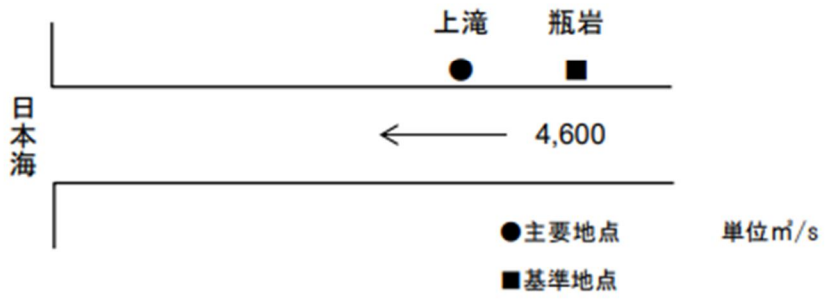


図 4.5　計画高水流量図（河川整備基本方針（平成 17 年策定））

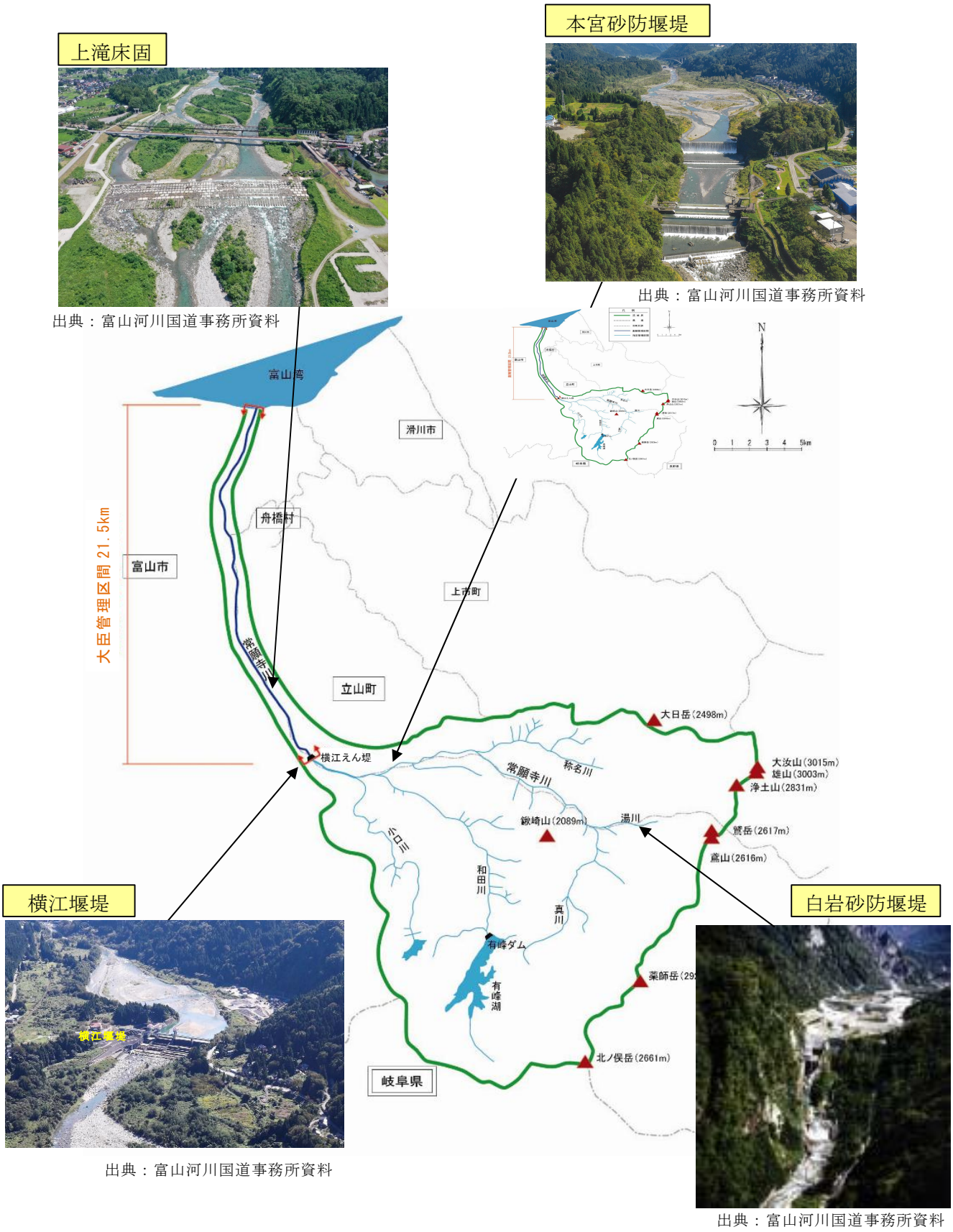


図 4.6　主要な河川関係構造物位置図

表 4.5　常願寺川水系における治水事業の沿革

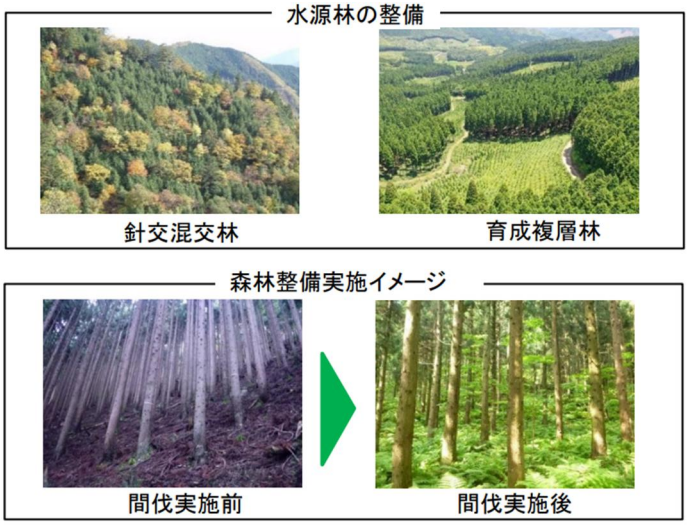
西暦	年号	計画の変遷	主な事業内容
1883	明治16	オランダ人技師ルーエンホルスト・ムルデルが常願寺川を含む富山県内の主要河川について実地調査し、調査報告書を内務省に提出	
1891 ～ 1893	明治24 ～明治26	県事業として改修に着手	オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケの計画立案により河口～上滝間で築堤護岸、取水口の合口化、常願寺川と白岩川を分離工事
1906	明治39	県事業として砂防工事に着手	
1922	大正11	県事業として堤防嵩上げ工事に着手	
1926	大正15	上流の砂防工事を国直轄事業として着手	
1935	昭和10	県事業として、本宮砂防堰堤工事に着手	
1936 ～ 1949	昭和11 ～昭和24	計画高水流量を改修区域上流で3,100㎥/s、下流で2,700㎥/sに決定	国直轄事業として左岸河口～上滝、右岸河口～立山町間の改修工事の着手、岡田堰堤（横江堰堤）工事
1949	昭和24	治水調査会常願寺川委員会での検討により、水源より河口まで一貫した方針（水系一貫主義）の治水計画となるよう改修計画を決定	天井川対策としてタワーエキスカベーターによる河床掘削開始（～S42）
1954	昭和29		河床の安定を図るため、上滝床固を設置
1967	昭和42	一級河川に指定、大臣管理区間：河口～21.5km	
1968	昭和43	工事実施基本計画を策定 計画高水流量3,100㎥/s（瓶岩地点）	
1969	昭和44		河床の安定を図るため、宮地床固を設置
1975	昭和50	工事実施基本計画を改定 計画高水流量を4,600㎥/s（瓶岩地点）に改訂	
1975 ～	昭和50 ～	築堤及び護岸工事を実施	
2004 ～	平成16 ～	堤防の質的整備（侵食）を実施	
2005	平成17	河川整備基本方針を策定	
2009	平成21	河川整備計画を策定	

4.3　流域治水の取組

4.3.1　ハード対策

(1)　治水・森林整備の取組

森林の防災・保水機能等を適切に発揮するため、間伐・植栽・下刈り等の森林整備及び河川の上流域等における治山施設の整備等を行い、水源涵養機能の発揮及び流木の抑制や土石流・山腹崩壊の防止等を図り、流域治水の取組等と連携して対策を推進している。



出典：常願寺川・神通川・庄川及び小矢部川流域治水プロジェクト第 5 回協議会

図 4.7　水源林の整備と森林整備実施イメージ

4.3.2　ソフト対策

(1)　水防災に関する講習会の開催

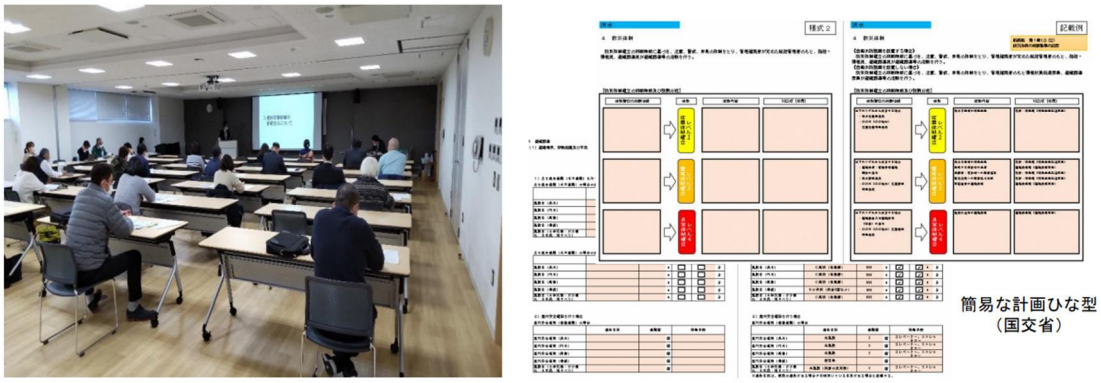
また、国でもマイ・タイムラインを作成指導する行政関係者を対象に、作成指導又は講習をする上で参考となる情報の共有を実施している。



図 4.8　マイ・タイムライン普及に向けた取組

(2)　要配慮者利用施設における避難確保計画の作成支援

要配慮者利用施設による避難確保計画の作成に向けた支援として、国、富山県、関係市町村で講習会を開催している。



出典：常願寺川・神通川・庄川及び小矢部川流域治水プロジェクト第 5 回協議会

図 4.9　講習会の実施状況（左）と国交省による簡易な計画ひな形の提供（右）

(3)　出前講座等を通じた水防災教育の実施

自然災害から命を守るためには、一人ひとりが災害時において適切な避難行動を行える能力を養う必要がある。学校等での防災教育の充実を図り、特に「命を守る」という観点に留意し、子供たちに防災についての理解を深めてもらう出前講座等を実施している。



図 4.10　フィールド学習の様子（左）とフィールド学習資料（右）

5. 水利用の状況

5.1 水利用の現状

(1) 水利用の概要

常願寺川の水は富山の暮らしや産業に多様な形で利用されており、古来農業用水はもとより、3,000m 級の山々からの豊富な融雪水を活用した水力発電が行われてきた。

大正 12 年（1923 年）に第 1 号の水力発電所が運用開始したのをはじめ、昭和 37 年（1962 年）には高さ 140m、長さ 500m、総貯水量 2.2 億㎥の有峰ダムが完成し、安定した電力供給を行っている。現在、常願寺川流域には 35 箇所の水力発電所があり、総最大出力は約 82 万 kW となっている。

表 5.1 常願寺川水系の許可水利権一覧表

水利使用目的	灌漑面積(ha)	取水量（m^3/s）	件数	備考
発電用水	－	607.242	35	最大使用水量
上水道用水	－	1.70273	3	
工業用水	－	0.937	2	
農業用水（許可）	7,445.9	61.56	3	
農業用水（慣行）	－	－	5	
雑用水	－	0.0064	1	消雪
合　　計	7,445.9	671.44813	44	

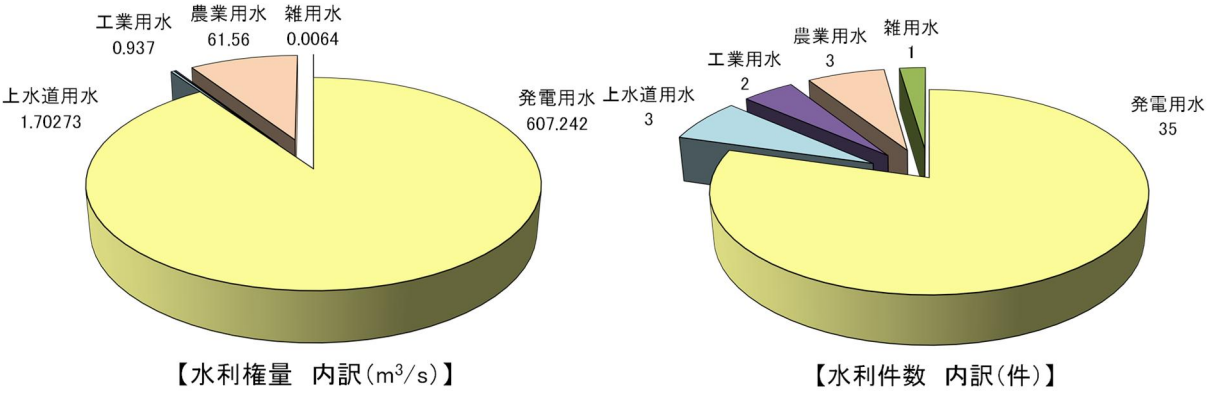


図 5.1 常願寺川水系における許可水利権許可量及び許可件数（R8.3）

常願寺川水系

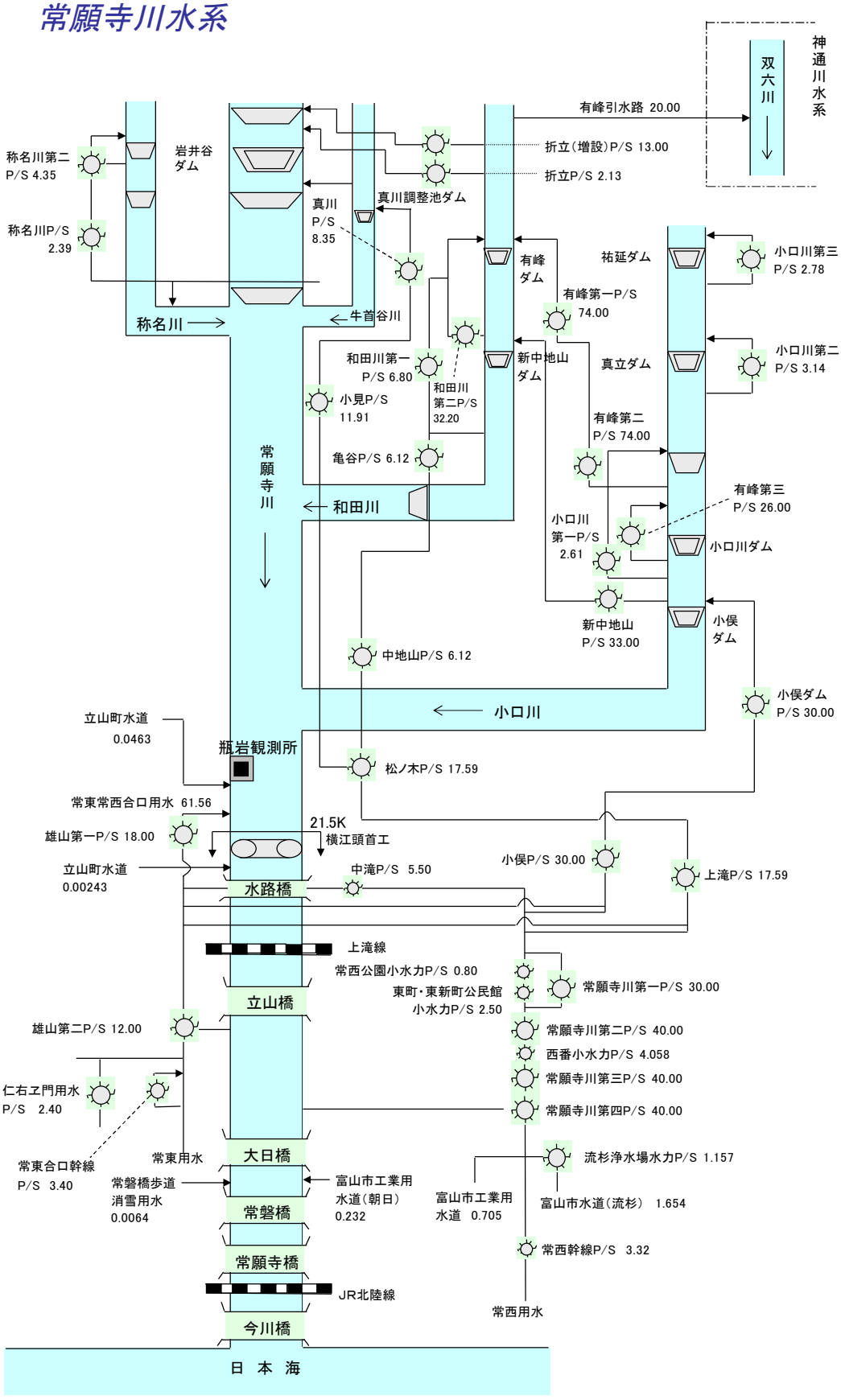


図 5.2　常願寺川水利模式図

(2) 農業用水

常願寺川流域内は、農業用水の許可水利で 61.56m³/s あり、約 7,450ha に及ぶ耕地の灌漑に利用されている。この他に、慣行水利としても 5 件の利用がある。

(3) 水道用水

常願寺川流域内は、水道用水として昭和 38 年（1963 年）に給水を開始した立山町と、昭和 54 年（1979 年）に給水を開始した富山市の 1 市 1 町で 1.70273m³/s が取水されている。

(4) 工業用水

常願寺川流域内は、工業用水として 0.937m³/s が富山市に供給されている。

(5) 発電用水

常願寺川流域内は、水力発電として有峰第一発電所をはじめとする 35 箇所の水力発電所で使用され、総最大出力約 82 万 kW の電力供給が行われている。





出典：河川の歴史読本　常願寺川

横江頭首工

有峰ダム

(6) 水需要の動向

常願寺川では、上水道用水、工業用水、農業用水、発電用水の取水がされている。今後の水需要の動向は以下に示すとおりであり、常願寺川は富山市及び立山町の貴重な水源となっている。

○上水道用水

富山市水道は常願寺川からの水利権を昭和 54 年（1979 年）5 月に取得し、現在の計画給水人口は 303,359 人であり、令和 7 年度（2025 年度）末時点の給水人口は 396,350 人、給水量約 143,000m^3/日（1.654m^3/s）という規模になっている。現時点の水道普及率は約 130.7%に達している。近年、人口は減少傾向にあり、水道普及率も高水準に達しており、新たな取水は見込まれていない。

○工業用水

伏流水を利用した工業用水（富山市工業用水道）は昭和 34 年（1959 年）4 月から取水を開始して、伏流水の取水量を段階的に増加させ、昭和 54 年（1979 年）5 月には常西合口用水からの分離により新たに 0.821m^3/s の水利権量を富山市が取得し、現在は最大 0.937m^3/s を利用している。

近年、産業就労人口は横ばいであり、新たな取水は見込まれていない。

○農業用水

今から約 350 年前の寛文年間（1661～1673 年頃）に水田への引水が始まった。その後、明治 25 年（1892 年）の合口による取水口の一本化、昭和 27 年（1952 年）の常東、常西合口用水の整備等を経て現在に至っている。水利権は昭和 17 年（1942 年）11 月に取得している。

昭和62年(1987年)3月末日時点では、かんがい面積が8,930.5ha、最大取水量が62.21m^3/s、普通かんがい期の取水量は 39.2m^3/s であった。令和 8 年（2026 年）4 月現在では、かんがい面積 7,445.9ha に対し、最大取水量 61.56m^3/s、普通かんがい期取水量は 36.49m^3/s とかんがい面積及び取水量はいずれも減少している。この他に慣行水利としても農業用水に利用されている。

かんがい面積は減少しており、新たな取水は見込まれていない。

○発電用水

大正 12 年（1923 年）に運用を開始した亀谷発電所を第 1 号として発電所が建設され、昭和 37 年（1962 年）5 月には、支川和田川に常願寺川水系最大かつ富山県内最大の利水容量を有する有峰ダムが完成している。

現在までに 35 箇所の発電所が建設され、発電所利用水量合計は最大で 607.242m^3/s を使用しているが、新たな取水は見込まれていない。

5.2　渇水被害の概要

常願寺川水系では、渇水に関する深刻な被害はほとんど発生していない。

全国的に渇水被害が発生した平成 6 年（1994 年）は、5 月、6 月に例年の平均雨量に対し 7～8 割の降雨があったものの、7 月の降雨量が例年の 19%にまで減少した。このため、上流の発電用のダム（有峰ダム）の貯水量は、7 月末で 54%（対平年比 62%）の貯水率まで低下し、農業用水の水利使用者としても自主的に節水を行った。この節水は、かんがい期終了の 9 月始めまで実施された。

6. 河川の流況と水質

6.1 河川流況

常願寺川の瓶岩地点における過去 63 年間（昭和 37 年（1962 年）～令和 6 年（2024 年））の流況は、平均低水流量約 4.6m³/s、平均渇水流量約 2.5m³/s である。常願寺橋地点における過去 33 年間（平成 4 年（1992 年）～令和 6 年（2024 年））の流況は、平均低水流量約 11.1m³/s、平均渇水流量 4.7m³/s である。大川寺地点における過去 26 年間（平成 11 年（1999 年）～令和 6 年（2024 年））の流況は、平均低水流量約 1.9m³/s、平均渇水流量約 1.1m³/s である。

表 6.1　瓶岩地点における流況表

【単位：m^3/s】

No.	年	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小
1	1962 (S37)	204.20	7.40	3.10	1.60	1.00	0.50
2	1963 (S38)	372.40	13.10	3.30	2.20	0.60	0.60
3	1964 (S39)	1,020.00	10.00	3.40	2.10	1.70	1.40
4	1965 (S40)	440.20	26.50	3.00	2.10	1.70	1.70
5	1966 (S41)	582.44	26.87	6.80	3.37	1.33	0.83
6	1967 (S42)	674.44	11.03	3.66	2.40	1.56	0.45
7	1968 (S43)	553.52	8.95	4.56	2.72	1.68	1.48
8	1969 (S44)	2,764.02	43.50	22.04	6.01	2.55	0.83
9	1970 (S45)	310.51	25.89	10.19	3.96	1.68	0.01
10	1971 (S46)	763.36	16.39	5.56	3.07	0.53	0.06
11	1972 (S47)	788.17	13.28	7.52	4.66	2.53	2.07
12	1973 (S48)	218.96	9.27	4.37	3.58	2.34	1.81
13	1974 (S49)	626.93	15.33	3.67	2.30	1.38	0.97
14	1975 (S50)	542.42	13.82	5.89	3.00	2.00	0.42
15	1976 (S51)	641.46	16.07	8.34	4.37	2.02	0.38
16	1977 (S52)	167.87	10.96	3.77	2.32	1.73	1.51
17	1978 (S53)	1,353.45	12.79	4.21	2.95	1.67	0.92
18	1979 (S54)	469.10	12.82	6.83	3.76	1.72	0.80
19	1980 (S55)	344.30	16.52	7.32	4.31	1.67	0.69
20	1981 (S56)	1,059.76	25.04	6.79	2.77	1.97	0.46
21	1982 (S57)	282.04	13.54	6.30	3.34	1.48	0.62
22	1983 (S58)	711.42	21.71	6.81	3.85	2.06	0.79
23	1984 (S59)	1,025.00	欠測	欠測	欠測	欠測	1.36
24	1985 (S60)	755.53	15.11	5.96	3.18	2.41	1.63
25	1986 (S61)	159.20	13.94	4.65	1.89	1.10	0.61
26	1987 (S62)	226.86	10.98	4.25	2.15	1.10	0.68
27	1988 (S63)	582.27	11.32	4.68	3.04	2.02	1.41
28	1989 (H1)	455.15	15.71	6.94	3.96	2.65	2.05
29	1990 (H2)	898.67	11.68	5.69	3.59	2.16	1.09
30	1991 (H3)	529.71	27.34	9.65	4.28	2.72	1.90
31	1992 (H4)	552.54	11.43	6.41	3.63	2.04	1.30
32	1993 (H5)	558.22	21.12	8.78	4.18	2.20	1.46
33	1994 (H6)	180.45	欠測	欠測	欠測	欠測	0.79
34	1995 (H7)	1,237.16	19.94	10.84	4.73	1.91	1.28
35	1996 (H8)	1,193.25	欠測	欠測	欠測	欠測	1.61
36	1997 (H9)	729.86	22.42	11.73	4.98	2.11	1.43
37	1998 (H10)	1,544.69	30.54	14.93	7.89	2.59	1.02
38	1999 (H11)	697.80	19.99	10.01	5.07	1.65	1.26
39	2000 (H12)	843.40	17.58	8.86	4.01	2.50	1.54
40	2001 (H13)	457.71	19.18	5.79	3.58	2.56	1.97
41	2002 (H14)	365.77	14.84	8.80	5.03	3.31	2.63
42	2003 (H15)	379.13	22.95	9.93	5.31	3.47	2.60
43	2004 (H16)	1,131.51	26.00	11.97	5.83	3.14	0.96
44	2005 (H17)	1,720.00	18.81	9.70	4.36	2.07	0.00
45	2006 (H18)	313.63	27.27	15.36	6.62	3.81	3.01
46	2007 (H19)	527.83	16.06	9.45	5.83	3.25	1.86
47	2008 (H20)	370.97	19.54	11.14	6.50	4.26	2.99
48	2009 (H21)	716.86	19.76	11.85	7.39	5.23	4.18
49	2010 (H22)	422.52	19.25	13.30	7.94	5.71	3.44
50	2011 (H23)	487.00	27.40	13.14	7.38	5.09	4.29
51	2012 (H24)	435.74	19.84	8.80	5.20	3.56	2.67
52	2013 (H25)	欠測	24.56	12.78	7.64	4.67	欠測
53	2014 (H26)	367.92	19.70	13.03	9.48	5.58	3.69
54	2015 (H27)	566.44	25.41	12.42	6.91	2.25	1.11
55	2016 (H28)	812.83	17.91	9.59	5.76	0.97	0.00
56	2017 (H29)	1,071.88	29.03	12.70	6.65	4.10	0.36
57	2018 (H30)	923.70	24.49	9.95	5.16	2.80	0.77
58	2019 (R1)	402.39	16.05	8.07	5.25	3.44	2.64
59	2020 (R2)	欠測	15.78	7.29	4.66	3.03	欠測
60	2021 (R3)	491.97	18.84	10.70	6.42	3.51	2.56
61	2022 (R4)	欠測	17.26	11.13	5.69	2.91	欠測
62	2023 (R5)	876.00	16.64	10.76	6.19	3.91	3.30
63	2024 (R6)	欠測	23.41	13.38	5.80	2.89	欠測
累計平均		—	18.66	8.53	4.57	2.53	—
過去10ヶ年平均		—	20.48	10.60	5.85	2.98	—

※累計平均は、1962 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
※過去 10 ヶ年平均は、2015 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
出典：1962 年～2002 年　流量年表　国土交通省河川局編　日本河川協会発行：毎正時
　　2003 年～2024 年　国土交通省　水文水質データベース

表 6.2　常願寺橋における流況表

【単位：m^3/s】

No.	年	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小
1	1992 (H4)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
2	1993 (H5)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
3	1994 (H6)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
4	1995 (H7)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
5	1996 (H8)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
6	1997 (H9)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
7	1998 (H10)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
8	1999 (H11)	欠測	30.29	20.51	10.98	3.57	欠測
9	2000 (H12)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
10	2001 (H13)	643.80	34.28	19.38	13.22	7.51	1.79
11	2002 (H14)	600.52	29.02	18.21	9.89	4.86	1.77
12	2003 (H15)	555.62	38.74	23.49	14.44	7.69	2.95
13	2004 (H16)	1277.93	39.05	26.45	16.15	6.52	2.76
14	2005 (H17)	1103.99	38.96	25.49	15.31	5.06	0.93
15	2006 (H18)	665.84	37.51	22.84	11.24	4.98	2.64
16	2007 (H19)	853.32	21.61	15.52	9.19	3.45	0.75
17	2008 (H20)	376.08	23.54	14.45	10.15	5.66	1.29
18	2009 (H21)	705.91	23.51	14.05	8.45	4.51	1.60
19	2010 (H22)	317.73	29.92	18.77	11.39	4.53	2.16
20	2011 (H23)	385.18	37.03	21.13	12.75	5.21	1.99
21	2012 (H24)	360.03	24.37	12.85	6.44	0.69	0.00
22	2013 (H25)	579.63	32.88	18.56	9.73	4.36	1.74
23	2014 (H26)	338.52	31.24	20.75	12.78	5.41	2.38
24	2015 (H27)	欠測	36.53	19.68	10.80	4.92	欠測
25	2016 (H28)	903.55	29.23	15.65	8.75	1.47	0.37
26	2017 (H29)	1,257.93	39.93	27.98	15.26	3.09	0.59
27	2018 (H30)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
28	2019 (R1)	欠測	25.71	16.62	10.21	5.67	欠測
29	2020 (R2)	618.76	22.22	15.91	9.99	5.31	1.62
30	2021 (R3)	欠測	28.69	16.82	9.74	2.61	欠測
31	2022 (R4)	554.67	24.12	16.42	11.48	6.34	1.10
32	2023 (R5)	902.00	18.71	10.83	6.46	2.74	1.04
33	2024 (R6)	660.11	31.51	19.00	11.60	7.49	2.00
累計平均		—	30.36	18.81	11.10	4.74	—
過去10ヶ年平均		—	28.52	17.66	10.48	4.40	—

※累計平均は、1992 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
※過去 10 ヶ年平均は、2015 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
出典：1992 年～2013 年　富山河川国道事務所資料
　　2014 年～2024 年　国土交通省　水文水質データベース

表 6.3　大川寺における流況表

【単位：m^3/s】

No.	年	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小
1	1999 (H11)	770.65	3.90	1.51	1.12	0.64	0.27
2	2000 (H12)	752.21	4.27	1.29	0.74	0.41	0.31
3	2001 (H13)	332.43	4.20	1.22	0.85	0.53	0.41
4	2002 (H14)	382.86	4.74	1.00	0.67	0.47	0.41
5	2003 (H15)	553.90	7.15	1.78	1.00	0.59	0.48
6	2004 (H16)	1,258.57	16.29	3.21	1.01	0.57	0.03
7	2005 (H17)	1,090.15	5.57	2.53	1.43	0.79	0.59
8	2006 (H18)	646.56	20.12	6.52	2.25	0.37	0.14
9	2007 (H19)	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
10	2008 (H20)	欠測	8.47	5.89	2.13	0.59	欠測
11	2009 (H21)	435.86	13.06	6.08	1.97	0.80	0.00
12	2010 (H22)	354.53	13.32	7.53	3.13	1.74	1.36
13	2011 (H23)	493.25	19.50	7.57	2.68	1.82	0.38
14	2012 (H24)	491.40	21.93	9.27	2.68	1.37	0.77
15	2013 (H25)	495.63	13.19	6.63	3.50	0.60	0.13
16	2014 (H26)	332.95	7.95	3.29	1.98	1.17	0.75
17	2015 (H27)	388.26	9.71	3.08	1.71	1.22	1.04
18	2016 (H28)	646.31	5.21	2.43	1.84	1.17	0.69
19	2017 (H29)	欠測	14.44	3.09	1.85	1.21	欠測
20	2018 (H30)	805.34	10.39	2.46	1.73	1.16	0.70
21	2019 (R1)	355.89	4.63	2.20	1.95	1.70	1.49
22	2020 (R2)	443.87	4.63	2.11	1.79	1.61	1.28
23	2021 (R3)	欠測	8.34	2.93	1.87	1.55	欠測
24	2022 (R4)	606.26	7.95	3.74	2.55	2.10	1.60
25	2023 (R5)	786.10	10.82	3.05	1.98	1.44	1.21
26	2024 (R6)	569.12	17.59	5.76	2.31	1.48	0.89
累計平均		—	10.29	3.85	1.87	1.08	—
過去10ヶ年平均		—	9.37	3.09	1.96	1.46	—

※累計平均は、1999 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
※過去 10 ヶ年平均は、2015 年～2024 年の欠測年を除いて算出した値
出典：1999 年～2001 年　富山河川国道事務所資料
　　2002 年～2024 年　国土交通省　水文水質データベース

6.2　河川水質

常願寺川水系の水質汚濁に係る環境基準の類型指定は、以下に示すとおりである。河口から常願寺橋までが A 類型、これより上流が AA 類型である。また、和田川上流部に位置する有峰湖は湖沼 A 類型である。

各観測地点における水質経年変化をみると、近年は全地点において基準値を満足している。

水域の範囲	類型		達成期間	告示年月日
常願寺川上流（常願寺橋より上流）	河川	AA	イ	S49.12.18
常願寺川下流（常願寺橋より下流）		A	イ	
有峰ダム貯水池（有峰湖）	湖沼	A	イ	H元3.23

達成期間についてイ：直ちに達成、ロ：5 年以内で可及的速やかに達成、ハ：5 年を超える期間で可及的速やかに達成

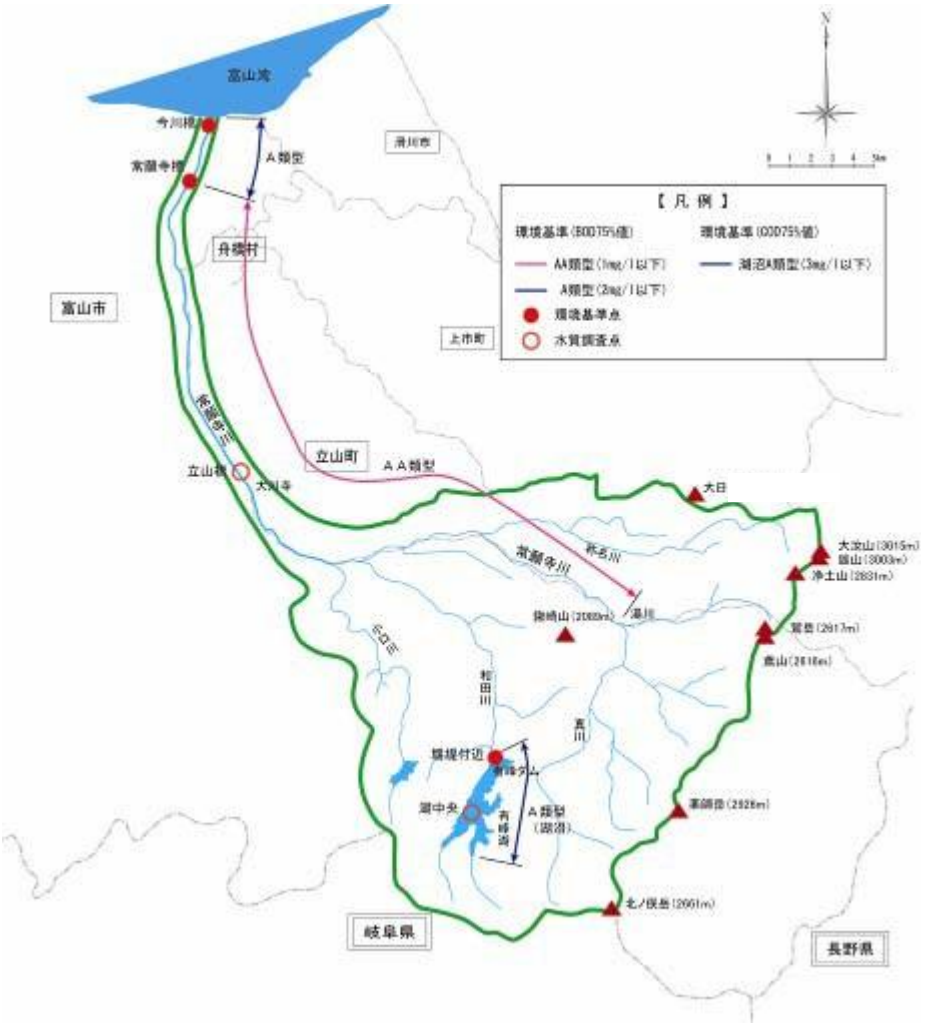
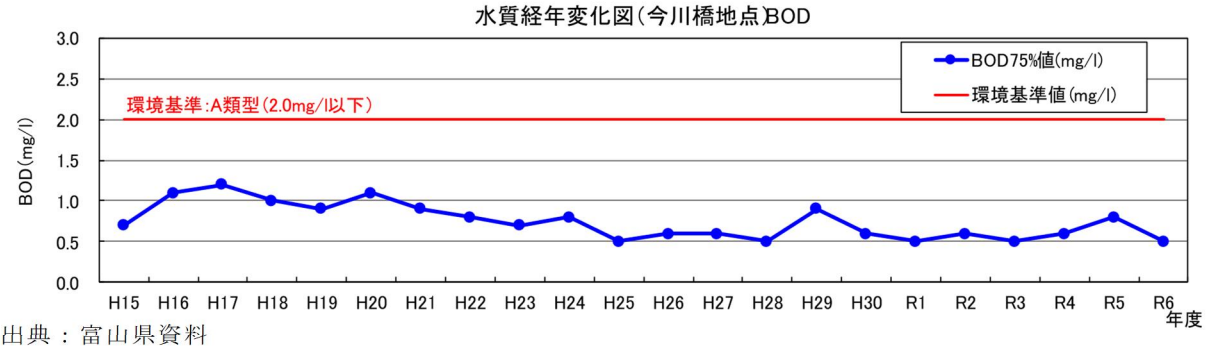
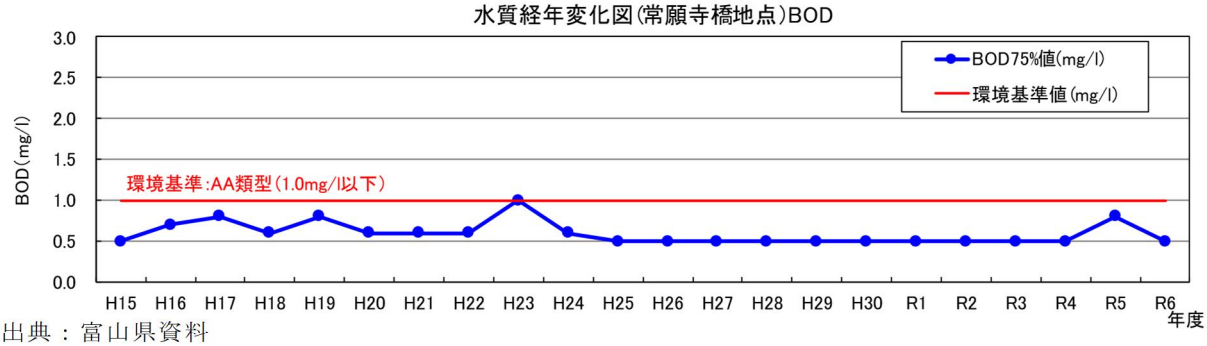


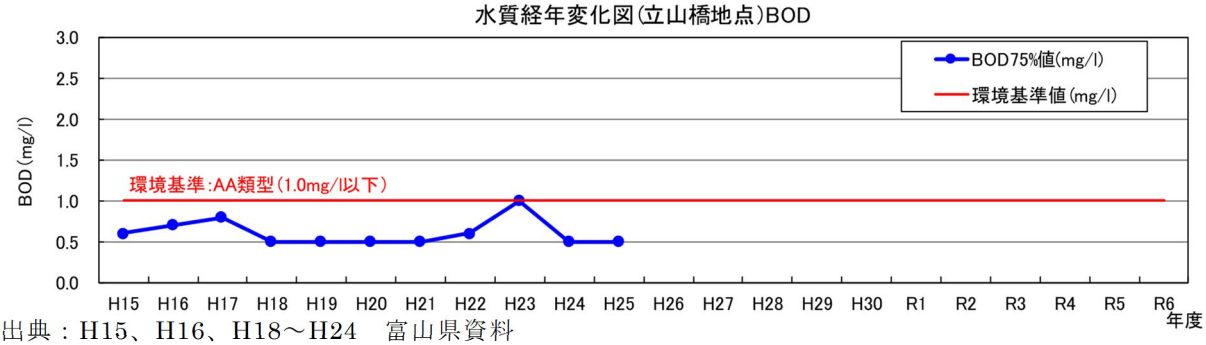
図 6.1　常願寺川流域における環境基準類型指定区分および水質調査地点



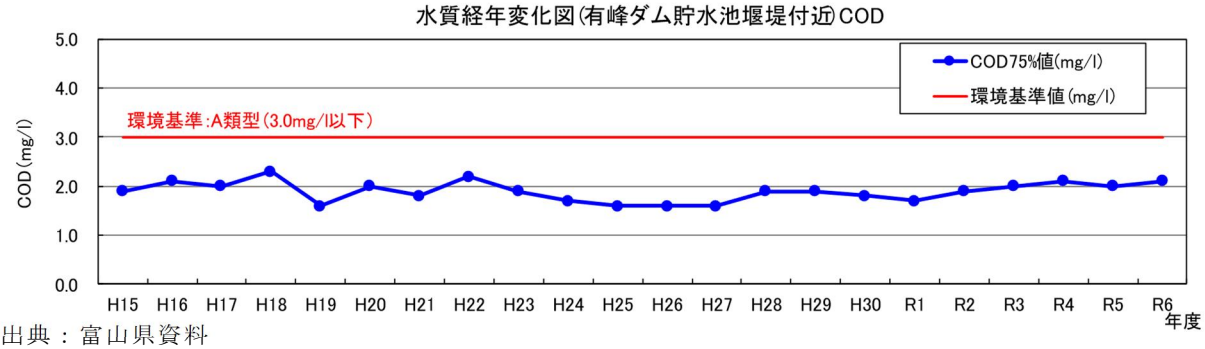
出典：富山県資料



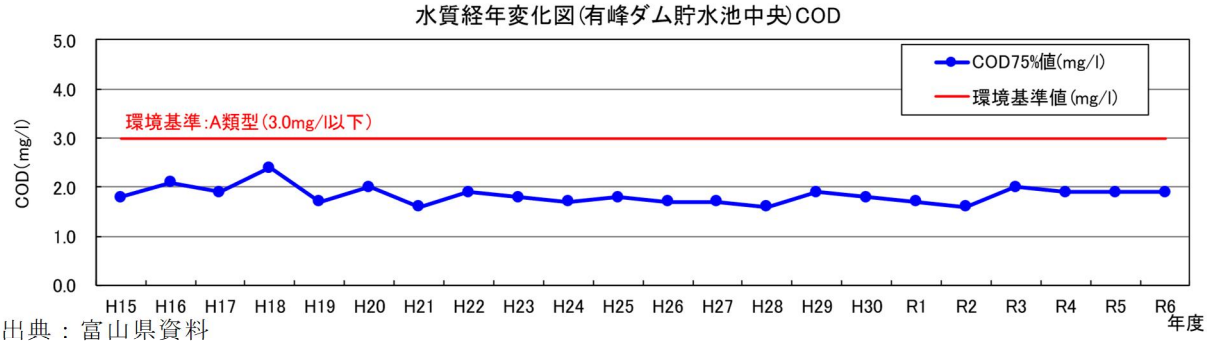
出典：富山県資料



出典：H15、H16、H18～H24　富山県資料
　　H17、H25　国土交通省　水文水質データベース
　　観測地点の見直しにより H25 以降立山橋地点の観測を廃止



出典：富山県資料



出典：富山県資料

7.　河川空間の利用状況

7.1　河川の利用状況

常願寺川における令和 6 年度（2024 年度）河川水辺の国勢調査(河川空間利用実態調査)によれば、利用形態別の利用状況は「散策等」が 64%と最も多く、次いで「スポーツ」の 32%となる。河川施設の利用によるもので、野球・サッカー・バーベキュー等を楽しむ人が多い。常願寺川には、散策等を楽しめる緑豊かな散策路の整備された公園や、野球やサッカー等の試合の出来る公園が多く整備されている。

利用者数が多い地点は、左右岸 0～1km、右岸 7～9km、左岸 8～10km、左岸 16～18km である。これらの地点は､河川公園がある箇所や釣りの良場となっている箇所である｡また、左右岸 18km 付近においては、水遊びで盛んに利用されている。

利用場所別の利用状況は「高水敷」が 71%と最も多く、次いで「堤防」の 25%、「水際」と「水面」がそれぞれ 2%であった。

常願寺川における河川空間利用は、河原での水遊びや散策と常願寺川公園や殿様林緑地におけるスポーツ利用が多いことで特徴づけられる。

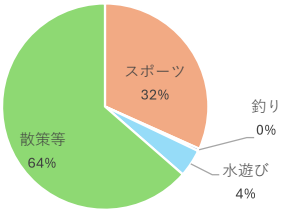
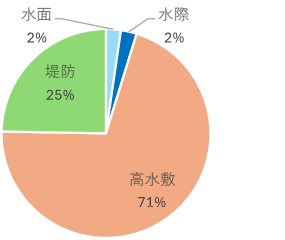
区分	項目	年間推計（千人）	利用状況の割合
利用形態	スポーツ	153	
	釣り	2	
	水遊び	21	
	散策等	307	
	合計	483	
利用場所別	水面	11	
	水際	12	
	高水敷	340	
	堤防	119	
	合計	483	

図 7.1　利用者数（年間推計）

出典：河川水辺の国勢調査





図 7.2　利用状況（左：散策、右：スポーツ）

出典：河川水辺の国勢調査

7.2　河川敷の利用状況

常願寺川には利用施設が 10 箇所あり、うち公園・緑地 6 箇所、運動公園 2 箇所、その他に防災センターと模型飛行機練習場がある。

なかでも天井川解消のために行われたタワーエキスカベータによる河道掘削土砂を用いて整備された常願寺川公園は、運動公園・憩いの場として数多くの人々に利用されているほか、殿様林緑地等が多くの人に利用されている。

表 7.1　河川利用施設一覧表

施設名	管理者	種類	位置		施設面積（㎡）
			距離標(km)	左右岸	
富山防災センター	国土交通省	防災SS	6.0～6.6	右	120,000
常願寺川公園	富山県	公園・緑地	6.8～8.8	右	280,000
常願寺川朝日運動公園	富山市	運動場	8.0～8.4	左	27,100
富山市常願寺川パークゴルフ場	富山市	公園・緑地	9.5～10.1	左	25,207
大日橋下運動公園	富山市	運動場	10.1～10.2	左	15,000
模型飛行機練習場	富山県無線航空協会	練習場	12.2	左	1,040
殿様林緑地	富山市	公園・緑地	15.7～16.8	左	124,000
常西地区緑道公園	富山市	公園・緑地	16.0～16.6	左	3,066
岩峅野桜づつみ	立山町	公園・緑地	16.2～18.0	右	80,000
上滝公園	富山市	公園・緑地	17.3～18.0	左	13,000

出典：河川水辺の国勢調査

表 7.2　高水敷利用状況[単位：m^2]

種類	国有地		民有地		合計	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積
公園・緑地	6	525,273	0	0	6	525,273
運動場	2	42,100	0	0	2	42,100
その他	2	121,040	0	0	2	121,040
合計	10	688,413	0	0	10	688,413

出典：表 7.1 の施設面積を集計



出典：河川水辺の国勢調査

図 7.3　高水敷利用状況(常願寺川公園)

8. 河道特性

8.1 河道特性

常願寺川は、立山連峰の 3000m 級の高山から一気に日本海に注いでいるため、河床勾配は山地部で約 1/30、河口付近で約 1/100 という急勾配を呈しており、我が国屈指の急流河川である。

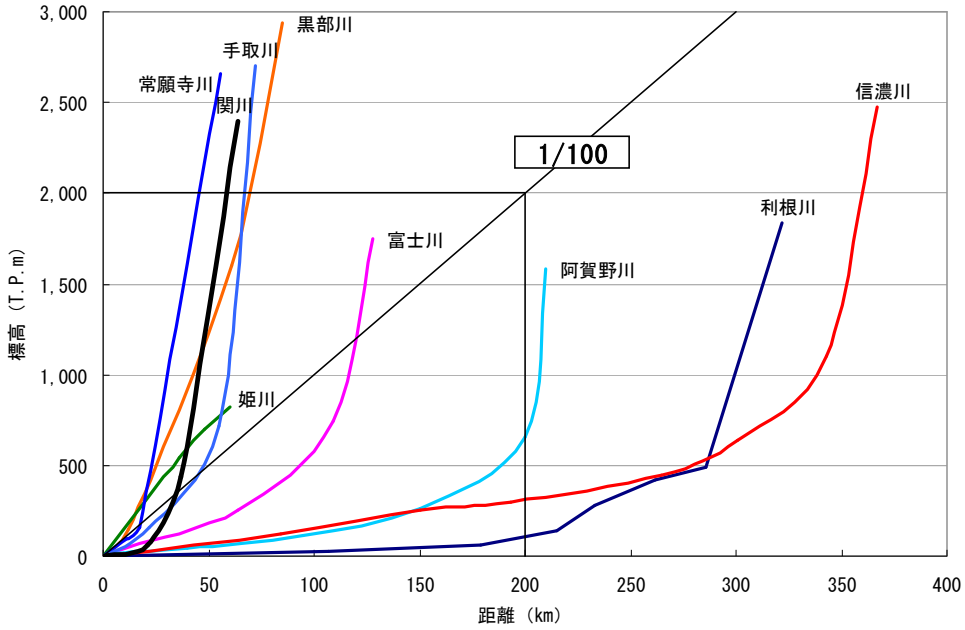


図 8.1 他河川との比較

(1) 常願寺川上流部（山間部）

上流域は、称名川と常願寺川の合流している千寿ヶ原から上流部であり、最上流部は立山連峰にあたり、急峻な地形となっている。

また、山地崩壊が著しいため、その対策として数多くの砂防堰堤が設置されている。

河床勾配は、千寿ヶ原（立山砂防事務所）から真川と湯川の合流点までは約 1/30 であるが最上流部では約 1/19 と急勾配となり、山地崩壊地形であるため、河床材料は堆積土砂や岩・礫となっている。



鳶崩れ



白岩砂防堰堤

(2)　常願寺川中流部（扇頂部）

中流域は、横江堰堤から千寿ヶ原付近の区間にあたり、河岸段丘が発達している。

河床勾配は、約 1/60 であり、河床材料は岩・礫となっている。横江堰堤から上流には貯砂量約 500 万 m^3 を誇る本宮砂防堰堤や瀬戸蔵砂防堰堤がある。



本宮砂防堰堤

(3)　常願寺川下流部（河口部から扇状地区間）

下流域は、河口から横江堰堤までの区間で、河床勾配は約 1/60 から約 1/700 となっている。河口部においては、河口から約 3.0km の間は過去に大規模な改修工事が行われ、河床勾配が緩くなっている。河床材料も、約 3km より上流は主として礫であるが、約 3km より下流は砂が主となっている。



常願寺川扇頂部付近



常願寺川直轄区間中流部（8.2k～）



常願寺川河口部

8.2　河床の経年変化

常願寺川は、扇状地区間においては天井川を呈す急流荒廃河川であった。昭和 24 年（1949 年）～昭和 42 年（1967 年）にかけて天井川の解消のため、タワーエキスカベーターによる河床掘削を実施し、その後、昭和 44 年（1969 年）8 月洪水により河床が上昇したものの、砂利採取等により、経年的に河床は低下し続けてきた。

現在では天井川が概ね解消され、全川的に河床変動は比較的小さい。

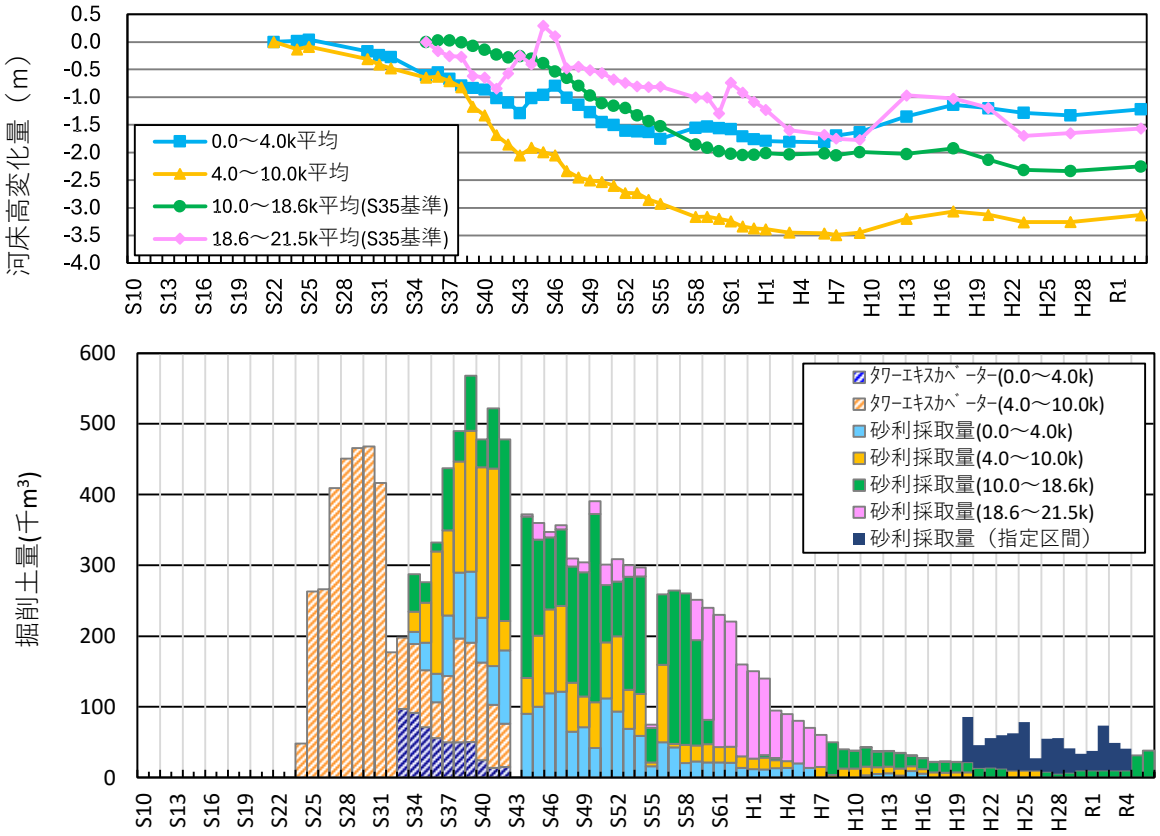


図 8.2　常願寺川における土砂掘削等と河床高の経年変化図

※河床変動高は、HWL における河積を HWL における川幅にて除して算出した平均河床高を、当該区間での単純平均にて区間平均河床高を算出し、昭和 22 年（1947 年）の河床高を基準に算出した。

9. 河川管理の現状

9.1 管理区間

常願寺川においては、洪水等による災害の発生を防止し、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の保全の観点から日々の河川管理を行っている。

常願寺川の管理区間及び延長は以下に示すようになっている。大臣管理区間は横江堰堤から河口までの全長 21.5km である。

上流部は、上滝地点から上流側が直轄砂防区域となっている。

表 9.1 常願寺川管理区間延長

管理者	河川名（区間）	管理区間延長（km）
国土交通省	常願寺川	21.5
富山県	支川含む指定区間合計	123.7
合計		145.2

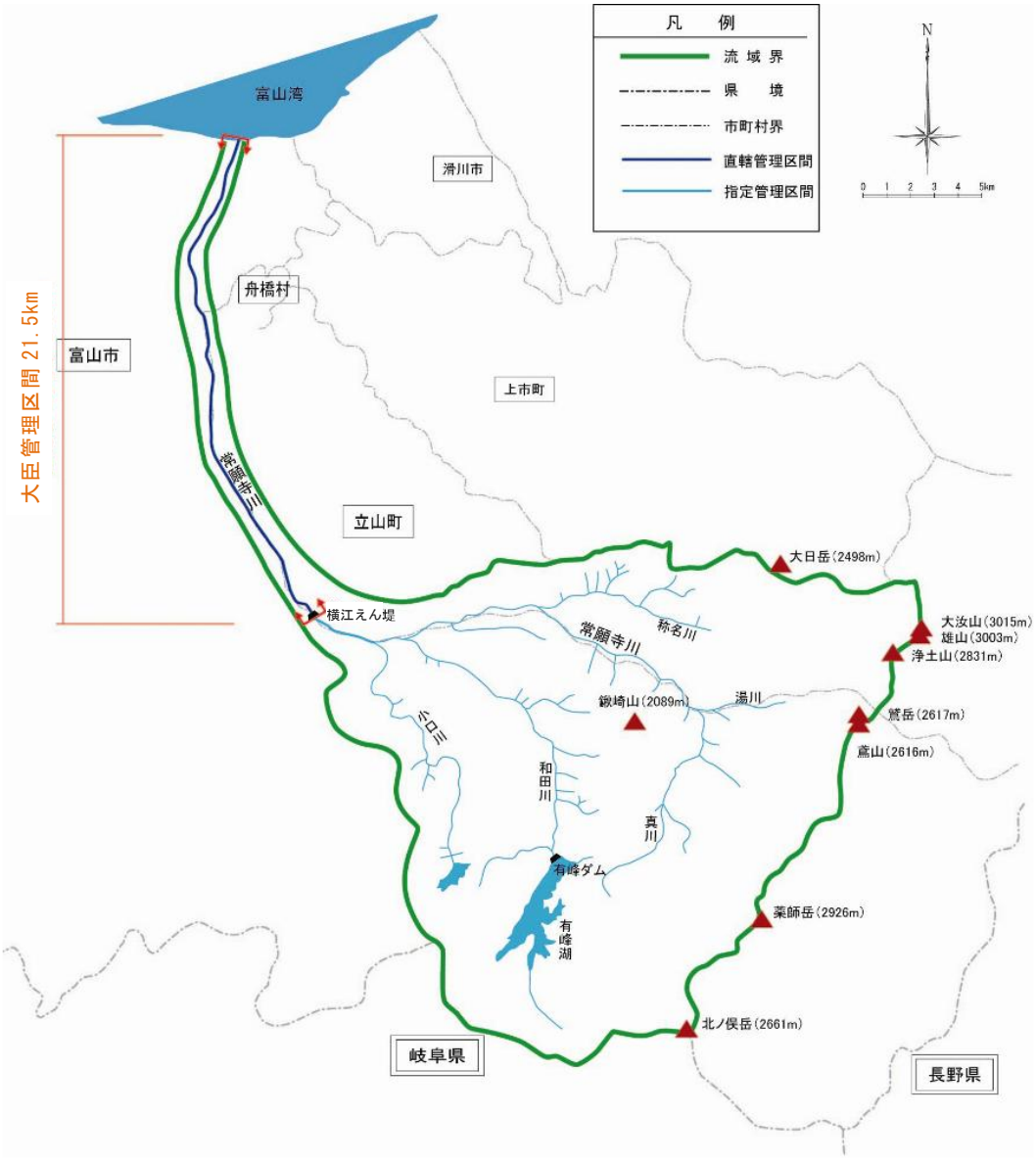


図 9.1 常願寺川大臣管理区間図

9.2　河川管理施設

常願寺川の河川管理施設は、堤防、護岸等の他、床固 2 箇所である。これらの河川管理施設の状況を把握し、適切な処置を講じるため、河川の巡視・点検を行っている。

また、許可工作物は、堰 1 箇所、樋管・樋門 12 箇所、橋梁 15 箇所、サイフォン 2 箇所の計 25 施設にのぼる（令和 8 年（2026 年）3 月現在)。各構造物については、河川管理施設同様の維持管理水準を確保するよう各施設管理者と協議し、適正な維持管理を行うよう指導している。

表 9.2　大臣管理区間堤防整備状況（令和 5 年（2023 年）3 月時点）

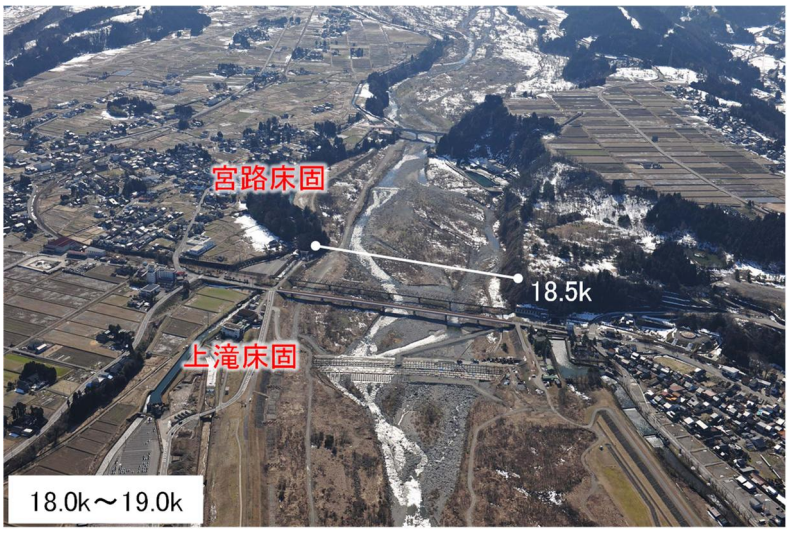
直轄管理区域延長（km）	施行令 2 条 7 号指定区間（km）	堤防延長（km）					
		計画断面堤防	暫定 H.W.L 以上	暫々定 H.W.L 以上	未施工区間	不必要区間	合計
21.5	0.0	32.0	11.8	0.0	0.0	0.0	43.8
比率（%）※		73.0	27.0	0.0	0.0	0.0	100.0

※比率は堤防不要区間を含めた値

令和 5 年（2023 年）3 月時点

表 9.3　河川工作物等一覧表（大臣管理区間）

河川名	箇所	名称
常願寺川	R18.0k-105.3m～L18.0k-81.0m	上滝床固
	R18.5k＋56.3m～L18.6k-68.9m	宮路床固



上滝床固・宮路床固

9.3　水防対策

9.3.1　河川情報の概要

常願寺川では、流域に雨量観測所 9 箇所、水位観測所 3 箇所を設置し、河川無線等により迅速に情報収集を行うとともに、これらのデータを使って河川水位予測等を行い、水防活動に活用している。これらの情報を重要な防災情報として、富山県等に提供している。

河川情報は、CATV ネットワークを利用した光ケーブルネットにより富山県内市町村へリアルタイムで情報を伝達する他、ホームページ『防災ネットとやま』により河川の状況を公開し、いち早く地域住民に提供することで、洪水からの被害軽減や水防に対する意識を向上させることに役立てている。

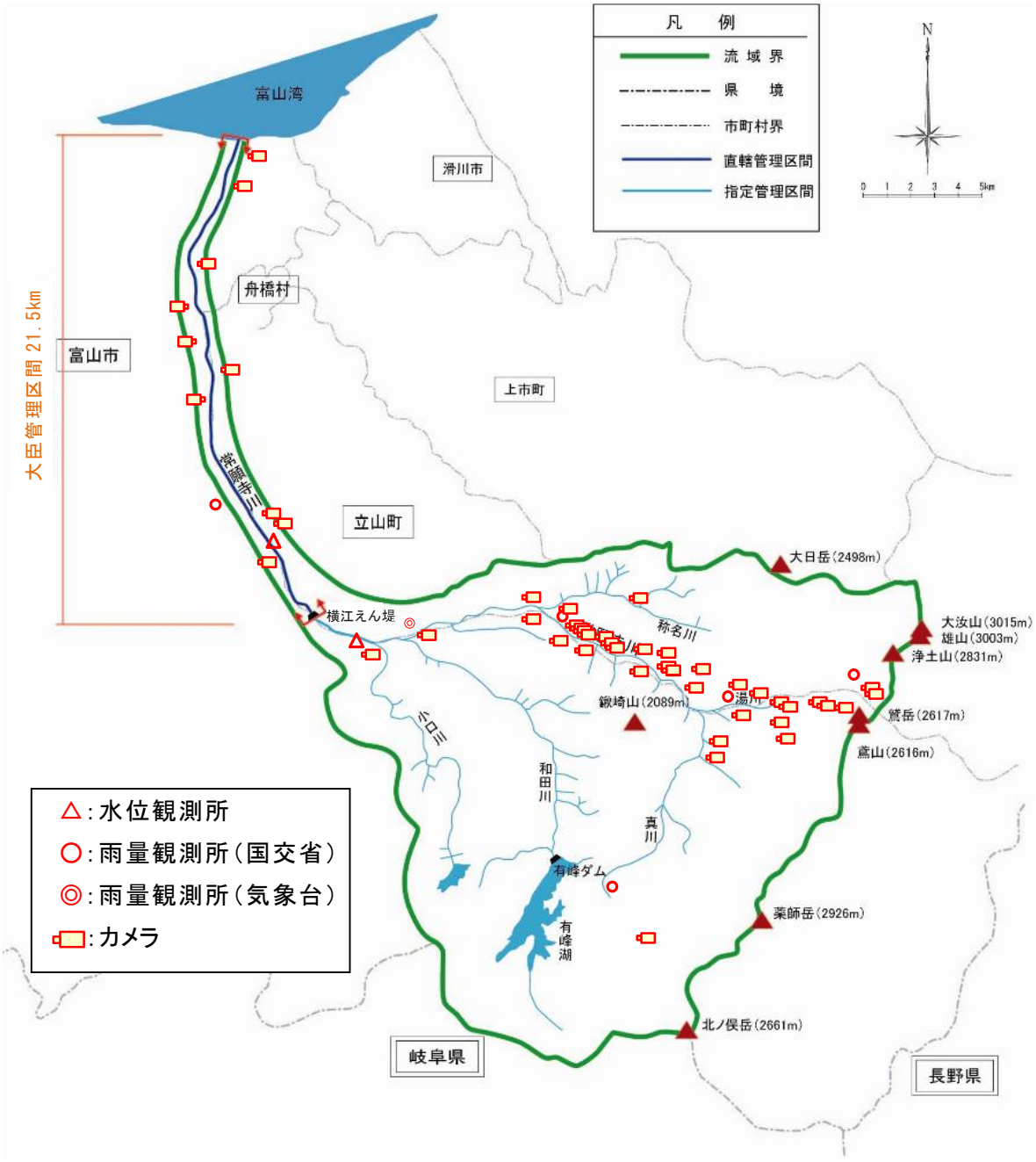


図 9.2　常願寺川流域の雨量・水位観測所位置図

9.3.2　水防体制

常願寺川には水防警報対象水位観測所を 1 箇所（大川寺）設置している。

洪水により災害が起こる恐れがある場合に、水防警報対象水位観測所の水位をもとに、水防警報を通知している。

常願寺川は、平成 13 年（2001 年）に「洪水予報指定河川」に指定されており、富山地方気象台と共同し、洪水予報、洪水警報の発表を行っている。

表　9.4 常願寺川水防体制対象観測所

水防対象観測所：大川寺観測所〔富山県富山市大山上野〕				
堤防高	水防団待機水位	氾濫注意水位	避難判断水位	氾濫危険水位
12.82m	4.20m	5.10m	5.24m	6.61m

9.4　危機管理の取り組み

9.4.1　水防関係団体との連携

常願寺川では、洪水からの被害の防止または軽減を図るため、国及び地方公共団体の関係機関が相互に連携し、洪水伝達訓練、水防関係団体との水防訓練・重要水防箇所の巡視・点検、水防資材の備蓄を行っている。



図 9.3　水防工法演習の実施状況

9.4.2　大規模土石流災害における関係機関との連携

大規模河道閉塞を伴う土石流災害は、過去の被災事例や複合的な現象から正確で迅速な情報の収集・伝達と行動を求められる。

平成 14 年（2002 年）10 月には、天然ダムによる大土石流を想定した防災訓練を、国・県・関係市町村や地域住民、自衛隊、報道機関、日本赤十字等の指定公共機関、各種団体等参加機関総数 1,016 名にて実施し、平成 16 年（2004 年）1 月には、大規模な地震と土石流災害を想定し、国・県・関係市町村や報道機関、NPO 等が参加の下、ロールプレイング方式による合同訓練を実施している。

9.4.3　浸水想定区域図の作成及び公開

常願寺川では、洪水時の被害を最小限に抑え、また、危機管理意識の啓発を図るため、平成 14 年（2002 年）9 月に浸水想定区域図を公表しており、流域関係市町村の地域防災計画の策定及び洪水ハザードマップの作成を支援している。

また、平成 27 年（2015 年）の水防法改正をふまえ、想定最大規模の洪水浸水想定区域のほか、家屋倒壊等氾濫想定区域を公表している。これらの洪水浸水想定区域等は、浸水区域に含まれる市町に提供され、ハザードマップが作成・公表されている。

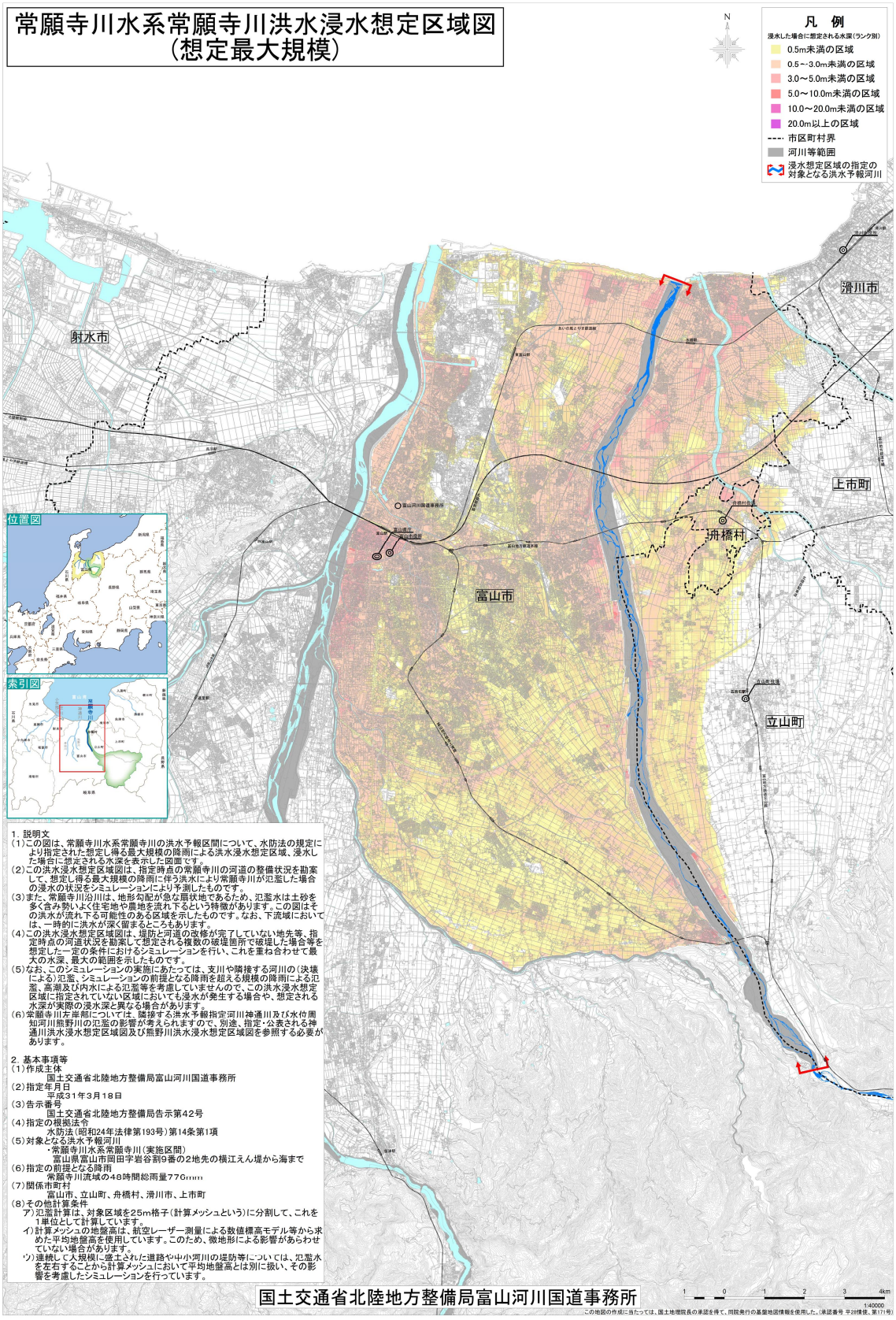


図 9.4　常願寺川水系常願寺川浸水想定区域図（平成 31 年（2019 年）3 月公表）

9.4.4　洪水ハザードマップの作成

常願寺流域関係市町では、水害による人的被害を軽減するため、浸水が予想される区域から避難するために必要な浸水情報、避難情報等の各種情報をわかりやすく図示した「洪水ハザードマップ」を令和２年（2020 年）６月に作成・公表した。

これは、住民に対して洪水時の心得や過去の洪水による被害等を記載することにより、防災意識の高揚を図るとともに、実際に避難指示等が発令された場合、住民の安全かつ迅速な避難が図られることを目的としている。

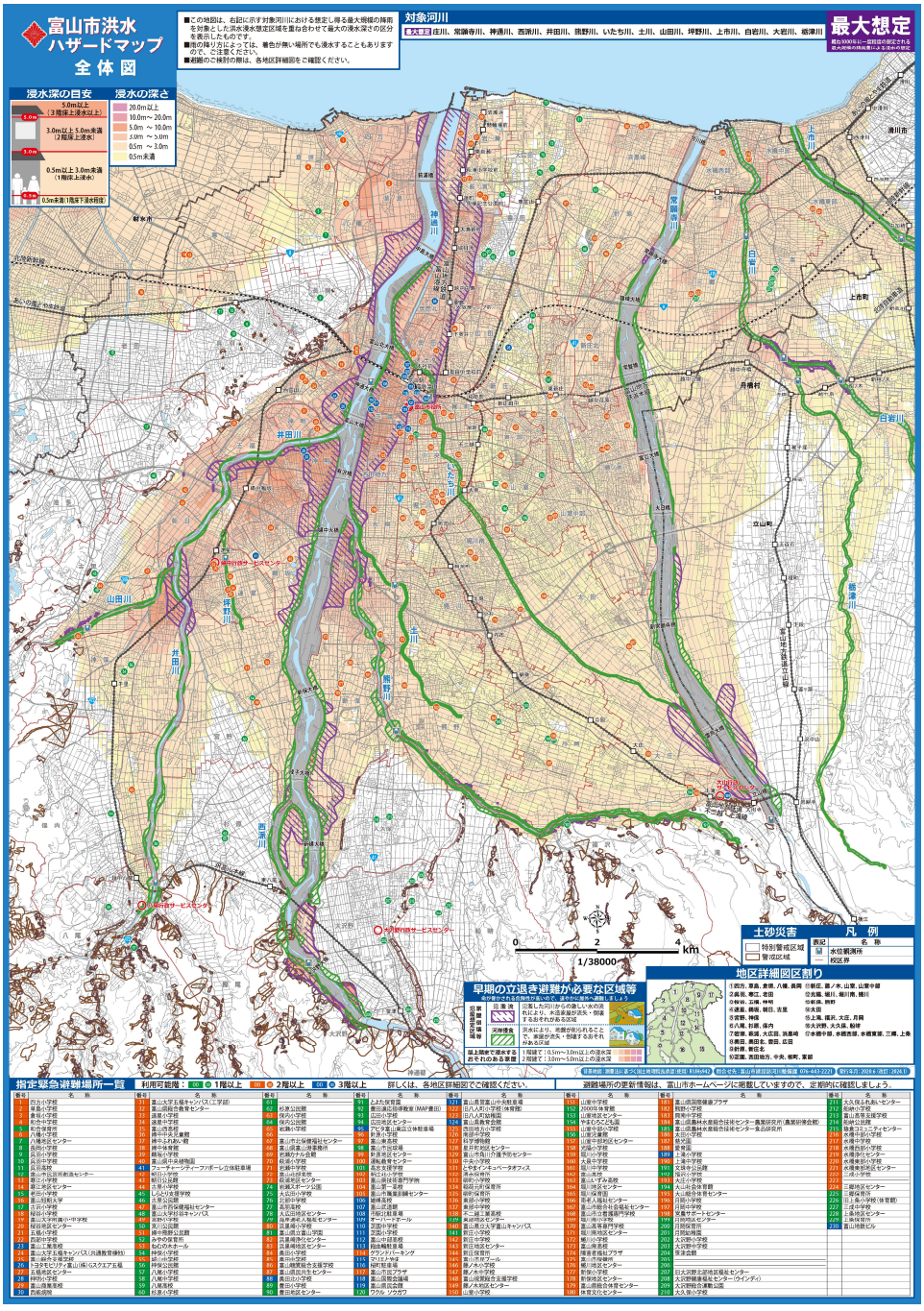


図 9.5　常願寺川流域洪水ハザードマップ（令和６年１月）

9.4.5　防災活動拠点の整備

常願寺川右岸 6.0k 付近に、北陸地方整備局管内の西部地区の防災拠点を担う、富山防災センターが平成 15 年度（2003 年度）に整備され、風水害や地震、雪害等の災害が発生したときに出動し、人命や財産及び経済活動を守っている。また、地方自治体と連携した災害対応を行うための相互支援基地としての役割も担っている。

平常時には、災害や防災技術に関する研究・開発と災害対策の訓練研修を行うなど、災害に備えている。また、防災・災害に関する展示室を一般に公開し、防災への啓発に役立てている。



図 9.6　富山防災センターと展示室「防災ナビルーム」

9.4.6　水質事故防止の実施

常願寺川における近年の水質事故発生状況は、以下に示すとおりである。

常願寺川では、河川に関わる水質汚濁対策に関する各関係機関相互の連絡調整を図ることを目的に、「富山一級水系水質汚濁対策連絡協議会」を設置し、水質の監視や水質事故発生の防止に努めている。協議会は、国・県・流域市町村で構成され、水質汚濁に関する連絡、調整及び水質汚濁防止のための啓発を行っている。

表 9.5　常願寺川の水質事故発生状況

年	発生件数
平成 31 年/令和 1 年	3
令和 2 年	0
令和 3 年	1
令和 4 年	2
令和 5 年	0
令和 6 年	1
合計	7

※年間(1 月～12 月)で集計

9.5　地域との連携

常願寺川では、地域住民が親しんでもらえる川づくりを一層進めるため、「ボランティア・サポート・プログラム」に取り組んでいる。その中で、富山県立雄山高等学校が常願寺川の清掃や美化活動を定期的に行っている。その他、沿川町内会及び子供会等においても、河川の美化活動に取り組んでいる。

また、沿川市町村の小中学校の協力により、簡易水質調査（水生生物調査）を実施することで水質を評価するとともに、参加者自らが常願寺川にふれ、状況を知ることにより水環境の保全への関心が高まり、河川愛護の意識向上につながっている。



図 9.7　簡易水質調査